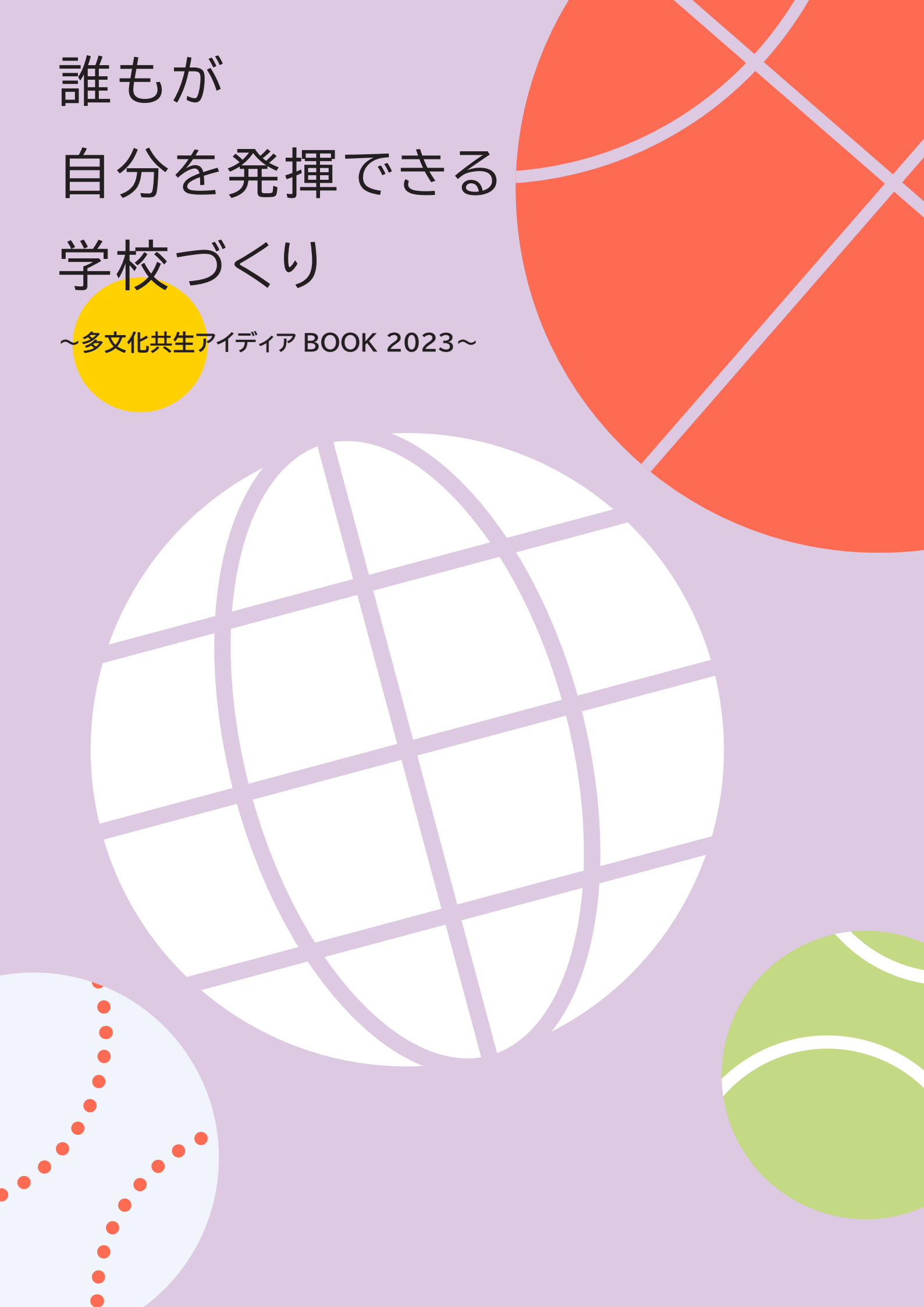


誰もが 自分を発揮できる 学校づくり

～多文化共生アイデア BOOK 2023～



はじめに

国際協力機構（JICA）は日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関であり、約 150 の国・地域で国際協力を展開しています。日本国内においては、これら国際協力を通じて得た知見を生かし、教育現場を対象に「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す学習指導要領などの学校教育の動向を踏まえ、国際理解教育 / 開発教育を支援する様々な事業を行っています。

近年、日本で暮らす外国人は増加の一途をたどっており、外国につながる児童生徒も年々増加しています。日本政府は、「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」（令和 5 年度改訂）を策定し、教育現場においても様々な取り組みが求められています。本対応策は、日本人と外国人が安心・安全かつ尊厳を持って暮らせる共生社会の実現のために目指すべき方向性を示したものです。教育に関してはライフステージに応じた日本語学習支援や環境整備、日本の学校生活への順応、進学及びキャリア教育、そして外国につながる児童生徒を受け持つ教員等の資質・能力の向上などへの取り組みの必要性が明記されています。

このような背景を踏まえ、JICA は 2021 年度より教育関係者を対象に「多文化共生の文化」共創プログラムを実施しています。3 年目を迎えた 2023 年度は、JICA 横浜を会場に全国の教員や教育委員会担当者 18 名が参加し、多文化共生の専門家による講演、外国につながるのある方をお招きしての座談会、移住者がどのようにお互いの文化を尊重し共存を目指したかを学ぶための海外移住資料館の見学、参加者同士での対話を含む全 2 回 3 日間のプログラムを行いました。今回の研修では「『多文化共生の文化』をつくるために私たちにできることは何か」をテーマに、参加者それぞれの経験や取り組み事例の共有、抱えている課題について議論を重ね、お互いに学びを深めました。本研修での学びや出会いが、今後の取り組みへの糧となることを願っております。

本冊子「誰もが自分を発揮できる学校づくり ～多文化共生アイデア BOOK 2023～」は、本研修の参加者が、各々の経験や知見、そして研修での気づきや学びを活かして考案した、自身の学校や地域で実際に行う「多文化共生の文化」づくりの取り組みをまとめたものです。授業や学校内での実践、課外活動での取り組み、保護者や外部との連携、そして教員自身の学び等、たくさんのアイデアが掲載されています。本冊子が、学校・地域における「多文化共生の文化」を育むためのきっかけやヒントとして、多くの教室・学校・地域での実践の一助となれば幸いです。最後に、本研修にご協力・ご尽力いただいたすべての皆様に、この場を借りて心から御礼申し上げます。

JICA 横浜
所長 大野 裕枝

誰もが自分を発揮できる学校づくり ～多文化共生アイデア BOOK 2023～

「誰もが自分を発揮できる学校づくり ～多文化共生アイデア BOOK 2023～」(以下本冊子)は、2023年度 JICA「多文化共生の文化」共創プログラムの参加者が、自身の経験や知見、さらに本プログラムから得た学びをもとに、今後取り組みたい活動を考え、そのアイデアをまとめたものです。

本冊子は、教室・学校および地域で必要とされている、多文化共生に向けた取り組みのために活用されることを目的としています。

目次

1. 「多文化共生の文化」共創プログラムについて	
(1) ファシリテーターメッセージ	04
(2) 2023年度「多文化共生の文化」共創プログラム概要	06
(3) プログラム参加者	10
2. 「多文化共生の文化」がある学校とは？	11
3. 「多文化共生の文化」づくりのための活動アイデア集	14
4. 資料	
(1) 講演資料「移民時代に多文化共生の文化を創る～そのヒントと考え方～」(森茂 岳雄 氏)	69
(2) 多文化共生のための参考文献・教材・資料リスト	85
付録	
海外移住資料館	95
11か国の教育制度・学校ガイド集	96
JICA 国際理解教育／開発教育のためのプログラム案内	97
JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト	100

活動アイデア集＜校種別＞ タイトル・所属先名・研修参加者氏名

- 14 | 一人一人の違いを認められる多文化共生の文化を築くために
入間市立狭山小学校 寺西 雅子
- 16 | Break Through な多文化共生の文化の共創
金沢市立大徳小学校 角納 裕信
- 19 | 教科書の内容に多文化共生ちょこっとアイデア（小学5年生向け）
大津市立堅田小学校 竹辺 このみ
- 22 | 「自己理解・他者理解・自己開示→対話→考動」を通して多文化共生の文化を創る
AIC 国際学院京都 初等部 田口 直也
- 25 | 感性を育てる多文化共生
京都市立高雄小学校 坪内 昌子
- 27 | 学校・教材・授業でつながる 互い・違いを認め合う 多文化共生の文化の土壌づくり
和泉市立信太小学校 鶴川 仁子
- 30 | 「異なる文化」を受け入れ、誰もが安心して過ごすことができる学級・学校を目指して
広島大学附属三原小学校 黒崎 有夏
- 33 | 違いを楽しむことができる子どもの育成～多文化共生の土壌づくり～
熊本市立城南小学校 舩田 大生
- 35 | 地域コミュニティと連携した多文化教育プログラムの強化
神戸市立義務教育学校八多学園 郡 守彦
- 38 | 多文化共生アイデア 30 連発くらい
甲賀市立水口中学校 井上 陽平
- 44 | 誰もが安心して過ごせる社会づくりを目指して
熊本市立出水南中学校 今里 智千加
- 46 | 多文化共生のためのグローバル人材育成プログラム～NZ留学での出会いが笑顔であるために～
茨城県立古河中等教育学校 藤田 靖雅
- 50 | 「Our Team」～宮崎からツナガル世界～
宮崎学園中学校・高等学校 伊東 望
- 53 | 芸術を活用した「多文化共生の文化」の場づくり
東京都立総合芸術高等学校 渡邊 千尋
- 56 | 誰もが幸せで生きやすい学校生活づくりに向けて
名古屋市立若宮商業高等学校 杉山 茉莉
- 58 | 専門高校における地域のグローバル人材育成を目指した異文化交流体験
鳥取県立境港総合技術高等学校／島根大学教職大学院 赤木 綾香
- 61 | 一人一人を大切に、自己肯定感を育みながら楽しく学ぶ、特別支援教育における多文化共生の文化
埼玉県立入間わかさ高等特別支援学校 浜中 絃増
- 65 | 一人一人の自己実現のために
神戸市教育委員会事務局 学校教育課 石動 徳子

「多文化共生の文化」共創プログラムについて

(1) ファシリテーターメッセージ

1. 本冊子を手にとられた方へ

「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイディア BOOK2023～」を手にとられた方は、こうした学校づくりや、授業づくり、コミュニティづくりに興味をお持ちの先生方、保護者の方、学生の方など様々だと思います。

この冊子は、そんな皆さんが、「多文化共生の文化」の共創に向けて、日々、現場で試行錯誤を重ねる先生方の思いと実践と、様々な具体的アイディアに触れながら、自らの現場でそれを実践するヒントに出会える本です。全国各地の小学校、中学校、高校、特別支援学校、そして教育委員会で、多文化共生に携わる 18 名の先生方の探究と実践から、「なるほど!」と思う取り組みや、共感する思いに、きっと出会えると思います。

ご自身にとって身近な対象、校種、地域を見つけていただいて、その活動から読み始めていただくのも構いませんし、気になるアイディアやテーマから読んでいただくのも良いかもしれません。個人的には、背景や参加者の先生お一人お一人の思いやそこから生まれた活動を丁寧に最初からじっくり読んでいくのがおすすめです。

2. 本冊子を読み始める前に

この冊子を読み始める前に、紙とペンをご用意ください。そして、ぜひ、次の「3 つの問い」に答えてみてください。今回の「多文化共生の文化」共創プログラムでは、実際にこれらの問いに沿って、参加者の皆さんと一緒に理解とアイディアを深めていきました。

Q1. なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？



自分にとって



学校にとって



社会・世界にとって

Q2. 自分の創りたい「多文化共生の文化」とは何か？

Q3. 多文化共生の文化を共創するために、やってみたいこととは何か？

(アクション・アイディア)

皆さんはどのようなことを書きましたか？本冊子では18人の先生、お一人お一人がこの問いに答え、アクション・アイデアを共有されています。お考えの近い先生がいるかもしれないですし、共感する言葉にもたくさん出会うと思います。ぜひ、ご自身の思いと照らし合わせながら、お読みください。

3. 多文化共生の文化を共創する場づくり

最後に、今回のプログラムで特に大切にしていたことを二つ共有させていただきます。それは、GiFTが「学びの場づくり」をする際に必ず用いる「地球志民（グローバル・シチズンシップ）プロセス」と「ストーリー・ベースド・ラーニング」です。

日本で暮らす外国人数、そして、外国につながる児童数が増加している中、「多文化共生の文化」はいかに共創できるのでしょうか。地域によっても、校種によっても、状況は違い、正しい一つの答えがあるわけではありません。18人の先生方の背景も大きく異なります。

ただ、一つ共通していることは、これからの地球社会に「多文化共生の文化」は誰にでも必要になるということです。地域はもちろん、日本、世界、そして、個人の中にも、多様性の理解やつながりが必要とされていきます。

そのため、このプログラムでは突然、社会の課題や問題点を話し合うのではなく、「地球志民プロセス（図1）」にのっとり、まずはSTEP1の「自己を知る、受け入れる」からスタートし、STEP2 他者理解、STEP3 共創、STEP4 社会への貢献・参画（実践）というステップを踏んでいきました。先生お一人お一人が持つ想いや背景を対話し、聴き合い、その中から、問いやアドバイスが生まれ、これからの未来を創る「多文化共生の文化」が共創されていきました。

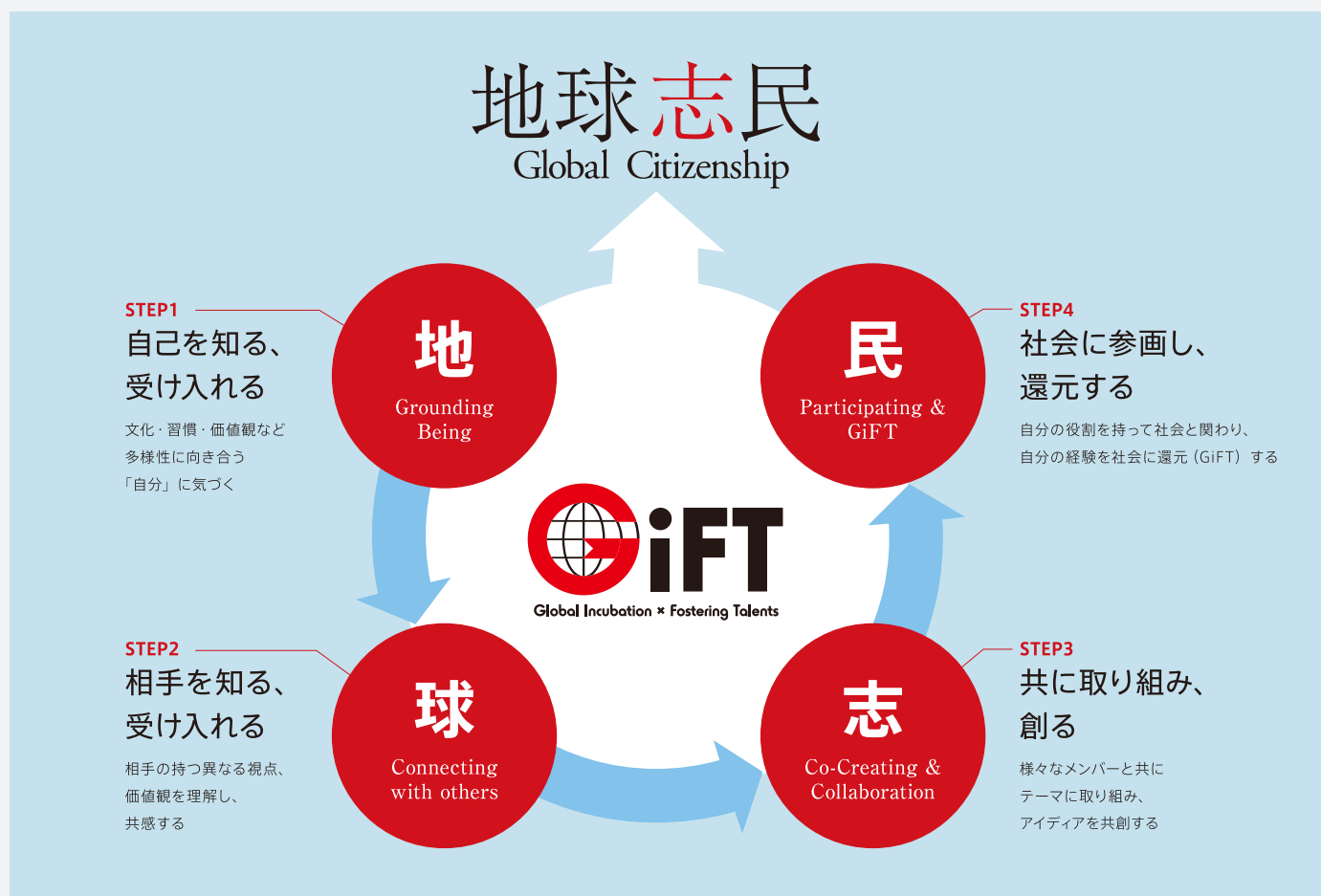
また、このSTEP1 自己理解、STEP2 他者理解を深めるために、外国につながるゲストのお話を伺う際も、人生を0歳から今まで、その時の感情の起伏とともにお話しいただく「ストーリー・ベースド・ラーニング」の手法でご共有いただきました。ご自身が当事者として味わってきた感情や思いを深く知ることで、身近な多様性にも気づき、一人一人の人生を大切にしようとする文化が生まれていきました。

本冊子は、ノウハウ本というよりも、「多文化共生の文化」を共創するために、志を共にし、試行錯誤を繰り返しながら、活動する先生方のあり方や挑戦を学ぶ冊子でもあります。

児童、生徒、地域に向き合いながら、挑戦と共創をされる一つひとつの物語に勇気をいただきながら、ぜひ、共に「多文化共生の文化」を生み出す仲間になりましょう！

本冊子から、多くの方々がエンパワメントされ、多文化共生の文化が広がりますように。

プログラムデザイン・ファシリテーター
一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）代表理事
辰野まどか



地球志民プロセス（図1）

(2) 2023年度「多文化共生の文化」共創プログラム概要

「多文化共生の文化」をつくるために、私たちにできることは何か？」をテーマとして、全国から集まった18名の参加者の皆さんとともに、3日間の研修をJICA横浜で実施しました。研修では、様々な学びやワークショップや対話を通じ、「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか」という問いに向き合いながら、個々の多様性を認め合えるような学校・学級づくりのための取り組みアイデアを考えました。

第1回研修 1日目 11月11日(土) 10:00-17:30

「多文化共生の文化」の共創につながる各自の取り組みと課題の共有

研修のオープニングと自己紹介のあと、参加者同士で所属先の多文化共生に関する現状や課題を共有するワークを行いました。事前に作成したスライドをもとに、外国につながる児童生徒の増加に伴い日本語指導の教員研修を学校で実施していることや、児童生徒との対等な関係性づくりを目指す取り組みなどが話されました。また、同じ地域の中でも日本語教室がある学校とない学校があることや、日常の業務で多忙なため必要な人が教員研修に参加できない現状があるなど、参加者が日頃から感じている多文化共生の文化づくりに向けた課題も共有されました。

多文化共生ワークショップ：「多文化共生の文化を構築するために」

ゲスト：カーン 宇愛乃氏 / 伊藤 忠明氏（公益財団法人 海外日系人協会、JICA 横浜 海外移住資料館「展示・イベント部門」担当）

外国につながる生い立ちや移住を経験した当事者である2名のゲストから、これまでの人生についてお話を聞きました。バングラデシュ人の父と日本人の母を持ち、日本で生まれ育ったカーン氏からは、幼少期から自身のアイデンティティが揺らぐ思いや、学生時代に感じた悩みや葛藤、またそのような中でも「自分自身でいい」と思えるようになった経緯などを丁寧にお話いただきました。そして日系4世としてペルーで育ち、幼少期から日本とペルーを行き来して暮らしてきた伊藤氏からは、移住のタイミングでの気持ちの変化や自分なりの捉え方、子どもの頃打ち込んだことやその動機、そして現在日本で移住についての研究をするに至った経緯を詳細にお話いただきました。

参加者はカーン氏、伊藤氏のストーリーを聞いて感じたことをメッセージとして届け、最後に質疑応答の時間を設けました。



ゲストのカーン氏・伊藤氏との集合写真

参加者からのコメント

当事者の方のライフストーリーに触れることは今までなかったので、大変勉強になりました。日系と言っても、その言葉が指すものの範囲は広く、一人一人のルーツやその方がどのように自分自身のアイデンティティを捉えているかなどを聴くことが大切だと思いました。

カーンさんのことを励ましてくださった先生方の気持ちは教員だったらみんなが持つもので、その時の生徒の気持ちを聞いているいろんなことを考えさせられました。伊藤さんのお話はとても興味深く、日本人より日本のことをよくご存じで無知な自分が恥ずかしくなりました。自分のルーツが日本にあることをあんなに大事に思う人がいることが来年度以降の私の取り組みのヒントになりました。

そもそも海外移住の歴史に関する知識がなく、何となく知っただけでした。しかし、当事者の話を聴くことで、歴史が歴史で終わるのではなく、今を生きる人につながっていると感じました。その人自身と向き合うためにも、思い込みでなく、歴史的事実についてもその人自身に対しても知ろうとしなければならぬと思いました。

海外移住資料館 見学ツアー

ツアーに先立って伊藤氏より海外移住資料館を見学する際の視点や問いを紹介いただきました。資料館ではまず、伊藤氏のガイドによる見学ツアーをし、その後は参加者が自由に見学する時間を設けました。参加者の中には日本人の移住の歴史を初めて深く知って驚く様子もあり、質問をしながら展示に見入っていました。特に、戦時中の各国における移民の扱いの違いや、「いみんトランク」をはじめとする移住の歴史を学べる教材に強く関心を寄せているようで、見学後の振り返りでは様々な気づきや感想が共有されました。



伊藤氏のガイドのもと海外移住資料館を見学

参加者からのコメント

ここまでたくさんの人が移民として海外に渡っていたことを知りませんでした。移民として渡った背景も多様で興味深いものでした。現代の移民問題を考える際に、重要な示唆を与えてくれると思いました。

移民の歴史や一人一人のストーリーを知ることができました。日本が送り出していた時代を知ることは、今の外国人を受け入れる側の日本（日本人）にとって、大切なヒントがあると気づかされました。

都道府県別の移住者人数がわかりやすく、日本人の移住を身近に感じる資料でした。

一番感動したことは、移住したときに欧州の人たちはまず教会をつくるが、日本人はまず学校をつくるということです。日本に移住してきた人を支えられるように社会のしくみを整えていくことも大切だし、いろんな国を知ること、これからの多文化共生社会に必要なのかなと思いました。

第1回研修 2日目 11月12日(日) 10:00-17:00

講演：「移民時代に多文化共生の文化を創る ～そのヒントと考え方～」

講師：森茂 岳雄 氏（中央大学名誉教授 / 日本国際理解教育学会前会長 / 海外移住資料館学術委員）

講演では、移民や移住の歴史、そして今の移民の現状や移民学習の意義、多文化共生の捉え方をお話しいただくとともに、それらを学ぶために有効な教材やワークショップを紹介いただきました。また、近年の世界における移民の数や、日本における移民数の推移について解説し、それを踏まえた移民学習の意義について説明されました。



森茂氏による講演

さらに JICA 横浜の海外移住資料館や関連する教材、また、あるプロジェクトで行われたワークショップの事例を紹介いただきました。

「学校の友だちが、自分が持ってきたチョコレートを食べってしまった。この行動についてどう思うか？」

「友だちがお金を貸して欲しいと言ってきた。あなたなら貸すか、貸さないか？」

などのシナリオ例について、研修参加者に考えを聞きながら取り上げ、中国と日本の児童生徒の回答の違いを例に解説され、会場では驚きの反応がありました。また、国による違いだけでなく、ひとつの学級の中でも様々な回答があることも補足説明し、集団の中での相互理解にも言及されました。参加者の皆さんは、異なる価値観や考え方を持つ人との共生について実感を持ったようでした。（P69 講演資料参照）

参加者からのコメント

今まで移民から多文化共生社会を考える視点は持っていなかったもので、新しい考え方を得ることができました。

自分が持つマジョリティとしての特権について考えさせられました。マイノリティを理解した気になって、無神経なことをしていないだろうか不安になりました。児童理解のためにも、他国の文化や価値観を知り、自らつながっていかなければならないと感じました。

「知らない」ことの怖さ、危険性を感じました。また、価値観など様々な違いは「日本人、外国人」という枠組みではなく、私たち一人一人が全員違った価値観や考えを持っており、誰一人として同じ人はいません。そう考えると、「違い」は当たり前にあることで、やはりそれを尊重する、それが難しくてもせめて認め合うことができれば、多文化共生の文化に近づくと感じました。

ワークショップ：「自分が見たい多文化共生の文化がある学校とは？」 「自身の勤務する学校で多文化共生の文化をつくるために、どんなことができるか？」

ここまでのお話や見学、講演、対話などをふまえ、「多文化共生の文化がある学校とはどのような状態か」を小グループで対話し、キーワードを記入した付箋やホワイトボードを用いてまとめ、発表をしました。(P10「対話から生まれた「多文化共生の文化」がある学校の問題」参照)

また今後の取り組みを考えるにあたり、「自身がつくりたい多文化共生の文化」「そのために今までやってきた取り組み」「これから取り組みたいこと・アイデア」を一人一人がワークシートに記入し整理しました。書き出すことで、多文化共生の文化づくりのために自身ができることがたくさんあるという気づきが生まれ、早く帰って実行したいという声もあがりました。



グループごとに話し合った内容を発表

対話：「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？」

第1回研修の2日間には、様々なインプットや参加者同士の対話の中で、「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？」という問いに繰り返し向き合い、考える時間を設けました。

研修開始時、ゲストトークや海外移住資料館の見学後、そして講演後の3回のタイミングで、自分にとって / 学校にとって / 世界・社会にとっての「多文化共生の文化」や、その都度捉え直したことや新たに考えるようになった視点などをワークシートに記入し、共有し合いました。

なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？ 対話を通じて共有されたコメント

【1日目 研修開始時】

- ・「自分」は、自身が多文化共生に対する知識がないから、それを考えていく環境に飛び込みたいと思った。「学校」には現在多文化共生の環境がなく、外国籍の生徒がいざ来た時に何もできないということが懸念。またそのような学校環境づくりによって、生徒には人との関係づくりを学んでほしい。「世界」は、まずは文化を理解して共有し日常生活を安心して暮らせることが、多文化共生の目標なのではないかと思った。

【1日目 ゲストトーク・海外移住資料館見学後】

- ・移民の歴史や一人一人のストーリーを学ぶと、自分の人生にも価値があるのだなと思える。そして相手の人生にも価値があると思える。そのような価値観が子どもたちにもあれば、自分や他者を傷つけることも減っていくのではないかと感じた。これが学校という集団の意義のように思う。
- ・ゲストトークや海外移住資料館の見学を通じて、自分と他者を認めることが、自分自身のアイデンティティの確立につながるのではないかと考えた。

【2日目 講演後】

- ・ 講演で共有された動画から外国につながる子どもたちの気持ちを想像して涙が出そうになった。人に任せるのではなく、まずはよく知って自分で何かにしたいといけなと思った。
- ・ 多文化を強調するほど、人間関係が希薄になっていく危険性は知っておかないといけなと思う。友達でも敵でもない人たちが多数いて、そういう人たちにどう感情を持つかが重要。また多数決のときなど、誰しも自分がマイノリティになることがあるので、自分もまたマイノリティであるというアプローチがあってもよいと思った。
- ・ 一つの目標と一緒に向かっていくような学級づくりを目指すならば、特権を持っている子がそうでない子のサポートができるように、教師がさらなるサポートをしていかなければいけないと感じた。

第2回研修 12月9日(土) 10:00-17:00

対話：「このメンバーで、未来に向けて共創したい「多文化共生の文化」とは？」

第1回研修からの近況報告をした後、「このメンバーで、未来に向けて共創したい「多文化共生の文化」とは？」というテーマで、キーワードを出し合うワークを行いました。気づきとして「知ること、周囲と話し合うことが大切。」や「全て一人ではできないことで、文化とは誰かと一緒につくっていく、生まれていくもの。」というコメントがあがりました。

また、「この文化をつくっていく私たちがどうありたいか？」という問いには、「知って学んで伝えていくことを続けていきたい。」「仲間を増やしたい。」などの言葉が共有されました。



「このメンバーで、未来に向けて共創したい「多文化共生の文化」とは？」をテーマに対話

「学校に多文化共生の文化をつくるための取り組みアイディア」の共有・ブラッシュアップ

第1回研修でのインプットや対話をふまえ、参加者の皆さんは今後自身の所属先で取り組みたいことやそのアイディアを事前に考え、シートに記入して準備をしました。それをもとに校種別のグループで一人ずつ共有し、アイディアをよりよいものにするため、他の参加者からコメントやフィードバックをもらいました。

またそれらのアイディアをより具体化するため、さらに話したいことや相談したいことを各自で設定し、近いテーマでグループを作って深める時間を設けました。「授業実践教材」「周りの教員へのアプローチ」「マイノリティ理解・学校全体の巻き込み方」「多文化共生の土台づくり」「外国籍の子どもの学力アップ・日本語教育」というテーマで5つのグループができ、最後には話し合ったことを共有し、さらに他の参加者からアドバイスが追加されました。



校種別グループでの各自のアイディア共有と意見交換

■主催：独立行政法人 国際協力機構（JICA）横浜センター
長縄 真吾（市民参加協力課 課長）
中野 貴之（市民参加協力課）

■運営事務局：一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）
辰野 まどか（代表理事）
忍 頼子（グローバル教育プロデューサー）
岩崎 沙織（グローバル教育コーディネーター）

(3) プログラム参加者

都道府県	所属	氏名	職名・担当業務
------	----	----	---------

● 小学校

埼玉県	入間市立狭山小学校	寺西 雅子	教諭、3年学年主任、 国際理解・外国語活動主任
石川県	金沢市立大徳小学校	角納 裕信	教諭、理科専科
滋賀県	大津市立堅田小学校	竹辺 このみ	教諭、5年生担任、外国語主任
京都府	AIC 国際学院京都 初等部	田口 直也	Japanese・PE 担当
京都府	京都市立高雄小学校	坪内 昌子	校長
大阪府	和泉市立信太小学校	鶴川 仁子	講師、2年担任
兵庫県	神戸市立義務教育学校八多学園	郡 守彦	主幹教諭、生活指導・地域学習
広島県	広島大学附属三原小学校	黒崎 有夏	教諭、4年担任、外国語教育担当
熊本県	熊本市立城南小学校	舩田 大生	教諭、自閉症情緒障害特別支援学級担任

● 中学校

滋賀県	甲賀市立水口中学校	井上 陽平	教諭、特別支援学級担任
熊本県	熊本市立出水南中学校	今里 智千加	教諭、1年生担任

● 中等教育学校・中高一貫校

茨城県	茨城県立古河中等教育学校	藤田 靖雅	教諭、3年次担任、理科部、教務部
宮城県	宮崎学園中学校・高等学校	伊東 望	教諭

● 高等学校

東京都	東京都立総合芸術高等学校	渡邊 千尋	主任教諭、教務、初任者指導
愛知県	名古屋市立若宮商業高等学校	杉山 茉莉	教諭
鳥取県	鳥取県立境港総合技術高等学校／ 島根大学教職大学院	赤木 綾香	教諭（研修中）

● 特別支援学校

埼玉県	埼玉県立入間わかさ高等特別支援学校	浜中 絃増	教諭
-----	-------------------	-------	----

● 教育委員会

兵庫県	神戸市教育委員会学校教育課	石動 徳子	指導主事、 日本語指導を中心とした外国人児童生徒等支援
-----	---------------	-------	--------------------------------

「多文化共生の文化」がある学校とは？

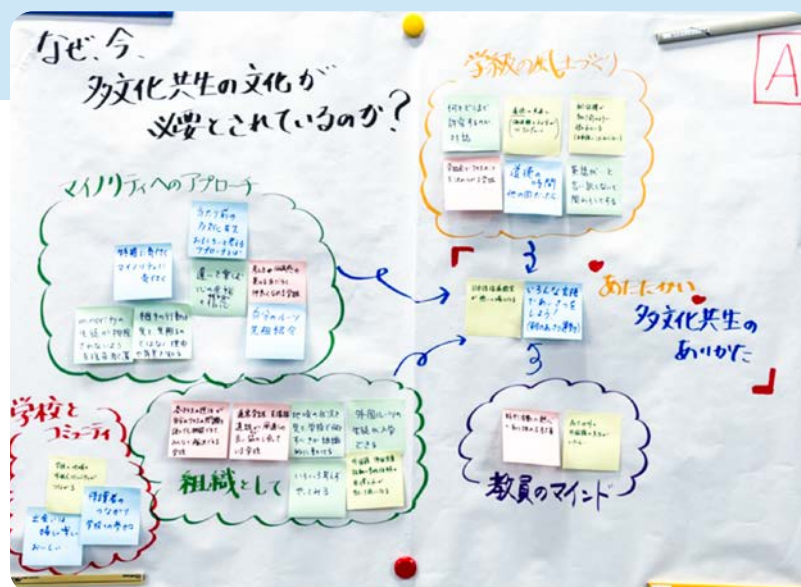
—対話から生まれた「多文化共生の文化」がある学校の概念—

2023年度 JICA「多文化共生の文化」共創プログラムでは、海外移住資料館の見学や外国につながる当事者からのゲストトーク、講演、ワークショップ、参加者同士での意見交換などをふまえ、参加者一人一人が「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？」を考えました。

その上で、さらに「多文化共生の文化がある学校とは？」をテーマに小グループで対話し、その概念を整理しました。各グループから次のような考えやキーワードが共有されました。

Aグループ

(寺西、黒崎、藤田、赤木)



マイノリティへのアプローチ

ちがいを受け入れる・楽しむ・寛容性、外国ルーツや発達障害の子が排除されないような風土。

組織として

学級会でクラスのことを決定できる、少数意見が認められる、隣のクラスの先生に相談できる、支援級（特別支援学級）・通級（通級指導教室）の先生に相談できる。

学校とコミュニティ

保護者や地域が参加しやすい。

学級の風土づくり

対話、道徳の時間の捉え方（価値観を教師が教えるのではなく子どもたちが価値観をつくっていけるようなもの）。

教員のマインド

多言語の放送、特別活動、「とりあえずやってみよう」という教員のマインド。

その他

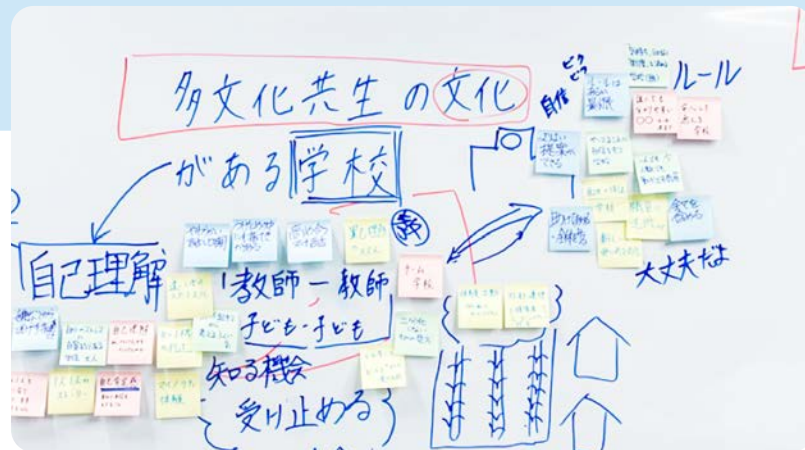
日本語指導教室を、言葉だけでなく交流できるオープンな場にする、朝のあいさつから多言語にするなど、あたたかい共生の雰囲気。

Bグループ

(角納、郡、井上、浜中)

自分のことを知って自己肯定感を高め、自分に自信を持つてほしい。

ルールがある。(優しさに頼らずに制度としてある。)



多文化共生がある学校の条件は、教師がしっかり学んで、自信を持ってそれを言えるような環境。

とりあえず行動して、それをサポートしてくれる人を巻き込む。

Cグループ

(鶴川、舛田、今里、渡邊)



児童生徒 (マジョリティができること)

外国籍の児童生徒のことを理解する。保護者・教員全体でサポートできるようになる。

外国籍の児童生徒のために多言語の校内放送をする。掲示物も分かりやすくなる工夫をする。

互いの文化を発信する機会。困っている人を助け合う文化。

保護者

安心感を持ってもらうため、保護者と対話をする。

こちらからアプローチして教育方針や考えているサポートを伝え、そこから対話や相談につなげる。

コミュニティを開いて、地域と保護者がつながれる環境で多国籍の文化を広げたい。

教員

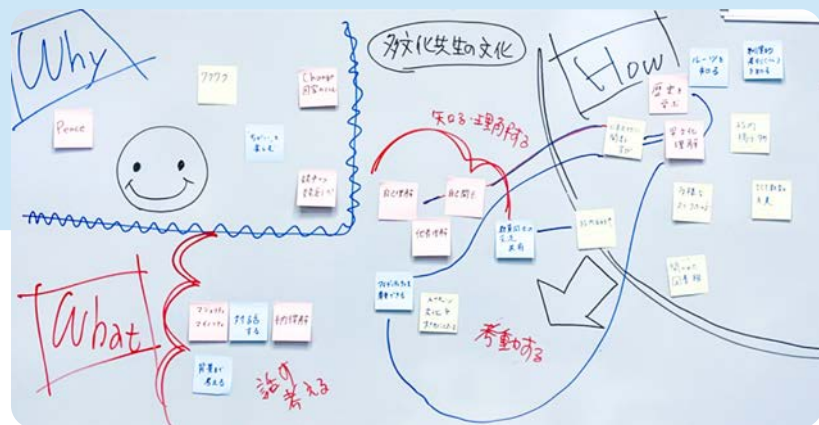
身構えずに一人一人をしっかり受け止めて、多文化共生について知る。

ついていけない子がいても受け止める。

助けてもらうことが多い子も、自分が助ける側になれるようにサポートする。

D グループ

(竹辺、田口、伊東)



WHY (なぜ必要か)

平和な世界を作ることが教育の最終目標。

ちがいを楽しめる、ワクワクできるような環境をつくるため。

WHAT (何をするか)

自分を知ること（自分はどうしたいのかを認識して自己開示する。）

対話する（話し合うことで納得解を見つける、相手の背景まで考えられるように）

行動する（アイデンティティを尊重、お互いの風土や文化を尊重）

HOW (どのようにするか)

ICT 教育(知りたいことがあったときに調べられるように。)

児童生徒の
興味関心をひく

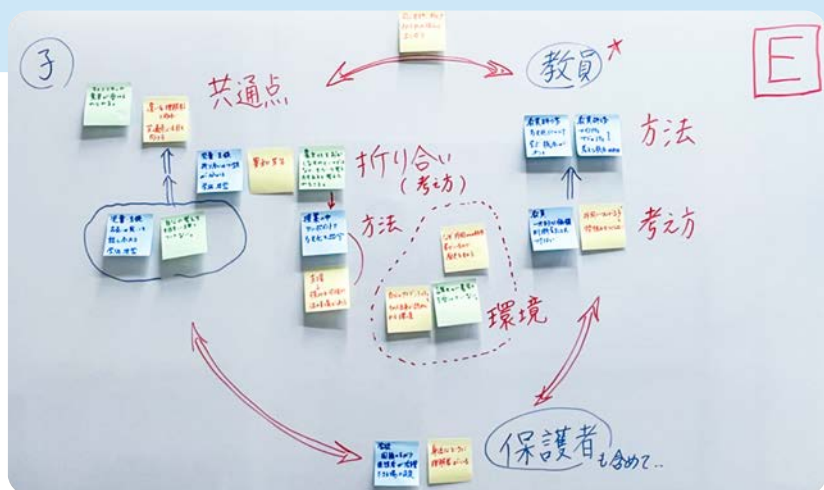
保護者
対応

自分たちでできないことは外部に頼る、様々なステークホルダーとつながる。

ルーツを知る。(客観から主観に移っていくことが大事。)

E グループ

(坪内、杉山、石動)



ちがいだけにクローズアップせず共通点を見つける。

折り合い（ここは譲れない、ここは歩み寄るという部分）

先生の意識を変える。

教員研修（枠組みをつくらない、マジョリティとマイノリティの捉え方、話だけでなく先生たちが体感しながら学べる機会（越境疑似体験など）

外国ルーツの子ならではの強みをいかせる場を意図的につくる、(助けられるばかりの立場ではない。)

同じ目標に向かうために各々が強みを出し合える学校

外国籍児童生徒の保護者が孤立しないように、話し合う機会、活躍できる機会を作るなどのアプローチをする。

どんな学級経営を目指しているかを共有し合える学校

一人一人の違いを認められる多文化共生の文化を築くために

寺西 雅子 入間市立狭山小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：379名

外国につながる児童 / 生徒数：6名（全体の1.5%）

学校背景



本校は創立65年の学校で、学校の周りには養鶏場や養豚場、茶畑が広がり、昔ながらの営みが行われている。一方周辺には、工業団地や高速道路の入り口もあり、新旧が混在する地域である。本校は、入間市の中心から離れた場所にあり、外国につながる児童は市の中心校に比べて少なく、学年に1～2人（外国籍の児童は6名）程度で、片親が東南アジア出身というケースが多い。

現在の課題



本校は、外国につながる児童が全体的に少なく日本語指導を必要とする児童がいないため、外国につながる児童の対応は他の児童と同様に担任に任される。外国につながる児童が学校生活で孤独を感じたり、学習に遅れがでたりしないように取り組む必要があるが、担任だけでは対応が難しいことがある。また、養育者の学校教育に対する意識・関心が低い場合、生徒の学年が上がるにつれて欠席や学習の遅れが大きくなるケースが多いことも、課題と言える。

現在の取り組み



外国につながる児童が少ないため、学校全体として「多文化共生教育」を取り入れた行事はない。それぞれの学年の道德で、「国際親善・国際理解」をめあてにした題材を扱う時に触れる程度である。日本語指導が必要な児童が入学・転入してきた場合、日本語指導教員を市に要請する。

私自身は、2017年度の教師海外研修でエルサルバドルを訪問してから国際理解教育に関心を持ち、前任校では3人の青年海外協力隊 OB をお招きし、児童にその経験と思いを語って頂いた。

昨年度狭山小学校に異動し、本年度は本校でも青年海外協力隊 OB の出前授業を計画中である。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

教育に携わる者として目の前の全ての子どもたちの教育の権利を守りたい。そのためには、自分が今まで持っていた価値観や道徳的な考えを、時に変化させたり反することを認めたりする柔軟さが必要である。そしてそれが「多文化共生」だと考える。



学校にとって

価値観や文化的な背景が異なる子どもたちを集団として預かる学校で、一つの固定した考えだけで子どもたちを指導することはできないと考えるため、「多文化共生の文化」は必要である。



世界・社会にとって

移民はいつの時代にもあり、その時代の国と国の関係で受け入れられたり、受け入れてもらったりする。たくさんの人と人が交流する現在社会は、様々な価値観や考え方が認められる社会にならなければならないと考えるため、「多文化共生の文化」が必要である。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

①バングラデシュ人のお父様を持つカーン宇愛乃さんやペルーの日系4世の伊藤忠明さんのお話を聞いて

お二人の生い立ちと、成長する中での悩みや困難をお聞きして、日本人が日本で生きていく中では感じるのではない苦労があることを知った。お二人はともに聡明であり、支えてくれる両親や取り巻く人にも恵まれて、困難を乗り越えながら現在生き生きと生活している。外国につながる子どもたちが夢を持ち、その夢を実現しながら自分らしく生きていくには、日本人の子どもたち以上に周りからの支援と理解が必要であると感じた。

②移民資料館を見学して

生きていくために、知らない土地に夢を抱き、移住していった先人の気持ちを身近に感じることができた。今仕事のため、また生活のために日本に暮らす外国人の気持ちに寄り添うことが大切と思えるようになった。

③森茂岳雄先生の講演を聞いて

日本人とその他の国の人との、ものの考え方の違いに衝撃を受けた。考え方やものの見方は一つではないことを知り、文化的な背景の異なる子どもたちが一つの教室で学ぶとき、教師はどうすればよいのか考えるきっかけになった。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

人はみんなそれぞれ違って当然であり、外国につながる人だけでなく、一人一人の違いを認め合えることが多文化共生の文化と考える。学級であれば、考えの違う児童が折り合いをつけながら、相手にも良くても自分にも良い考えや方法を見つけていけること。自分と異なる友達を受入れ、理解し、認められるようになること。そして、仲良くなれること。そんな考え方が育まれる文化を創っていききたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

■ 今年度から取り組んでいくこと

1. 多文化共生の視点を取り入れた授業の計画と実施

〈例えば〉

国語：

「3年とうげ」（韓国の昔話）では、いろいろな国の民話や昔話に触れる。民話や昔話は、その国の民衆の考え方を反映しているものが多く、日本との同じところや違うところを考えさせる。

英語：

フィリピン出身のAETの先生から話を伺う時間を設ける。

3. 国際理解コーナーを設置し、児童の興味関心を広げていく。



平和の大切さを「自分事」にする
掲示物の様子

2. 国際理解に役立つ資料を職員に提供する。

JICAの冊子教材、映像教材、地図、カードなどを取り寄せ、使い方を説明し、授業などに活用してもらう。



SDGsカードを使った掲示物の様子
(本校教頭が作成)

4. 特別活動のさらなる充実

一人一人が居心地の良いクラスをつくるために、学級会を通じて「折り合いをつける」ことの大切さや方法を学ぶ。

5. 道徳教育の見直し

道徳的な価値観は一つではないことを心にとめて、授業を考える。

■ 来年度以降取り組みたいこと

高学年を中心に、総合的な学習の時間の内容を見直し、国際理解教育を取り入れてもらうように働きかける。

JICA 埼玉デスクの協力を得た
出前授業の継続

日本人学校や現地校などを
オンラインでつなぎ、
児童同士の交流を図る。

6. JICA 埼玉デスクと連携してゲストティーチャーをお招きし、出前授業をお願いする。

6年生：

青年海外協力隊OBから、派遣先での経験や協力隊としての思いを伺う。

4年生：

埼玉デスクの方に来ていただき、道徳「世界の小学生」の授業の中で話を伺う。



外部機関との連携

JICA 埼玉デスク

出前授業をお願いし、ゲストティーチャーを派遣していただく。外国語活動の市教研のメンバーなど先進校があれば、アドバイスをもらう。

在外施設

交流を図るためには、どのような準備が必要か管理職に相談をする。また、外国語活動の市教研のメンバーなど先進校があれば、アドバイスをもらう。

Break Through な多文化共生の文化の共創

角納 裕信 金沢市立大徳小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：747名 外国につながる児童 / 生徒数：6名（全体の0.8%）

学校背景



学校は石川県庁に近い位置にあり、飲食店や官公庁や海みらい図書館等の文化施設があり生活しやすい地域である。保護者の職業も、文化センターや飲食業、官公庁勤めと様々である。様々でありながら、人数も多いマンモス校であるので、考え方も多様であり、排他的であるとは考えにくい。古くからの住人と新興の住人が混在している。

現在の課題



日々の生徒指導や学習指導に追われ、また新しい人材が入ってきてもその教職員の人数が少なく、多文化共生に関する事項の指導ができる先生もいない中、新規のことをしようとしても無理がある。必要感を訴えたところで、それも難しい。既存のやらなければならない事柄の中に入れ込んでいたり、関連付けたりしていくのがベストである。しかし、現在外国にルーツのある児童が、0.8%とは言え存在していることは事実であり、問題が顕著化してから対応するのではなく、教職員からその考え方についてあらかじめ知っておいてからの指導の方が、のちのちの生徒指導についても有効であると考えている。

現在の取り組み



これまでと同じく、一人一人の児童理解である。例えば、先日、中国にルーツのある児童が、友人に何か嫌なことを言われたがために、トラブルになった事案があった。すぐに、教頭と共に、諭すように指導した。落ち着いた後、話を聞いてみると、思春期にありがちな異性が好きなことをばらすことをした友人を非難するためにやったのがトラブルの始まり、とのことであった。行為自体、外国籍等関係なく起こることであるのだが、「行為の裏には必ず訳がある」という考えで詳細な聞き取りや、常に心穏やかに過ごせるように、いつでも話をどの教職員でも聞くことが出来る体制を整えている。まずは、一人一人を大切にしていこうという共通認識の下、全教職員で情報を共有し、組織的に対応している。早期に情報を共有し、早期に組織的対応をすすめていく、そのこと自体が「多文化共生の文化」を創るための、守るための取り組みである。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

自分自身が（誰しもそうであると思うが）マジョリティか、マイノリティか、と問われれば、マジョリティの部分もあればマイノリティの部分もあり、誰もが生きやすい、生きがいを持てる世の中のために必要である。



学校にとって

外国にルーツがある・ないに関わらず、マイノリティの児童が増えてきているからこそ、窮屈さを感じ、過去最高の不登校児童数を出していると考えられる。「多文化共生の文化浸透」—このことは喫緊の課題と言える。



世界・社会にとって

誰もが生きやすい世の中を目指さなければ、紛争や戦争が起こってしまう。資本や知識の流失を抑える上でも、「多文化共生の文化」の考え方がなければ、人は留まらず、資本や知識が自国から流失していってしまう。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

今回の研修では、コロナ禍後の、実に対面研修であるがゆえに、その良さを存分に発揮していると感じている。

1. 様々な都道府県の色々な年齢層の教育機関の前線にいる人物が1か所に集まって、リアルで話し合えるということ。
2. カーンさんや伊藤さんの生の体験談を拝聴することができ、感想（対話）、質問も受け付け、学び合えたこと。
3. 森茂氏の講演を聴くことができ、詳しい質問も受け付けてくれ、理解が深まったこと。
4. 海外移住資料館の見学と、解説を受けることができたこと。
5. 親睦を深められたこと。

以上のことがあったからこそ、自分一人で情報を集め、考えるだけでは得ることができなかったことを、仲間が指摘してくれたり、代弁してくれたり、新たな視点を与えてくれたり、その他刺激を得ることで、今こそ「多文化共生の文化」が、「文化」として叫ばれることを通り越して、自然にあることの大切さを気づき、感じている。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

道徳や学級活動と同様に、また特別活動（委員会活動等）で、学校のカリキュラムの中に組み込んでしまう。そうすることによって、どの学年であってもやり続けていく、その学校独自の「文化」が生まれ、継続していくであろうと考えられる。そのためには、まず自分が先駆者となって型となる原型を作り、少しずついいので、カリキュラムに組み込みつつ、実践を重ねていく必要があると考えている。何事も、事が起こってからでは解決の糸口が見つからないが、ある程度事前に知っていて情報の共通理解があれば、研修を受けていれば、理解し分かり合えると思うからである。逆に、何も知らない中で事が起こった時、無防備で立ち向かうことになる。事後に考え始めると後手に回るのである。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

1. ICTの活用

タブレット（クロムブック）の翻訳アプリの活用により、マジョリティである児童にも、マイノリティである外国に由来のある児童にも、言語でのコミュニケーションの役に立てていく。

情報モラルやリテラシーとしての活用の方法や使い方の指導。（タイピング等の技能においても）

2. 図書館の本の活用

「多文化共生の文化」関連の本を選定、注文し、図書館司書と図書委員会と連携して、見やすく手に取りやすいように、ディスプレイをしたり、紹介したりする。

また、代表委員会で取り上げてもらいやすいように、6.にあるように日々の授業の中で少しずつ話していく。

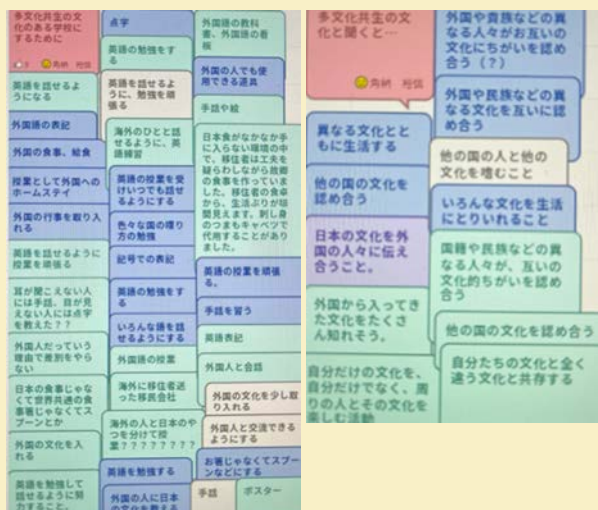
3. 掲示板の活用

理科の掲示板の中に「多文化共生の文化」の掲示を関連付けて掲示する。体験型グッズも展示する。その掲示の中に、「（各国の）理科の教科書」の紹介も含めて、その中から、多文化を感じてもらう。（違いや共通点）



4. 社会や総合的な学習、特別活動の時間の中で、「多文化共生の文化」の学習の授業をする。

「多文化共生の文化」のある学校とは？



5. 学校において、教職員向け「多文化共生の文化」とは？の研修を行う。（夏季研修等を利用・研究部と連携して）

具体的には、OJT の場がよい。

6. 日々の授業の中で、多文化共生の文化の考え方を授業する。

まずは、受け持っている「理科」の授業の中で、頃合いをみて授業をしていく。そのひとつひとつの実践の積み重ねの蓄積が、後々その学校独自の考え方になっていく。地域間格差もあり、その土地その土地の特性もある。

7. 生徒指導的な観点から

折に触れて、児童との対話を心がけていく。例えば、「最近どうしている？」という言葉かけひとつで、児童は安心するものである。また、その反応をみて対策を練ることができる。このことに関しては、特に外国にルーツのある児童に限らず、どの児童に対してもあてはまることである。

8. どの児童に対しても、居場所を提供する。

大人でもそうであるが、学校でもどこでも、自分の居心地の良い居場所を探しているものである。もちろんその中には「心の居場所」も含まれる。この先生がいるから教室に入ることができる、学校に来ることができる、そんな空間を目指すようにしていく。

9. 校内放送での読み聞かせ

お昼の放送で「生徒指導の先生からのお話」のコーナーが毎週金曜日にある。児童は、自分の善行が発表される場でもあるので、自分事として聞いている。この場を利用して「多文化共生の文化」のいい話も入れながら、まずは教師がセレクトした絵本の読み聞かせを行いつつ、徐々に多文化共生の実践事項を話していく。



外部機関との連携

JICA北陸から講師を呼んで、出前授業を行ってもらう。(以前、5年生の海洋教育の中で東京水産大学出身の職員の方に日本と世界の海洋産業について話していただいた。)

海外移住資料館から、多文化共生にかかる教材を貸してもらい、またダウンロードして、児童に対しての授業や教職員に対しての研修時に使う。

教科書の内容に多文化共生ちょっとアイデア(小学5年生向け)

竹辺 このみ 大津市立堅田小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数 : 1001 名 外国につながる児童 / 生徒数 : 8 名 (全体の約 0.008%)

学校背景



本校は今年度 150 周年を迎える地域とのつながりが深い学校である。商業施設のある大通りが近く、外国人の働く工場などは少ない。それに伴い、外国籍児童は県内における増加傾向と比較すると少なく、今後も微増傾向である。現在、外国籍児童は8人在籍しており、国籍は、韓国、中国、ネパール、ロシアで言語での困り感を持つ児童もいる。

現在の課題



学校背景に記した通り、割合的にも外国籍児童が少ないこともあり、国際理解教育の全体計画はあるものの積極的な実践には至っていない。また、総合的な学習の時間は、どの学年も「防災」中心のものになっている。そのため、子どもたちは外国語活動・外国語科の学習を除くと、外国について知識を得たり、外国人と接する機会が少ないという現状がある。外国籍児童が少ないからこそ、関心を持つ機会を与え、共生に向けての種をまくことが必要だと感じている。

現在の取り組み



今年度は異動したばかりで、外国語主任と言えど、学校の状況把握に努めた半年間であった。そのため、国際的なテーマの本の読み聞かせや、社会科の学習を中心に「地球の食卓」を用いたり、開発教育を取り入れるなど、自クラス内での活動に留まっている。最近は国語科の学習で SDGs をテーマに資料を用いて書く学習に取り組んでいる。子どもたちにとって、様々な環境や文化で生活している世界の人々を知ることが新鮮で、関心を持って取り組んでいる。まずは「知る」、そして「自分に何ができるのかを考える」、「行動する」のフローを、今すぐにはなくとも子どもたちの中に種をまいていきたいと思っている。今回の研修を通して、「多文化共生の文化」づくりの取り組みを校内に提案したい。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

日本社会で生活する上で「特権」が与えられていることを認識した。マイノリティーに寄り添う気持ちも大切だが、「特権」を持つマジョリティーの意識を変えていきたい。自分自身が海外で親切にしてもらった経験から、子どもたちに相手の文化を尊重する気持ちを伝えたい。



学校にとって

外国籍児童にとどまらず、特性や家庭環境など学校の中にも「多文化」が存在する。「人」に対して、偏見や差別をするのではなく、「一人の人」として、大切に接する気持ちを育む必要がある。だれでも公平につながれる環境づくりが大切である。



世界・社会にとって

不安定な国際情勢の中で、お互いのことを知り、尊重することが平和への第一歩だと信じている。人々の国を越えた移動が活発になる現代、様々な文化や人を知り、受け入れることでよりよい社会へ変化することを期待している。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

「多文化共生」というと、すぐに思いつくのは外国人も過ごしやすい風土づくりであった。しかし、本研修に参加して、私を含む「日本人」と呼ばれるマジョリティーの「特権」について認識する必要性を感じた。日本の法律を作っているのも「日本人」である。制度的差別を受けている外国籍の人々のためにできることは、日本人が「特権」を持っていると自覚し、行動を起こすことだと思う。私はその小さな一歩として、子どもたちには世界や社会に目を向け、物事を知る中で、自分で考えて行動できる人を育てていきたい。日系移民や在日朝鮮・韓国人の歴史などについて「知らない」ことにより外国人として差別してしまうかもしれない。文言だけでなく、現実生きる「人」とのつながりを、子どもたちに経験を積んでもらいたい。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

今後も、外国籍人口の増加が見込まれる日本社会において、外国人に対して偏見をもたず、「一人の人」として接することができる人々が創る、公平な社会。学校現場においては、児童には、意図的に多文化に触れる機会を作り、まずは「知る」ことから。学校には、自身が学んでいる開発教育の普及をするなど、自分だけの学びにとどまらず広めていきたい。「人権」につながることで、特別に取り上げるのではなく、当たり前前に多文化共生に向けた教材を使用したり、授業づくりをしていきたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

小学5年生の学習内容に「多文化共生の文化」をつなげるアイデア（★…実際に実践したもの）

国語科 光村図書

調べたことを正確に報告しよう
「みんなが過ごしやすい町へ」

「みんな」とは？…身体障害のある方、子ども、妊婦さん、お年寄り、そして外国人などを子どもたちから出し、グループに分かれて、自分たちの住む町がどんな工夫をしているのか調べる。そして、よりよくするためにどんな工夫ができるか考え発表する。

★資料を用いた文章の効果を考え、
それをいかして書こう
「グラフや表を用いて書こう」

SDGsについて、興味のあるテーマを決める。自分の選んだテーマについてインターネットや本で調べ、自分が伝えたいことがより伝わる資料を選択する。資料と照らし合わせながら文章に書き表す。

（実践してみて・・・）

これまでSDGsに触れる機会がなかったので、「こんなに紛争ってまだ起きてるんや」「きれいな水って当たり前じゃないんやな」「ごはんちゃんと食べられてなくて、かわいそう…」などのつげやきがあり、世界に目を向け、私たちの生活がいかに当たり前ではないかということをもまず第一歩として伝えることができた。

相手や目的を明確にして、
推薦する文章を書こう
「この本、おすすめします」

教師が多文化共生につながる絵本を選出し、推薦する文章の見本を紹介する。

社会科 日本文教出版

「日本の国土と人々の暮らし」

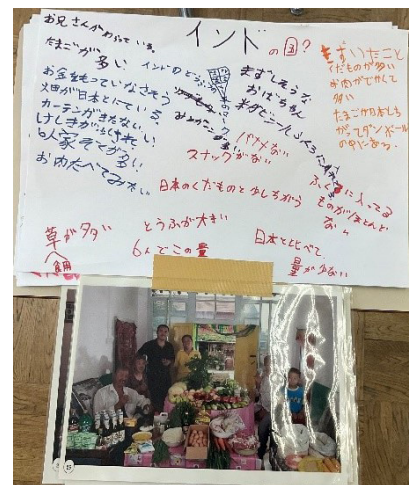
世界の様々な国について、国の位置と国旗を一致させる学習では、自分の興味のある国についてタブレットPCで調べ、まとめる。調べる項目として、特徴的な建物、動物、食べ物など、子どもたちにとって親しみやすいものを挙げる。また、調べて見つけた写真などをもとに、タブレットPCで班の中で発表する。

★わたしたちの食生活を支える食料生産
「地球の食卓」

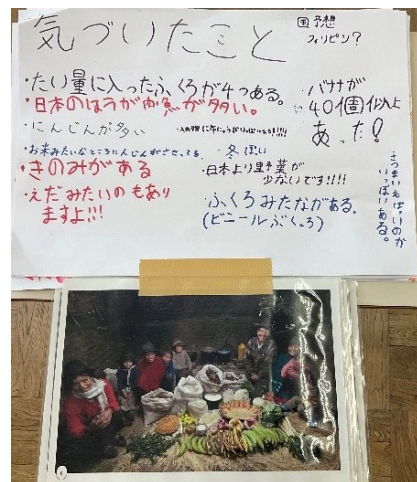
外国の家庭の一週間の食料と家族の写真で班でフォトランゲージを行う。気づいたことや写真にうつっているものを画用紙に書き込んでいく。最後に各班が担当した写真について、考えたことや、予想される国を発表し、その後、正解の国名を伝える。

「フード・マイレージ～どこからくる？
私たちの食べ物～」(開発教育協会)

・食料自給率を知ろう
・フードマイレージ
の教材を扱う。実態に応じて、アレンジできるとよい。



- ・たまごが段ボールに入っている！
- ・袋に入っているものがほとんどない。
- ・6人でこの量→日本と比べて量が少ない
- ・インドかな？



- ・大量に食料が入った袋がある。
- ・バナナが40個以上あった！
- ・日本のほうが肉・魚が多い
- ・木の実・えだまめ？・さつまいも？がある。
- ・フィリピンかな？

工業生産と私たちの暮らし
★日本の貿易とこれからの工業生産
「貿易ゲーム」（開発教育協会）

単元の導入で、貿易ゲームを簡易化した「くさり（輪飾り）ゲーム」を行った。貿易ゲームよりも準備が簡単でルールもシンプルである。各班を国とし、生産するための道具や材料（折り紙）の入った封筒を配る。意図的に先進国には豊富な資源と道具を、途上国には資源のみなど、差をつけた状態からスタートした。指定された数の輪飾りを生産するとチェックを受け、合格したらマネーと交換する。



資源も道具も十分にそろっている国
→自国のみで生産し続けられる



道具はあるが資源がない国
→生産したくてもできない

子どもたちの感想では、「今回のゲームのように世界には不平等があることが分かった」「国と国が協力すれば、生産できたけど、実際にはうまくいかないのかな」などがあった。

家庭科 東京書籍

持続可能な暮らしへ 物やお金の使い方
SDGsと関連させた授業展開ができる。

「服・ファッション 開発教育アクティビティ集5」（開発教育協会）

映画「THE TRUE COST」の
予告編を視聴する

調べてみよう！わたしの服

自身が身につけている服はどこで生産されたものなのか、何の繊維でできているのかなどを確認する。

服クイズ

日本で売られている服のうち、どのくらい輸入されているのかや、供給される服の量の変化について捉える。

「未来のときめきファッション」を考える

道徳科 日本文教出版

世界の人々とともに「ペルーは泣いている」

ペルー女子バレーボール監督 加藤明さんの実話をもとに描かれている。日本人が外国に貢献していた事実をきっかけに、昔にも、日系移民として外国で奮闘した人々がいたことを伝える。

外部機関との連携

JICA ニカラグア事務所× JICA 滋賀デスク×5年生児童

滋賀県の全ての小学5年生は「うみのこ」（びわ湖フローティングスクール）を経験する。この「うみのこ」事業を参考に、中米のニカラグアのマナグア湖にてニカラグア版「うみのこ」事業が始まった。遠く離れた国でそれぞれの「うみのこ」を経験した児童同士がつながる機会をつくりたいと考えている。

出前授業の依頼

6年生の社会科の学習で、JICA 海外協力隊について取り上げられているので、出前授業を依頼しようと思う。

「自己理解・他者理解・自己開示→対話→考動」を通して 多文化共生の文化を創る

田口 直也 AIC 国際学院京都 初等部

所属先情報

全校児童 / 生徒数：28 名 外国につながる児童 / 生徒数：4 名（全体の 14%）

学校背景



開校 2 年目の京都市にあるインターナショナルスクールである。インターナショナルスクールといっても、児童の多くは日本人の両親から生まれた日本人である。一方で外国にルーツのある児童も在籍している。言語面に関するバックグラウンドが多様で、日本語が母語でない児童、幼稚園からインターナショナルスクールに通っている児童、小学校から初めて英語を学習する児童が在籍している。

現在の課題



国際バカロレアプログラムを取り入れているということもあり、日々地球規模で物事を考える授業を展開している。教員のほとんどが外国人で、外国にルーツを持つ児童も在籍している。学校生活の8割を英語で過ごしている。こうした点から言えば、日々多文化に触れ、多文化共生について考えていると思う。

一方で、課題として感じていることがある。それは「考える」で止まっている点だ。子どもたちは「学んだこと、考えたことをもとに、学校や地域で行動をとる。」ということが現状あまりできていない。

現在の取り組み



1. おもちゃとジェンダープロジェクト

ピープル株式会社とコラボして「男の子だけ、女の子だけでなく、誰でもみんなが遊びたいと思うおもちゃ」開発に取り組んだ。

2. Thailand Day

タイの中高生を学校に招待して、文化交流を行った。児童は日本の文化について伝えたり、タイの文化について学んだりした。

3. You は何しに日本へ？～観光プロジェクト

海外の方に京都駅やお寺でインタビュー調査をした。そして、海外の方が考える日本について知った。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

他者を見る視点が増えて、抱えている悩みや葛藤に関する気づきを得ることができたり、サポートの手立てをより具体的に考えたりすることができるから。



学校にとって

一人一人が自分の人生を価値あるものだと感じて、他者や自分を大切にすることができるから。



世界・社会にとって

国家という考え方が変容し、地球全体で様々な課題に対してアプローチしていく必要があるから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

自分にとって多文化共生が必要なのは「他者理解の視点が増えるから」だと思った。

日本人が過去様々な理由から、海外に行っていたことを今回初めて知った。移民の歴史を知ること、海外にルーツのある方々への理解が深まり、どのように共生していくかを考えることができるのではないかと今回の研修を通して感じた。

学校にとって多文化共生が必要なのは「一人一人が自分の人生に価値があると感じて、自分や他者を大切にできるから」だと思った。今回の研修では特に移民の方のライフストーリーを聞いてそのように感じた。多文化共生の根付いた学校ならば、一人一人のアイデンティティを大切に、自分と違うからといった理由で相手を排除したり、命を投げ出したりということがなくなるのではないかと考える。

世界・社会にとって多文化共生が必要なのは「国家という考え方が変容し、地球全体で様々な課題に対してアプローチしていく必要があるため」だと考えた。森茂先生のお話にもあった通り、現在様々な方が日本で移民として暮らしている。この動きは、今後間違いなく世界中でも加速することが予測される。そういった時に、多文化共生の文化が根付いている社会であれば、「競争ではなく共創」できると思う。そうすれば、現在起きている争いもなくなっていくのではないかと考える。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

私が創りたい「多文化共生の文化」とは、「自己理解・他者理解・自己開示→対話→考動」を通して、みんなが安心して過ごすことができる文化である。多文化共生の文化を創るための土台となるのは、自己理解と他者理解だと思う。まず自分や相手の「好きなこと・苦手なこと・得意なこと・苦手なこと・嬉しいこと・嫌なこと」を知る。次に心理的安全が保たれた状態で、自分について開示する。その後、自分や他者の開示された情報をもとに対話をしていく。そして、対話で得た考えをもとに、一人一人が考動することができる「多文化共生の文化」を創っていきたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

今回の活動提案では、子どもたちの認識を2つのフェーズに分ける。第1フェーズでは「子どもの身近な事象・起こりうること」を対象とした活動を行う。そして第2フェーズでは「社会全体に関する事象」を取り扱った活動を行う。理由としては、本校の児童は今年度小学1年生～小学3年生までのため、「身近なこと」から考えたほうが理解しやすいと思ったからだ。まず第1フェーズで「自分の身の回りのこと」を中心に考えて、第2フェーズで「社会との関わりの中」で多文化共生について考える。第1フェーズでは、他者と関わる時に必要となる「概念・思考の枠組み」を具体的事象から子どもたち創り出す。第2フェーズでは、その経験を活かして(概念転移)社会の中の具体的に起こっている問題について考える。(図1)

■ フェーズ1

1. 自己理解・他者理解・自己開示

(1) Language portraits (LP)

Language portraits (以下、LP) は、教育機関において、自分自身と関わりのある言語について内省を促す活動として、また研究の場において、複言語の環境で育った学習者の言語観などを知るための手法として用いられてきた。「人」のシルエットに、自分が使用している「言語のレパートリー(自分の人生において重要な、また経験のある言語や話し方)」(Helm、筆者ら訳)をそれぞれに合う色で描きこみ、なぜその言語をその場所にその色で描いたのかを語る活動である。(村上・北川 2021)

本校はインターナショナルスクールということで、言語的バックグラウンドが児童・職員・保護者も含めて様々である。LP作成の活動を通して自分自身の関わりのある言語について示すことで、より自己や他者についての理解が深まると考えられる。

写真1は、本校の教員で行なったLPである。自分自身の言語観に関する開示を行うことで、一人一人の使用可能な言語を把握することができた。また、言語に関する学習経験や家庭内使用言語についても知ることができた。

今後自己理解・他者理解のためにこのLPの活動を児童・職員・保護者で実践していきたい。言語についての開示を通して、学校間でのコミュニケーションが増えることや学校運営に関して、配慮すべき事項が明確になることが期待される。

(2) ことばカードワークショップ

「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイデアBOOK2022～」で大阪府の高校教員である榎原さんが実践として紹介している「ことばカードワークショップ」を行う。榎原さんの実践は高校生向けのため、本校の児童の実態にあった言葉を選び直して行う。この活動を通して、子どもたちには自分のことを開示したり、他者のことを理解したりしてほしい。また「同じ言葉や行動であっても、人によって捉え方が違うこと」「教室にも多文化があること」「一人一人違いがあることを考慮して生活する必要があること」などを子どもたちが理解することを期待する。

2. 対話

(3) サークル対話

サークル対話とは、イェナプラン教育の4つの基本活動の中で最も大切にされている「対話」の一つである。サークル対話に関してリヒテルズ(2019)は、一人一人が尊重され、一人一人がグループに貢献することや他者の発言に耳を傾け、その発言を受け止めることの重要性を述べている。

多文化共生の文化を築くためには、人々の「対話」が必要であると考えられる。その点において、対話のスキルを磨くために、イェナプランの「サークル対話」は適していると考えて導入する。サークル対話のルールとして

- ・できるだけきれいな円形や楕円形を作る。
 - ・参加者全員が、他の参加者の顔が見えるようにする。
 - ・発話者の話は途中でさえぎらず、全員必ず終わるまで待つ。
 - ・誰も、発言者の言葉を否定、嘲笑、罵倒しない。
 - ・すべての発言が主体的なものになるように、指名して発言を強制しない。
- などがあげられている。(リヒテルズ 2019)

サークル対話のテーマとしては、イェナプランで使用されている「哲学カード」や子どもたちから日常生活で「困っていること」や「助かっていること」を募集したりして選ぶ。

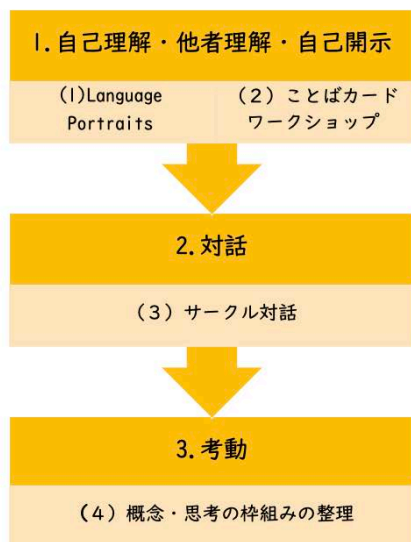
3. 考動

(4) 概念・思考の枠組みの整理

子どもたちに「多様な他者と共に生きていく中で私たちに必要な考え方は何か?」という問いを投げかける。

これまでの学習経験をもとに子どもたちが考えたアイデアを、全体で共有する。そして、学校内で多文化共生の文化を創るためにできそうな「考動」を設定し、フェーズ1を終える。

フェーズ1



フェーズ2

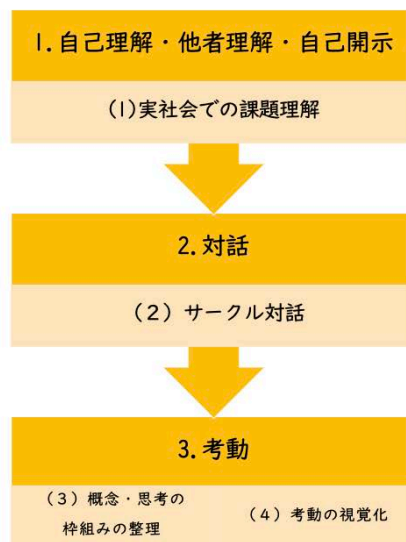


図1

フェーズ2

1. 自己理解・他者理解・自己開示

(1) 実社会での課題理解

フェーズ2では、移民に関するゲストスピーカーを招待して講演をしてもらったり、具体的に社会の中で起きている事例を子どもたちに伝えたりする。その際に、これまで日本から多くの人が海外に渡った歴史や、海外から多くの人が現在に日本に来ていることをデータとともに伝える。

2. 対話

(2) サークル対話

フェーズ1で行なったサークル対話を今度は「実社会での課題」を対象に行う。例えば「移民や外国人労働者の受け入れに関すること」「日本に住む外国にルーツのある方の困り感」を話題にする。自分の意見を伝えたり、他者の意見を聞いたりすることで、さらに子どもたちの考えが深まることを期待している。

3. 考動

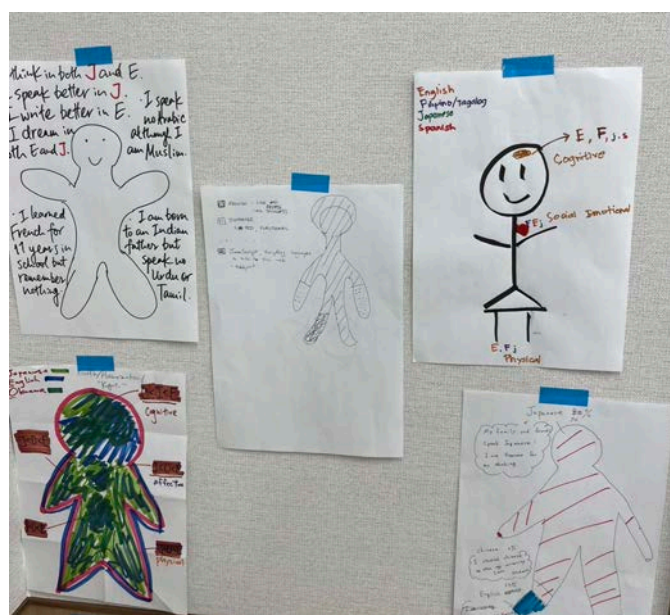
(3) 概念・思考の枠組みの整理

子どもたちに再度「多様な他者と共に生きていく中で私たちに必要な考え方は何か？」という問いを投げかける。

その際に、ベン図を使って「学校の中で必要な考え」と「実社会の中で必要な考え」を整理する。この活動を通して児童に気づいてほしいのは、「学校生活」でも「実社会」でも、多文化共生の文化を創るために必要な概念は、その思考の枠組みが共通しているということである。ここで得た気づきをもとに、自分が「学校生活」や「実社会」の中で多文化共生の文化を創るためにできそうなことについて考え、Action Planを設定する。

(4) 考動の視覚化

子どもたちが実際にActionを起こしている場面を写真で掲示したり、エピソードの言語化をしたりする。ロールモデルを示すことで、行動の強化につながることを期待する。



教職員で取り組んだ Language portraits

<引用・参考文献>

村上智子・北川幸子 (2021) 「学習者の主体性を重視する日本語クラスにおける Language Portrait を用いた活動の試み」 日本語教育方法研究会誌 Vol.28 No.1
独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 広報部 地球ひろば推進課 (2022) 「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイデア BOOK 2022～」
リヒテルズ直子 (2019) 「今こそ日本の学校に！イェナプラン実践ガイドブック」

外部機関との連携

- ・ JICA 関西の方の講演会
- ・ 移民に関する情報を提供してくださるゲストスピーカー
- ・ 他校との交流会

感性を育てる多文化共生

坪内 昌子 京都市立高雄小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：70 名 外国につながる児童 / 生徒数：4名（全体の約 6%）

学校背景



本校は京都市内から少し離れ、右京区の山間に位置している。以前は、林業・観光業が地域の産業になっていたが、今は両方ともに芳しい状況ではない。その為、新しく校区に入る入居者は少なく、児童数は減少し高齢化が進んでいる。新たな産業がなく、地域で働く場所も限られる。外国につながる児童は少なく、多文化に触れる機会は乏しい状況にある。

現在の課題



外国につながる児童が少ないこともあり、多文化共生の文化は根付いていないと感じる。昔ながらの意識が今もつながる地域独自の文化があり、他地域から移住してくる人は少ない。外国人に限らず日本人であっても受け入れにくい文化がある。

また、他地域から移住者があつたとしても、その文化を受け入れるというよりは、地元の文化に馴染ませようとする傾向がある。そのような状況にあるので、児童の学びが閉鎖的な限られたものにならないように、総合的な学習の時間には海外の日本人学校や JICA 海外協力隊員と Zoom でつなげ交流を持つようにしている。学習の中では多文化につなげられるように計画しているが、決して日常的な多文化共生の文化が育っているわけではないのが現状である。

現在の取り組み



校区には、世界遺産に登録され、多くの国宝や重要文化財を有する「高山寺」や「神護寺」「西明寺」「平岡八幡宮」があり、それらについて社会科や総合的な時間を活用して学び、「高雄地域に誇りを持ち、地域を語れる児童」を育てている。そしてその学習で学んだことを他地域に発信している。発信する相手は、今年度はフィリピン日本人学校・チェコ日本人学校である。また、世界遺産を校区に有する学校間交流として、滋賀県大津市立朝日小学校とも交流を行っている。ただしこれらの交流の相手は日本人である。

6 年前に、ウクライナの学校と折鶴交換を行った。また「ピースラン」に参加し、神護寺から仁和寺までを走る外国の方々との交流を行い、世界平和デーの集会を本校講堂で児童と行った。また、「アートマイル国際協働学習」では、ハンガリーの学校と共同で旗を作成した。しかし、外国との交流は継続的なものではない。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

国際交流については模索しながら活動を行ってきたが、自校での多文化共生文化の構築には至っていなかった。外部との交流に限るのではなく、校内での活動を実践する。



学校にとって

決まりや約束ごとについて、限られた日本人を想定して作成しているように思う。学校の文化の中にも広い価値観を根付かせ、誰もが住みやすい学校にしていこう。



世界・社会にとって

隣人を思いやる文化の創造が必要だと思う。隣の領土・文化・人を自国の所有物とするのではなく、相手を思いやり尊重できる文化を創造できる次世代の人を育てる必要がある。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

私は、自分自身が青年海外協力隊のOBであることから、国際理解教育に重点を置き教育活動を行ってきた。日本から外を見ることを国際理解教育と考え、日本国内に生活する外国につながる人のある人のことを考えることに思いが至っていないことに気づいた。私自身が生活している場所や勤務する学校に外国につながる人が少なかったことも、意識が及ばなかった理由である。ところが、現在の日本社会は多くの外国人を受け入れ、生活している地域が多いことに遅ればせながら改めて意識が向いた。

本研修を受講する前は、多文化共生の文化を考える時に、日本にやってくる外国につながる人のある人の理由や目的までを考えるに至っていなかった。本研修を受講したことで、日本人も多くが海外に労働者として移住していたことや、現在も多くの日本につながる人が海外で生活していることを学ぶことができた。その学びから視野が広がり、身近なところに生活している外国人に気づくことができるようになった。今まで意識していなかったために気づけなかったことに改めて気づけた。そうすると、非常に親近感を持って外国の方々に接することができるようになった。その人の背景にまで気持ちが及ぶようになり、共存しようとするようになったことは大きな学びである。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

隣人を思いやり、その人の個性や心情を大切にできる文化。自分（日本人）と比較して相手を評価したり、差別したりするのではなく、お互いの国籍や心情を超えて相手を尊重できる風土が育つ文化であると思う。そのためには、国籍や宗教にとらわれるのではなく、個人として人を大切に思うことができる人権感覚を身に付けなければならない。また、現象をみてその人を判断するのではなく、その人の背景にまで思いを巡らせ、人を評価できる人権感覚の優れた児童の育成を実践すること。そして、そのような教育現場を構築することであると考える。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

本校には外国につながりを持つ児童が4名在籍している。その全ての児童が、両親のどちらかが外国人である。しかもそのうちの多くの保護者は、日本に来て年限が浅く、家族は今も自国で生活している。学校では児童は日本語で授業を受けているが、学習内容を理解し、日本語に困りを抱えてはいない。自宅では日本語以外の親の母国の言語で会話し、生活している。そして、1年のうちに何度も祖父母のいる国（親の生まれた国）に旅行し、親の祖国で現地に馴染んで生活している。経済的にも恵まれていて、学歴も高く、教育への意識・関心も高い。

研修を受講するまでは、親の状況を理解してはいても、4名の児童に日本の生活様式に合わせられるように支援を行っていたように思う。すなわち、日本での生活に困りが生じないように支援してきた。学校のカリキュラムや授業形態に困りは無いかや、夏休みの過ごし方・提出文書への困りは無いかを聴き取り必要であれば支援してきた。日本人として生活することへの壁を取り払うための支援を行っていたと考える。

しかし、研修を受講してからは、「その考えは間違っていたかもしれない。」と自問自答するようになった。彼らは日本人になりたくて日本の学校に来ているのではないかもしれない。日本国籍を取得することを希望していないかもしれない。成人したら自国の大学に進学するかもしれない。（現に自宅で日本語以外の言葉で学習も行っている）日本人になりたくて日本の学校で学んでいるのではなく、日本の教育に関心があり、日本の教育力に関心があるので日本の小学校に通学させているのではないかと。思うようになった。インターナショナルスクールに通学せず、本校に通学しているのは、カリキュラムに魅力を感じているからなのだと考えるようになった。

では、学校で行わなければならない教育活動は何なのかを考えなければならない。学校の決まりを押し付け、同化させるのではなく、個人の意思を大切に尊重する必要があると考える。日本国民にするための教育ではなく、良き市民となるための教育を受けさせることが大切であると考え。外国につながりがあ

る児童の様子や考え方に接することで、他の児童もその価値観を尊重するようになる。外国につながる児童がそばにいて、多様な価値観を得る機会があると考え。児童がそのように考えられる環境を創造する、そのような学級経営・学校経営を実践する必要がある。低学年のうちから、多文化を肌で感じ、人を理解することの大切さを感性として持つ児童に育てていく必要がある。

そこで、学校の中に、多文化共生の文化を掲示するコーナーを作成した。校長室から見えるところ、図書室の前に図書支援員さんにも協力してもらい、多文化共生コーナーを作成した。まだまだ途中ではあるが、児童が登校した時に気軽に手に取れる本を置き、情報を掲示した。食文化や生活、身近な文化を知れるようなコーナーにした。（写真1）

さらに、掲示板に世界地図を張り付け、各地に伝わる童話を提示し、自分の生活にも多文化が共生していることを意識付けられるようなコーナーにしていく。（写真2）

また、外国につながるを持つ保護者にも参加・協力してもらい、そのコーナーを充実させていく。ちょっとしたコメントや話を保護者からも引き出していく。

そうすることによって、外国につながるを持つ児童が他の児童から疎外感を感じることがなくなるのではないかと考える。他校の事例として、名前や髪の毛の色が日本人とは異なることでからかわれ、辛い思いをしている児童が居ると聞く。ほんの少しのコーナーではあるが、児童の感性を育て、色々な人が共存していることを発信していきたいと考える。



〈写真1〉多文化共生の文化を掲示するコーナー



〈写真2〉多文化童話マップ



外部機関との連携

京都市教育委員会人権教育担当

日本語が話せない児童が転入してきた時に、日本語指導を行う依頼をする。

公益財団法人京都市国際交流協会

外国からの留学生が登録している。本校に外国につながる児童が転入してきたときには、その国の留学生を紹介してもらい、学校に招き、交流を持ちたいと考える。

JICA関西、全国OV教員・教育研究会

国際理解プログラムを実施するにあたり、現在派遣中の協力隊委員を紹介してもらい、現地の隊員と児童との交流を実施する。

学校・教材・授業でつながる 互い・違いを認め合う 多文化共生の文化の土壌づくり

鵜川 仁子 和泉市立信太小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：419 名 外国につながる児童 / 生徒数：4名（全体の 0.9%）

学校背景



大阪府南部泉州地域の1学年2・3学級の小規模校である。今年度 150 周年を迎え、地域と歩んできた。ベトナム、中国、台湾、フィリピンにルーツがある児童が在籍している。近隣校区に朝鮮総連泉州支部があり、韓国・朝鮮籍の方々が一定数校区内に古くから暮らしている。校区内に団地があり、外国人が移住しやすい背景がある。近年は地域の工場等で技能実習生が働いているが、現時点で本校に外国につながる児童は少ない。

現在の課題



本校では、広島へ修学旅行に行く6年生が中心となり、1～5年生の児童と縦割り活動と一緒に平和を考える「平和学習」を長きに渡って取り組んでいる。

近隣校区には朝鮮総連支部があるが、特に学校とはつながっていないため、存在を知らない教員もいる。また朝鮮総連につながりがある児童がいるのかも定かではない。

外国にルーツがある児童が在籍している可能性があることを前提とした取り組みの必要性を感じるとともに、差別や偏見を無くし、全ての児童が自分のルーツに誇りを持って生きられる取り組みをしていきたい。

現在の取り組み



人権教育の年間計画、各学年の取り組みにおいて、各教科・各学年の学習の中で在日外国人問題や多文化共生についてつながる単元がある。

【小学校2年生例】国語：「外国語の小学校について聞こう」 道徳：「タヒチからの友達」「ハンナのなみだ」
⇒自分自身の学級や授業の話になるが、教科の単元で取り組む授業の一つとして考えており、授業実践後の反省として、学級の児童の中に多文化共生や海外について考え、児童の興味関心に結びつけることができたのかという課題が残った。
教材をより深く研究することで、児童にもまた教員にも実りのある授業づくりができるのではないかと考えた。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

クラス担任として日々子ども達と接する中で感じるものの一つに、自分とは全く違う境遇や環境で育ってきている子ども達がいる。その中で、もっと自分自身が幅広い知識と見分を持ち、児童一人一人をもっと深く理解し、児童がクラスという安心できる居場所づくりの必要性を感じた。



学校にとって

今の学校現場には、かつてよりも多様な児童がいる。また、本校には校区に児童養護施設もあり、外国にルーツの有無に関わらず児童の背景は様々である。

学校内において、中核となる教員だけでなく、学校内の教員全体が同じ方向で、その子の困り感等も共感し、受け入れることが不可欠であると感じた。



世界・社会にとって

今の日本には少子高齢化等、様々な課題がある。また日常で外国人が働いている様子も珍しくはない。どんな人も地域の一員、社会の一員として互いを認め合い、また互いの思いを共感し、そして相互に分かり合える社会づくりが欠かせない。

⇒日本だけでなく、世界のグローバル化への急速化に、みんなで立ち向かう。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

研修の中で、日本から外国に渡った日系移民にルーツを持つ伊藤さんや、日本で暮らすバングラデシュ人の父を持つ、海外にルーツがあるカーンさんの思いに触れた。お二方が講師として研修に来てくださり、参加者は思いに触れることができた。しかし今、学級や学校の中にも、教員が知らないところで海外につながりを持っている、思い等を言葉にはしないが何かしらの気持ちを抱えている児童が実はいるのかもしれないと感じた。教員として、まずは学校で児童の思いも含めて受け入れ、そして地域へと広げていける、どんな人も差別や偏見等なく受け入れられる文化づくりの必要性を感じた。

海外移住資料館では、教科書や歴史の授業等では学び切れなかった、日本を離れ海外に行った方々の思いがあった。しかし、今は日本から海外へ移住するよりも、日本にも外国から移住する人が多く来ている現状がある。そのスピードが加速化し、多様化している現在、受け入れる側のスピードが追いついていない部分がある。また、文化の違いから子ども達の間で違和感を感じ、子ども同士のいざこざ等が起こった時に、原因を「文化の違い」と片付けず、お互いを受け入れられる環境を整えていくには、まずは教員がこれまでよりも少し見方を変えたり、自分自身の知識と視野を広げてみることで、お互いが歩み寄れる場面もある。受け入れられる環境を少しずつでも整えていく必要性を感じた。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

●どんな人でも、どこでも、みんなが互いを認め合える居場所づくり。
⇒学校を卒業した後に、地域や社会の未来を担う子どもたちが先入観や差別的視点、偏見なく正しい知識を持って出会った互いを認めて、一緒に地域や社会を作っていきたいと考える。

●みんなが社会づくりの一員。
⇒どんな人も、誰もが国籍、性別、年代、地域を超えて社会を創り、支える一人である。
文化や立場、国籍等、様々な部分が個々に異なってもそれぞれが、それぞれの場で各自の「もちあじ」を活かして、もっと暮らしやすい社会や地域の担い手になる。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

現状の課題をみんなで考える。⇒「児童の海外への興味・関心の向上へ向けた授業づくり」

・本校に海外につながる児童は在籍しているが、困り感はない状況である。教員側から困り感を探るようなことも聞かないが、実は学校生活や日々の学習等において、学校が把握できていない悩みや困り感があるかもしれない。
・年間カリキュラムを活用し、より深く児童が外国や海外、また地域にいる外国につながる方々への興味・関心を高めたい。⇒「児童が外国や海外、多文化共生をより深く考える」ことや、児童の興味・関心につなげる。まずは、信太小学校の児童が多文化共生につながる一歩としての取り組みを、教員間において進めていきたい。そのためには「よりよい 児童を受け入れる環境づくり」。

まずは在日韓国・朝鮮の方について知る機会をつくる

近隣校区に朝鮮総連の支部があることや、一定数韓国・朝鮮にルーツがある人が暮らしていることはそれとなく知っている教員はいる。しかし本校在籍児童の内、どの子が韓国・朝鮮にルーツがあるのかは知らない。また児童や保護者からも特に打ち明けられたり、相談に来られることもあまり聞かない。

⇒オープンに明かすことができない理由があるのかもしれない。(差別や偏見)

信太小学校区の一部は被差別部落としての歴史を持っていて、また古くから在日韓国・朝鮮籍の方々の多住地域である。被差別部落問題と、在日韓国・朝鮮の方の問題はリンクしていると言われている。既に日本籍を取得している方も多数いると思われる。自分のルーツに誇りを持てるための取り組みを進めたい。

⇒どの教員もまずは校区における実情や現状、課題について知っておく必要がある。

外国につながる児童の学校外における居場所づくりについて共有する。

和泉市内に識字教室がある。かつては、学校に通えず教育の機会に恵まれなかった人に対しての読み書きの学習機会の提供であった。しかしここ10年においては、外国にルーツがある人や日本語を学びたい人への日本語指導へ活動が移ってきている。日常の学習のみならず交流会や研修会もあり、同じ地域住民としてのつながりづくりを第一に活動している。

そのような活動が校区内や近隣校区で行われていること等をしっかりと知り、伝えたりすることの大切さを感じる。

信太小学校に外国につながる児童は少ないが、研修の中の講演にあったように移民が増加している現在は、来てから考えるだけでなく、つながる先や、ある程度の困るであろうことを教員が知っておく必要

がある。

【居場所や地域のつながりに関する困り感（例）】

・識字教室が近隣校区にあることを知らず、日本語の学習はベトナム人ネットワークがある隣の市の泉大津まで行っていた。信太小学校の和泉市立北部リージョンセンターや近隣地域の和泉市立人権文化センター等の公共施設や、そこで行われている識字教室等を知らなかった。



〈いずみ識字学級〉

日本語を学ぶ場だけでなく、地域の居場所やつながりづくりの拠点にもなっている。

「多文化共生」へつながる教材研究・校内実践

本校の研究主題「夢中で学ぶ子」

～「気づき・問い」を生み出す 進んで対話する 自分の考えを豊かに表現する⇒お話の流れ（文脈）

本校では日々の授業において、教員主導で学習過程を押し進めるのではなく、児童自身が「気づき」「問い」を生み出し、仲間との対話を通して学び合い、自分の考えを豊かに表現できる授業づくりを目指している。

日々の授業づくりの教材研究において、つけたい力を明確にし、毎時間この授業で児童が何を学んだのか、どんな気づきがあったのか、そして児童同士をどのようにつなげるのかという点を重視している。上記の「所属先での多文化共生教育や、「多文化共生の文化」を創るための現在の取り組み」にも示したが、各教科・各学年の中で人権学習や、多文化共生についてつながる単元がある。

授業の教材研究を行う中で、教員同士が手を取り合い、教材から児童が多文化共生について深く考え、児童が海外や異文化理解についてもっと知りたくなる授業づくりや、児童が気づきを持ち、対話が深まる授業について考えていく。

研究主題「夢中で学ぶ子」と「多文化共生の文化の共創」との関連

授業づくりでは、特に児童一人一人の自分らしい「気づき」「問い」を大切にしてきた。学習集団の中には、生まれ育った環境の違いや教科に対する得意・不得意と言った意識の違いが存在する。一人一人の児童に違いがあるからこそ、学習内で生み出される「気づき」「問い」に個性やこだわりが表出されてくる。

仲間の自分らしい「気づき」を聴き、寄り添う。そして仲間の「問い」を大切に、対話を通して考えを洗練させていく。個々に違いがあるからこそ、学習過程が豊かになると考えて校内で取り組みを行ってきた。

「少しずつからでも」多文化共生の土壌づくりに向け、 対児童への取り組み

給食時間における、ALT 教員との学級児童との交流

3年生から外国語の授業が始まるが、2年生の児童は外国語担当教員と学習面における関わりは無い。

週1回来校するALT教員を、2年生の学級に給食時に児童が招待した。初めて外国の人と話したという児童が大半であった。児童らが給食と一緒に食べながらALT教員に質問を行った。交流を通して、外国と日本との違いを知るだけでなく、サッカーやアニメが好きという点等、国が違っていても自分達と同じところもあることを知ることができた。

校内掲示物で、海外を知る

保健室前の掲示板に、養護教諭が制作した掲示物で海外の紹介があった。児童が国や文化の違いを楽しみながら学ぶことができた。



〈ALT との給食交流〉
児童からたくさんの質問がされた。また給食後は英語でじゃんけんゲームを行った。



〈児童が海外へつながる掲示物〉
身近な内容を分かりやすく、児童が興味関心を寄せる掲示物を養護教諭が作成した。

おわりに

私はかつて教職に就く以前に働いていた会社で出会った留学生や、海外から日本へ出稼ぎに来た人たちとの触れ合いで多文化共生を知った。そのときに、多文化共生について考える機会を得たから考えることができた。

まずは同僚の教員に、多文化共生について自身が興味のあることをまずは話しかけてみたい。「同僚教員に話しても、…」から「もっと多文化共生についてみんなで考えたい」に気持ちが変わった。私が多文化共生に興味があることも、同僚の教員に伝えられていない。そうであれば、自分からもっと多文化共生について、日々考えたことや感じていることを同僚の教員に伝えていく。

職員室で同僚の教員と対話を通して、教員それぞれの想いを感じ合い、職員室の同僚の教員みんなで手を取り合いながら一緒に多文化共生に関する取り組みや、日々の授業づくりを行っていきたいと考えている。



〈信太小校区の伝統産業「ガラス細工」〉
明治時代から農家の副業として行われ、輸出産業となった。
2年生生活科学学習では、職人の方に見せて頂き、インタビューを行った。
自分たちの信太校区で作られたガラス細工が、海外にも輸出されていたことで児童は驚いていた



〈平和学習〉
6年生が修学旅行を通して学んだことを1～5年生に伝える平和報告会

平和学習の一環で、2年生の学級に上級生が来て、鶴の折り方を教わった。1～6年生の児童が作った鶴を6年生の児童が広島へ届ける。



〈縦割り活動〉
2年生が1年生に七夕の飾りづくりを教えた。学年をまたいだ取り組み。

外部機関との連携

JICA 関西 大阪デスク

多文化共生や国際理解教育に関する学習実施時等に、相談先の一つとして教員に共有。

今回の研修で、JICAには様々な国際理解教育の関連教材があることも知った。児童がもっと学びたい教材を活用し、児童の理解を深めていきたい。

いずみ識字教室

被差別部落の識字活動としてかつて開設された。日本語教室ではないが、現在、日本語を母語としない学習者の受け入れも実施しており、海外から和泉市にやってきた保護者への日本語指導を行っている。外国にルーツがある方々が、地域で暮らす上での生活情報提供の場、居場所の一つとして教員に周知。

信太中学校

校区内の中学校内には、日本語教室がある。今年度、校区内の3つの小学校と1つの中学校で、教科間における小中連携を教員研修として実施している。外国につながる児童が来た時に、地域の学校としての連携を期待したい。

「異なる文化」を受け入れ、誰もが安心して過ごすことができる 学級・学校を目指して

黒崎 有夏 広島大学附属三原小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：377名 外国につながる児童 / 生徒数：10名（全体の2.6%）

学校背景



市内に造船所や県立大学があり、街中で外国人を見かけることも少なくない。三原市は人口約9万のうち、外国人住民は2,628人（令和5年11月30日現在）であり、年々増加傾向にある。

本校には、外国にルーツのある児童や、海外の日本人学校から帰国・転入してきた児童が数名在籍している。一時的な海外移住や、保護者が日本語堪能等の背景から、日本語指導が必要な児童はいない。

現在の課題



本校は、幼稚園・小学校・中学校の3校種が同じ敷地内にある全国的にも珍しい学校園である。長い間同じ環境で暮らしているので、互いのことをよく理解し合い、受容しながら学校生活を送っている。一方で、長い間培われてきた学校園内の基準で物事を考えがちでもある。

幼小中一貫教育を行っていることもあり、学校園内は安心して過ごすことができる環境である。また、転出入者が少なく、異文化間の衝突が起こらず、「多文化共生」教育を急いで行う必要性がない。そのため、教育課程に国際理解教育や多文化共生教育が設けられていない。

現在の取り組み



1. 異年齢・異校種の子どもとの交流体験

本校では、慣例的に「ペア交流」と呼ばれる異年齢交流を継続的に行っている。小学校内では、1年生と5年生、2年生と6年生がそれぞれペアになって交流活動を行う。これは、幼稚園年長児と4年生との関わりから始まり、数年かけて互いを知り、絆を深めていく。このペアは「さわやか班」（縦割り班活動）でも生かされ、日頃の縦割り班掃除や、「1年生を迎える会」「6年生を送る会」、親睦遠足等の学校行事を一緒に行う。また、ペア交流以外においても、中学生が小学生にプレゼンテーションを行ったり、小学生と中学生が一緒に話し合ったりする、校種を超えた学習の機会を設けている。

異年齢の子どもや、異年齢集団の文化に触れることによって、自分たちと異なる文化や価値観に触れることができる。また、一緒に学んだり楽しんだりする活動を行うことによって、他者を受け入れることの大切さや、目標に向かって共に創り上げていくことの良さについて追求する態度を育んでいる。

2. 留学生との交流体験

広島大学には、多くの留学生が在籍しており、留学生との交流活動も行っている。令和4年度は、6年生が留学生を学校に招いて日本の文化を英語で紹介し、交流を行う会を開いた。また「グローバルクラブ」の活動では、毎年留学生との交流会を設定し、浴衣の着付け体験や和楽器である箏の演奏、茶道体験を行っている。

海外の様々な文化的背景を持つ他者と関わり合う機会を設けることで、相手の文化を尊重しながら関わる態度を育むとともに、自分が生活している日本の文化について学ぶ機会にもなっている。

3. 多様な「他者」との関わり

3年生の社会科では、地域学習の中で三原市の伝統工芸である「三原だるま」について学んでいる。ゲストティーチャーを招いて、だるまの面相書きを体験し、当事者の思いや願いについて学ぶとともに、これからの課題について考える機会を設けている。また6年生の社会科では、弁護士を招いて模擬裁判を行ったり、企業と連携を図り、フリマアプリを通して経済活動について考える学習を行ったりしている。

ゲストティーチャーによる「当事者の声」をもとにした学びは、子どもにとってリアルな「ほんものの学び」となり、学校の外にいる多様な立場の人々の考え方に触れることができる。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

自分にも相手にもマジョリティやマイノリティといったラベルを貼らず、多様な他者と対等な関係を築くため。正しく、広く深い知識をベースに、多様な文化を認めた上で、本当の意味で一個人として、相手と向かい合うことができると考える。



学校にとって

様々な家庭環境や背景を持つ子どもがともに過ごす学校の中で、どの子ども保護者も安心して過ごすことができる居場所を作るため。「多文化共生の文化」を実現することで、より良い学校・学級づくりにつなげることができる。



世界・社会にとって

様々な背景を持つ人々と前向きに関わることによって、平和な世界の基礎・基盤を構築していくことができると考える。また、変容していく社会に対応し、国際社会の中で生き残っていくためにも、視野を広げ、共に手を取り合っていかなければならない。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

移民につながる当事者の話を聞き、どのようなマインドでこれまでの人生を歩んできたのか、何に悩み苦しみ、何が救いとなったのかを聞くことができた。他者の無知や無関心が人を傷つけ、一方で、一個人として向き合うことが前を向くことができたきっかけになったという話が印象的である。また、森茂先生の講演の中で、日本と相手の母国の価値観や文化の違いから起こるすれ違いや、子どもの自尊感情の低下について学んだ。果たして自分は、子どもに正しい対応ができていたのか、自分の母国の「物差し」で接したり評価したりしていなかっただろうか。

また、多様な校種や立場、地域の先生方と話す中で、それぞれの状況があり、自分の知る学校だけが「教育現場」ではないと感じた。環境や職員、子ども、保護者など、「なぜ、今、うまくいっていないのか」「何のために多文化共生が必要だと考えるのか」「どのように行動していけばよいのか」など、それぞれの思う未来や思いを語り合うことができ、やはり、子どものために現状をどうにかしていきたいと考えた。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

互いを尊重し合い、認め合える文化

日本国内においても、地域によってそれぞれの土地の慣習や言語、考え方がある。また、同じ場所においても、年齢や性別、立場によって価値観が異なることは多くある。絶対的な「正しさ」というものは存在しないことを一人一人が自覚し、「ちがいを」前向きに受け止め、それぞれの価値観を受容し認め合えること、相手の考え方を尊重し相手をより深く知ろうとする態度が重要であると考えられる。また、全ての人々が安心して過ごせる社会や学校を実現するために、心情面の「多文化共生の文化」を創ると共に、制度や社会の仕組みを整える（整えようとする）ことが必要であると考えられる。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

異なる文化への気づきを促すカリキュラム・マネジメント

異なる文化や価値観があることに気づかせ、児童の視野を広げ、考えを深める教育課程を策定する。以下は例。

①国際理解の視点から 国語科、社会科、外国語活動・外国語科 等で国際理解の視点で学習指導を行う。

国語科

比較文化論の観点から述べられている説明文が教材文として教科書に収録されている。また、外国の文化について情報収集や情報の精選を行い、新聞や意見文等にまとめる学習を設定する。それらを通して様々な文化を知ることができる。

社会科

様々な言語での社会サービス、外国人の参政権、外国と日本との関わりの歴史等、共生社会の実現に向けた社会の在り方について学ぶ機会を設ける。ゲストティーチャーの招聘や社会科見学等も積極的に行う。

外国語科

コミュニケーション活動を通して、外国語の背景にある文化への関心を高める。外国について調べ、英語でプレゼンテーションを行ったり、対面やオンラインで留学生と外国語で交流をする機会を設けたりする。世界には、英語だけでなく様々な外国語が存在することにも気づかせたい。

②社会的マイノリティへのまなざしを持つ

社会における様々なマイノリティ（居住地、性別、国籍、病気や障がいの有無、宗教 等）に気づく。

社会科

様々なマイノリティやマジョリティの「特権」について考え、人権を尊重し、よりよい社会を作り上げていく方策について議論する。現実社会の問題に直結する社会科の学習が「多文化共生の文化」について考えやすい教科である。学習課題を設定しやすい一方で、複雑な社会的事象に対する様々な立場からみた考えを持たせる必要があり、当事者となる学習者も想定されるため細心の配慮をもって取り組まなければならない。

広島市は1945年の原爆投下を経験しているため、その後の被爆者への差別という視点からみた人権、戦争と平和、国際社会における「ヒロシマ」の立場や役割について考えることもできるだろう。

総合的な学習の時間

ユニバーサルデザインやバリアフリーについて学ぶ。疑似体験や近隣の施設への訪問を行い、体験的に学び考えることができる。さらに、地域と連携を図り、販売体験を行うプログラムも考えられる。販売する場所や仕入れ先、商品について考える中で弱い物弱者の存在や、商品の売買を支える人々の存在、安く売るために適切な賃金を支払ってもらえない人や過重労働、海外における児童労働の実態について学ぶことができる。

特別の教科 道徳

「多文化共生の文化」を支える道徳的心情を養う。発達段階に応じて、児童自身が自己のよりよい生き方について考え、他者とのように関わっていくべきか考えを深める。

子ども・保護者理解

1. 外国にルーツのある児童や、海外への渡航経験がある児童の思いを表出させる場を設定する。

日常的な会話や授業の中で、国際理解の視点から様々な国の文化や価値観について、該当する児童自身が語る場を設ける。日本の学校や文化に馴染もうと努力している児童は、海外での経験やそこで培った価値観について声高に語ることは少ない。相手に理解してもらおうとする態度や相手を理解しようとする態度を養うと共に、互いを認め合う支持的風土を創ることができる。と考える。

また、調べた内容や知っていることについて語ることを認める場を設けることで、外国との縁が薄い子どもも「自分とは関係がない世界の話」ではなく、「場の一員」として意識を持って関わろうとする態度を育むことができるだろう。

2. 全職員で情報を共有し、組織的に対応する。

日常の学校生活や、教科指導において、外国にルーツのある児童や、渡航経験のある児童は、文化や価値観の違いから違和感や不安感、困り感を感じることがある。児童や保護者の思いに気づいた教員は、まず共感的に受け止め、寄り添うことが大切である。それにより、人間関係を深め、児童や保護者と信頼関係を築くことができる。また、本人・保護者の同意のもと全職員で情報共有を図ることで、組織的な対応が可能となり、安心して学校生活を送ることができる学校づくりをすることができるだろう。



外部機関との連携

三原市役所（経営企画課、国際交流員）

国際交流員との交流

広島大学（国際交流センター）

留学生との交流

JICA 中国

学校訪問、交流プログラム 等

違いを楽しむことができる子どもの育成 ～多文化共生の土壌づくり～

舩田 大生 熊本市立城南小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：225 名 外国につながる児童 / 生徒数：1名（全体の0.4%）

学校背景



2年生に外国につながる児童が在籍している。1年時はほとんど日本語を話すことはできなかったが、日本語指導教員の指導・支援の結果、現在では日本語を流暢に話すことができる。

また、本年度から熊本市南区の日本語指導の拠点として日本語指導教室が新設された。日本語指導担当教員による校内研修で、本校職員の外国籍児童の受け入れ方について意識向上をしてくださっている。

現在の課題



職員、子ども全員が在籍中の外国籍児童に関われていないことが課題であると考え。子どもの成長のためにも色々な人と関われる場の設定が必要である。全校集会や学習発表会等の活躍の場を設定することで、本人の自己有用感、周囲の理解にもつながると考える。また、周囲の子どもが外国の文化を知らず、悪気なく気になる発言をする子どもがいる。子どもたちは知らないことで、他人を傷つけてしまう恐れがある。多文化共生を目指すためにも、海外の文化や背景について、できるだけ多くのことを知らせる必要がある。

現在の取り組み



学校での取り組み

日本語指導教員による校内研修

個人での取り組み

熊本大学教職大学院にて「外国人材の受入れ・共生を支える教員等養成・研修プログラム」に参加



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

今、目の前にいる子どもたちが将来スムーズに他の文化と触れ合うことができるような指導をするため。



学校にとって

みんなが安心して、平和に暮らす集団になるため。



世界・社会にとって

困っていない人（特権を持つ人）が困っている人に自然と手を差し伸べることができる世の中になって欲しいから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

研修を受ける前は、私自身が外国籍の子ども達とどうつながるか、周囲とどうつなげるかを考えていたが、研修を受ける中で今自分にできることは何かを考えるようになった。すると、今目の前にいる子ども達を育て、意識を高めることが、これからの多文化共生の土壌づくりになると思うようになった。私たち、子どもたちが今感じているあたりまえのことを少しでも変える必要性、また日本人であるということの特権や特技があることによる、特権を持つ人が特権を持たない人を支えてあげるマインドを育てることが必要だと感じるようになった。あたりまえを変えることで、受け入れることができる部分を増やし、お互いが過ごしやすい環境を育てていかなければならないと考える。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

あたりまえの枠を拓げ、みんなが過ごしやすい環境

みんなのあたりまえ(許せる範囲)を拡大することで、これまでは否定してしまったり、受け入れられなかったりしたことを少しでも受け入れられるようにし、笑顔を増やすというねらいを持って、これから多文化共生の文化を創っていきたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

本校では、ほとんどの子どもが外国につながる児童とかかわる機会がない。しかし、これからの日本はどんどんグローバル化が進み、本校の子どもたちも外国につながる方と出会う可能性が高いため、下記の指導案をもとに、多文化共生の土壌づくりに取り組んでいきたい。

指導案

第〇学年〇組 学習デザイン案			
1 単元名 「多文化共生について考えよう」(特別活動)			
2 本時の学習			
(1) 本時のねらい 自分が考えている「あたりまえ」を見つめなおし、自分と違う考えを持った人より良い生活をするために必要なことを考えることができる。			
(2) 教師が思い浮かべる本時の展開			
つか わ む (7分)	1. 本時の学習の見通しをもつ 2. 近くにいる友達との考えの違いを知る。 2人で遊んでいるときに、友だちが勝手に自分のチョコレートを食べていた。あなたは どう思いますか？ A. 全然気にしない B. 少しイヤだけど、問題にしない。 C. あまりいい気持ではない。 D. 不愉快だ。 ・勝手に食べるなんて許せない！ ・チョコくらい食べられてもよくない？	○今日の授業では、相手の考えを否定しないように意識づける。 ○事前に取ったアンケート結果を見せ、子どもたち自身の意見を全体で共有する。 ○全体で意見を共有し、様々な意見に触れるようにする。 ○聞く側は聞くことに徹するように声をかける。	タブレット 電子黒板
学 ぶ (33分)	3. めあてを立てる 自分と違う考えを持つ人より良い生活をするために大切なことを考えよう 4. 海外で暮らす子どもたちとの考えの違いを知る。 ・なんでこんな違うの？ ・同じ考えの人いるみたい。 5. 「自分と違う考えを持つ人より良い生活をするために大切なこと」を考える。 (1) 班で意見の交換をする。 (2) 全体で意見の共有をする。 ・考え方が違うのか…。 ・食べたいなら食べたいって言ってほしい。 ・自分からも「食べないでね」って言ってあげばよかった。	○本時で意識してほしいポイント「自分と違う考えを持つ人より良い生活をするために大切なこと」を伝え、めあてを立てる。 ○考えをさらに広げるため、中国、韓国の子どもの意見『A, B が60～70%を占める』、台湾籍の子どもの意見『B, C 共に45%、D が10%』を見せ、自分たちと違う部分、同じ部分を確認する。 ○中国の子どもの意見「チョコレートを勝手に食べてもいらい仲良くなったと思った。」を伝える。 ○相手とより良い生活をするために必要なことを確認する。 ※自分と違う考えを持つ人より良い生活をするために大切な考えを持つことができる。(発表・ふり返り)	タブレット アンケート
ふ り 返 り (5分)	6. ふり返り ・相手と話したり、相手のことを聞いたりすることが大切だということがわかりました。 ・違う考えがあってもおもしろいと思いました。	○アンケート時点の自分の考えと今の考えが変化したか確認する。 ○お互いに自分の考えだけでなく、相手の考えも聞いて、行動することの大切さを伝える。	

授業資料

◎次のシナリオを読んで質問に答えて、選んだ理由も書きましょう。

たけしさんとりゅうさんは、同じクラスで仲の良い友だちです。
たけしさんの家で遊んでいるとき、それぞれのおやつを食べることにしました。たけしさんはチョコレートを出して食べようと思ったところ、親から呼ばれて部屋から出て行きました。
しばらくして、たけしさんが部屋に戻ってくると、チョコレートがすべてなくなっていました。「僕のチョコレートは？」とたずねると、りゅうさんは「僕が好きでチョコレートだったから全部食べた」と言いました。

- A. 全然気にしない。仲良しなのでお互いのものを区別する必要はない。
B. 少し気になるけど、問題にしない。2人の関係にも影響はない。
C. あまりいい気持ではない。今度またこんなことがあると困る。
D. 不愉快だ。りゅうさんの行動は理解しにくい。

選んだ記号→

選んだ理由

<参考文献>

森茂雄 監修、川崎誠司・桐谷正信・中山京子編著「国際理解教育と多文化教育のまなざし 多様性と社会正義／公正の教育にむけて」明石書店、2023年、13「異己」との共創をめざして―「異己」理解・共生から「異己」との共創へ(釜田聡)



外部機関との連携

JICA で海外研修を体験された方の講演

海外の食文化に触れる体験として、
①海外とつながる保護者を招いて家庭科の調理実習をする。
②給食のメニュー提供をお願いする。

日本語指導教員の協力による
海外の日本人学校や現地校との交流

地域コミュニティと連携した多文化教育プログラムの強化

郡 守彦 神戸市立義務教育学校八多学園

所属先情報

全校児童 / 生徒数 : 56 / 41名 外国につながる児童 / 生徒数 : 2名 (全体の2%)

学校背景



本校では、外国につながる児童は2名のみである。しかし、市全体で新渡日児童生徒が増えており、卒業後も、多文化共生の重要性が高まっている。だからこそ進学前に多文化・多言語教育の強化の必要性が高まっていると考える。特に、多様な言語背景を持つ新渡日児童生徒が増える中で、早期の教育対応が求められている。

現在の課題



学校における多文化共生の取り組みに関し、課題と感じているのは、職員間のモチベーションの差と学ぶ機会の偏りである。教職員が多文化共生の重要性に対する理解を深めるための研修体制と機会の提供が必要である。私は外国語の専門教員ではないこともあり、以前は多文化共生に対する関心が高くなかった。しかし、学ぶチャンスが提供されることで、専門外の教員であっても関心と理解が深まることを実感している。専門外の教員が多文化共生の研修に参加することは、新しい視点を提供し、その取り組みの意義を深めるものであると考える。

現在の取り組み



9年間を通じた教育課程の実践

小中一貫校の義務教育学校として、1年生から英語の授業を実施し、9年間を通じて子どもたちの成長に合わせたグローバルコミュニケーション力を身に付ける教育課程を実践している。神戸市教育委員会に所属する様々な国のALTも定期的に学校訪問に参加している。

国際交流授業の推進

昨年度より台湾にある芙林小学校との国際オンライン交流を開始している。また、今年度より後期課程では、パキスタン、インドネシア、アフガニスタンの中学校と交流し、国の文化や考えの違いを学んだりできる機会を設けている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

現在の立ち位置を知ることで自分の周りの人の意識を広げていくことができることに気がついた。自分の「当たり前」が研修を通じた人との出会いによって変化した。



学校にとって

学校には子どもたちの生活を保障する役割がある。そのためにも一人一人の相互理解ができる場を設け、お互いの今を大事にしている場所となっていくことが大事だと考える。



世界・社会にとって

様々な価値観が共存する現代において、自分を知り、相手に関心を持つことが大切だと感じた。一人一人の考え方が世界・社会を変えていくための一歩となると考える。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

研修を通じて、多文化共生の文化が自分自身、学校、そして世界・社会にとって重要である理由を深く理解した。全国の先生方との議論や、マイノリティに立つ方々の経験談を聞く機会が特に印象深かった。これらの経験が、私の「当たり前」を見つめ直し、より広い視野で物事を捉えることができるきっかけとなった。研修は、自己の価値観の再考と、周囲への意識を拓ける契機となっている。

また、学校現場において、子どもたちの相互理解と共生を深めるための教育方法や環境づくりの重要性を認識した。学校は単なる知識の提供の場ではなく、多様性を認め合い、尊重するための場であるべきだと考えている。さらに、社会全体に目を向けると、マジョリティ集団がマイノリティ集団への差別に気づきにくいという現実を改めて知った。この認識の不足が、不平等や誤解を生む原因となる。

一人一人の価値観や行動が社会に与える影響の大きさを学び、多文化共生の理解を深めることで、より包括的かつ寛容な社会を築いていくことの重要性を感じている。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

私が目指す「多文化共生の文化」は、誰もが安心して笑顔で暮らせる社会である。この目標達成には、学校と地域が重要な役割を果たす。学校では、異なる文化背景を持つ児童生徒が互いの違いを理解し、共感するための活動を導入することが大切である。教育活動を通して相互理解と尊重の精神が育成され、多様性を自然に受け入れる力を身につけることができる。地域では、異文化の住民が集まり、理解を深めるイベントを定期的に行うことが効果的だと考える。地域における多文化共生を促進し、異なる背景を持つ人々が相互に支え合い、共生する基盤を築くことに寄与する。このような取り組みを通じて、誰もが自分らしく、安心して生きることができる環境を創り上げ、多文化共生の価値が広く認識され、包括的な社会の構築に貢献することを目指したい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

八多学園において多文化共生の文化を促進するため、学校としての取り組みをさらに深化させる必要がある。以下に提案する活動は、八多学園の児童生徒、教職員、さらには地域コミュニティ全体に対して、多文化共生への意識を高めることを目指すものである。

1. 職員研修の拡充と深化

教職員が多文化共生の重要性を深く理解し、児童生徒に対して効果的なサポートを提供できるように、異文化間コミュニケーション、異文化教育法、専門家による講演会、実践的ワークショップなどを含む、継続的な研修プログラムを提供する。これにより、教職員は多文化共生に必要な知識と技術を習得し、児童生徒への指導方法を多様化できるようになる。また、教職員間の意見交換の場を設けることで、多文化教育に関するアイデアや経験を共有し、学校全体の取り組みを強化する。



職員研修

2. 多文化教育プログラムの強化

児童生徒たちが異文化を理解し、尊重する姿勢を身につけるために、多文化教育プログラムを強化する。異文化に関するプロジェクトベースの学習、国際交流体験、多文化アートや音楽イベントなどを通じて、異文化に対する敬意を学び、国際的な視野を養うことができる。また、これらの活動においては、児童生徒自身が企画や運営に関わることで、主体性を育み、異文化理解を深める機会とする。



多文化教育に関する授業（音楽会でのアンクロンの演奏）

3. 地域コミュニティとの連携強化

地域コミュニティとの連携を強化することで、学校外での学びを促進し、児童生徒たちが地域社会に貢献する機会を提供する。地元の祭りや文化イベントへの参加、多文化共生を促進するための地域ボランティア活動、地域住民との対話セッションなどを企画する。これらの活動を通じて、児童生徒たちは社会的スキルを向上させ、地域住民との相互理解を深めることができる。



地球っこプログラム（3年生）

4. 農業体験プロジェクトの推進

八多学園の地理的特性を活かした農業体験プロジェクトを推進する。里山での農業体験を通じて、様々な文化背景を持つ地域住民と協力し、共同作業を行う機会を得ることができる。この活動は、実際の農作業を通じて自然と触れ合いながら、異なる文化や価値観への理解と尊重を育てる実践的な場となり、多文化共生の意識を高めることにつながる。



農作業体験

5. 外国語教育の強化と交流先の拡大

外国語教育を強化し、ユネスコスクールへの指定を目指すことで、児童生徒たちは多様な言語に触れる機会を得る。また、国際交流プログラムや姉妹校との連携を通じて、児童生徒たちは広範な国際経験を積むことができる。これにより、児童生徒たちは異文化を深く理解し、グローバルな視野を持つことが可能となる。



国際交流授業

6. 多文化理解プロジェクトの実施

八多ふれあいのまちづくり協議会などの地域コミュニティと協力し、多文化理解を深めるためのプロジェクトを学校内外で展開する。児童生徒たちは地域社会の多文化共生の実践に積極的に関わることができる。また、このプロジェクトは地域住民との相互理解を促進し、より強固な地域コミュニティの構築に寄与する。

八多学園でのこれらの活動は、地域社会に対しても良い影響を与え、より包括的で開かれた多文化共生のモデルを提供することが期待される。



外部機関との連携

八多町地域コミュニティセンターとの連携

八多町地域コミュニティセンターと協力し、多文化理解を促進するための地域イベントを実施できないか検討していきたい。例えば、国際文化祭の開催や多言語でのストーリーテリングセッションを通じて、地域住民と留学生が異文化に触れ合う機会を提供することなどを計画していきたい。

神戸市国際交流協会の活用

神戸市国際交流協会のリソースを活用して、八多学園での多文化教育プログラムを強化する。例えば、外国語を母語とする留学生を招いての言語ワークショップや、異文化理解を深めるためのセミナーを開催する。

地元 NPO や国際支援団体との協働

地域に根ざした NPO や国際支援団体と連携し、学生たちが多文化共生の実践に参加するプロジェクトを組む。例えば、地元の国際支援団体と共に、異文化理解をテーマにした学生プロジェクトを立ち上げ、実際の国際協力活動に参加する機会を提供する。

多文化共生アイデア 30 連発くらい

井上 陽平 甲賀市立水口中学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：814 名 外国につながる児童 / 生徒数：71名（全体の9%）

学校背景



甲賀市は滋賀県の南東部に位置する地方都市である。近くに名神高速道路、新名神高速道路が通り、多くの工業団地がある。1990 年代より南米からの日系人を中心に多くの外国人が工場労働者として流入し、その2世が通学しているケースが多い。また近年はフィリピンを中心としたアジア系の生徒も増加しており、国籍も多様化しつつある。

現在の課題



日本語がほとんど話せないまま転入してくる生徒がいることに加え、生活言語に大きな問題はないが授業や入試などで使われる学習言語の理解が難しく、成績がふるわない中で学習への意欲が低下する生徒も多い。学校での学習支援も主として宿題の補助や授業の繰り返しなどが中心で、系統だった指導が出来ているわけではない。また本国と日本の教育制度にちがいがあった場合、保護者も教員も理解や説明に苦慮することがある。

現在の取り組み



- ・ 道徳や人権学習の中で多文化共生をはばむもの（偏見、情報の盲信、無知など）を取り上げる。またマイノリティに置かれた人（障がい者、被差別部落など）の苦しみや誇り、闘いを学ぶ機会を持っている。
- ・ 校内に日本語教室を設置し、学習支援を行いながら生徒の変化や悩みなどに気づく機会としている。今年度より国語の学習補助だけでなく、他教科の学習支援も行い、関わる教員の数も増えている。
- ・ 複数の言語の母語支援員の方が配属されており、学習だけでなく生活の支援も含めて活動してくださっている。
- ・ 全校集会で多文化共生をテーマにした講演を開いたり、家庭科や社会科など多くの教科で SDGs を取り上げたりする。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

「寄り添い」「やさしさ」でも「無視」「ヘイト」でもない、自分独自の「人との距離感」を考える機会となるから。またその機会を通して自分自身を知ることにもなるから。



学校にとって

出身や生活背景に関わらず、どんな生徒でも分かる学習と意見を言える場面を提供することで、生徒一人一人が将来の可能性を広げることができるから。



世界・社会にとって

様々な理由でマイノリティになっても安心して暮らせる社会を作り、誰もが未来を恐れずに進む世界を創ることができるから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

- ・ 多文化共生というのは、片方が片方を理解するだけでは双方のためにならない。移民の場合にも、移ってくる側も迎える側も等しく変わらなければならないし、変わる覚悟を持たなければならない。しかしそれは「自分は何を守り、何を变えるのか」をはっきりさせないと行動に移すことはできない。このプロセスを生徒に体験させることが多文化共生の文化を創ることだと感じている。そして、そこにたった一つの答えがあるわけではないので、教員も生徒と一緒に考えていくことが大切だと考えている。
- ・ 日本人の中でも多様な価値観を持つ人が増え、移民がいる・いないに関わらず、すでに日本社会は「多文化社会」になっている。だからすでに多くの実践例があるエンカウンター学活、道徳、特別支援学級や通級学級での授業の組み立て、人権学習などをブラッシュアップさせることで多文化社会の土台作りは充分可能である。外国にルーツのある生徒が増えたら、その対応を上乗せする。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- ・異質なものに会ったときに感じるストレスを無視しない。しかしそのストレスが嫌悪感に変わらず、これから自分はどうしていくのかを考える機会にする、という思考を多くの人ができる。
- ・「やさしさ」や「思いやり」に陥らず、障壁の撤廃、ルールの明文化など「制度」として成立させる。
- ・自分と他者の「共通点」と「相違点」を見つけ、「ちがうけど仲間」という意識につなげていく。
- ・「人それぞれ」を結論にせず、合意点を見つける努力をする。そうしないと「共生」ではなく「並立」になってしまう。
- ・教員が多文化共生という「見えないもの」を「見えるもの」にしていく努力を積み重ね、交流（健全な形での競争）をしていく。だから失敗を恐れず（どうせ答えなどないんだし）、アイデアをどんどん行動にする。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

自分は現場の教員である以上、総論的な話や学術的な話をすることより、「現場で」「短時間で」「スペシャルではない」取り組みを数多く考え、多くの失敗も重ねながら実践続けていくことが重要だと考えている。ここでは過去に実践した取り組みや「こんなんしたらえんちゃうか」というアイデアを羅列することにする。

A. 対全ての生徒

(1) 多文化共生のベースとなる考え方を理解する授業づくり

既存の教材を「多文化共生」の視点からブラッシュアップする（例：「アイスブレイク」「部屋の四隅」などのエンカウンター技法や「ダイヤモンドランキング」「KJ法」などの思考技法の活用）ことで実現可能。もちろん教員自身の感性に基づくオリジナル教材の開発もよい。ここでは筆者のオリジナル教材を、多文化共生に必要なだと考える価値・授業づくりのねらい・簡単な授業進行・伝える内容の順に整理する。

授業づくりの際の留意点

- 生徒に目的を見透かされない。生徒からの「期待される答え」の発言を防ぐ。意外な方向からの導入が有効。
- 暗くない。大事なことは「楽しかった」という記憶とともに頭に入れさせる。
- 自由に言える発問がある。知識が要らず、感性だけで考えられる課題を提示し、ワイワイさせる場面を作る。
- 価値や原則に関しては教え込む。オープンエンドにしているのは方法や理由のみ。説諭の充実。

①気持ちを分かろうとする姿勢

人の気持ちは分からないことは認めるが、それを言い訳にはさせない。

進行：いろんな表情のイラストと気持ちを示すことばカードを合致させていく（大人教 HP「いま、どんなきもち？」をアレンジ）。また棒15本を使って「怒った顔」「笑った顔」「泣き顔」などを作っていく。

→ 人の気持ちは分からない。でも「分かろうとする姿勢」が信頼を作っていく。

②平和の構築

平和はもともとないし、祈っても願っても来ない。平和はその時、その場で作るものだを知る。

進行：「ほとんどの人は平和を望んでいるのになぜ平和にならないの？」と問いかけ、意見が分かれる写真（例：戦闘機ショーで空に描かれたハート、パンダ模様染色された犬、アンパンチなど）を見て、これは「平和」なのかを意見交流、意見がわかることに気づかせる。

→ 「あなたの平和」と「わたしの平和」はちがう。だから話し合わない平和は来ない。

③差別の構造への気づき

差別を「作る」のは少数。大多数がそれに「乗る」かどうかで結果が決まる。進行：江戸時代、幕府が出したお触れには庶民に守られなかったものがある（例：酒、旅行の禁止）のに、なぜ「えた・ひにん」への差別は定着したのかについて考え、「いたら自分は最低にならない」「ストレス解消に便利」などの意見を出す中で、それはいじめ（＝ほとんどの差別）と同じ構造であることに気づかせる。

→ 差別は大多数が受け入れるかどうか側によって完成する。つまり「あなた」の態度次第。

④命の大切さ

命は見えないからいくら「命を大切に」と言っても無駄。命を可視化する必要がある。

進行：ガーナの棺桶を紹介し、自分はどんな棺桶を作りたいかを考える。さらに自分の葬式をプロデュースし、その葬式を実現するためにこれから何をしなければいけないかを書き、プレゼンしていく。

→ 自分は生きる価値があり、意味がある。そしてそれは誰にとっても同じ。

⑤共感する心

あの人に代わって怒る正義感より、あの人と一緒に泣く心をまず持たせる。

進行：キティちゃんには口がないのは、話しかけてくる人に合わせて口を変えるから。キティこうぞう「キティちゃんに口がない理由」(<https://www.joho.or.jp/column/column-1>)を読み、喜び、哀しみ、悩みなどの相談に対してキティちゃんはどんな口になるかを描き、セリフを考える。

→まず相談してきた人の気持ちに共感することが必要。相手は聞いてほしいのだから。

⑥マイノリティ体験

自分も何かでマイノリティ。だったらそうなるのもOKな社会を作る方がいい。

進行：意見の分かれる二者一択問題（かき氷のシロップといえばAメロンBいちご、〇〇園といえばA保育園B動物園など）を10問出し、すべて多数派だった人を聞く（ほほえない）。自分が少数派だったことに驚いた生徒に気持ちを聞き、その後社会における少数派はどんなものがあるかを考える。

→ マイノリティになった時でも怖がらなくていい社会を作った方が安心できる。

⑦条件の整備への気づき

「〇〇できない」人は、能力がないわけではなく、条件が揃ってないと考える習慣。

進行：5歳の頃の字と今の字を比べ、今のようにならなくていい多くの字が書けるようになるまでに何がなかったかをできるだけ多く出し、それをまず「道具」「人」などで分類、その後「自分の努力」「人の努力」に分類。

→「自分の努力」に関連するものはほとんどない。条件の整備こそが人権を守る鍵になる。

⑧メディアリテラシー

目にした情報を「本当かな？」と考える習慣づけ。情報とバイアスとの関係に気づく。

進行：1枚の写真をもってきて、そこに映っている人物を高く評価させるコメントと悪く思わせるコメントをひとつずつ考えて発表し、重点や見方によってどうとでも解釈できることに気づかせる。

→ 情報操作は簡単にできる。だから情報に接するときには半信半疑ではじめ必要がある。

⑨対立・衝突の回避

主張する目的は「自分をすっきりさせること」ではなく「状況を改善させること」

進行：習字で隣りの人の手が当たって字が乱れたとき、隣りの人に何と言うのかを考え、それを隣りの席の人に伝え、隣りの人はその言葉に対する言葉を考える。怒りや非難は上下関係（ごめんなさい、もうしません）か対立（わざとちゃうわ）しか生まないことに気づかせる。

→ 目的は二度と同じことが起きないようにすること。不必要な関係を作らないための言葉を使う。

(2) 国際理解や異文化交流独自の課題について取り上げる授業づくり

世界への興味を広げ、また世界は身近なものだと感じさせることで多文化共生に直接つながる思考や態度を得られるようにする。

授業づくりの際の留意点

- 写真を活用する。枚数は少なくし、考えさせる。撮影は1枚の写真に多くの情報をいれることを心掛ける。
- 楽しい出会いにする。おいしい食事、明るい話題を出し、行ってみたいと思わせることで関心が持続する。
- 考えさせる課題を出す。その国が抱える問題について、答えのない問いを出して意見を交流させる。
- 共通点があると感じられている国々（例：中国、朝鮮）とは相違点に気づくことを重点にし、共通点を見つけにくい国々（例：アフリカ、南米）とは共通点に気づくことを重点にする。そうすることで「違うけど仲間」というバランスを取れた国際感覚を持たせていく。

①外国の学習 教員が訪れた国や、生徒の母国などを紹介することで世界への興味を広げる。

授業A：韓国

- 韓国の学校生活の様子を数枚見せる。（同じような雰囲気＝共通点の強調）
 - 韓国の金属製の箸と日本の木の箸の質感や使用法のちがいを学ぶ。（相違点の強調①）
 - 韓国のBTSと日本のAKBとの戦略の違い（完成度重視／成長過程の提示）を学ぶ。（相違点の強調②）
 - 竹島をめぐる双方の主張を並べた上で、「それでも戦争をしない」関係でいるためにはどうすればいいかを考える。
- 韓国が「好き」な人、「嫌い」な人、「どっちでもない」人にわけて考える。（考えさせる課題）

授業B：タンザニア

- タンザニアの町の様子を数枚見せる（まったく違う雰囲気＝相違点の強調）
- クイズ：レストランに入ると洗面器とじょうろを持つ人が現れる。なんで？（食事前に手を洗う文化＝共通点の強調①）
- カンガ（布）に書かれた言葉を集めたプリントを配布し、「日本と同じやなあ」と思うものをひとつ（共通点の強調②）と、「かつこええなあ」と思うものをひとつ（楽しい出会い①）選んで発表する。
- 料理「チップスマイ（フライドポテトと卵）」の調理（楽しい出会い②）
- タンザニアの学校の抱える問題点（教材の不足、食事の不足、家族の世話を理由にした欠席、衛生環境、通学時間など）を列挙し、自分はどの問題点の改善に取り組みたいかを、自分の「好き」と照らし合わせて意見交流。（考えさせる課題）

②海外と比較した形の日本の学習

授業A：「日本 BOX」を作ってみよう

自分の国を10個のアイテムで紹介するとしたら何を入れるか、意見を交流する。「何に使うかをクイズにしたい」「歴史を感じさせたい」「実際に使わせたい」「びっくりさせたい」などの条件を示し、グループごとに選ばせていく。

→第1案を実際に外国との交流の中で発表し、ウケたものとウケなかったものを調べた上で第2案を作っていく（感性のずれを体験させる。）

授業C：文化衝突の事例で考える

「人に迷惑をかけない」日本と「多少の迷惑はお互い様」の外国の差、優先順位の違いなどを例に意見を交流し、合意点やルールを作っていく。

（例）

- ・放課後、部活に所属しない外国籍生徒が集まって校庭ではしゃいでいる。教室ではできない自国語の会話がうれしいのも分かるが、こっちは必死に部活しているのにうるさい。
- ・3年生最後の部活の大会が日曜日に行われるが、メンバーの1人の外国籍生徒が「教会の行事がある」と不参加を申し出た。最後の大会なのに一緒にやりたくないのか？
- ・電車の中でしゃべっているのは外国人の集団。仲間と遊びに行くのだから楽しいのも分かるが、電車の中では静かにしてほしい。まだコロナも完全に収まっているわけではない。

授業B：日系移民の歴史と今

移民の背景やたくましさ、今の生活などを通して日本を再発見する。

写真や文献を使ってその歴史を紹介し、以下の三つの質問に関して生徒の意見を交流する。

- ・問1「外国に行けば給料は8倍、でも厳しい差別や生活環境がある。あなたは行くか？」
- ・問2「したいことの半分以上は日本にいたのでは実現できない。あなたは行くか？」
- ・問3「日系の人達は、話に聞いていた日本と今の日本は違うと感じる人も多い。彼らの「日本は変わってしまったのですか？」という問いにあなたはどうか答えるか？」

授業D：「やさしい日本語」を使ってみる

自分が何気なく使っている「むずかしい言葉」を再点検する。「台風接近の場合は臨時休校の可能性あり」「課題の提出期限は改めて連絡する」「試験会場へは公共交通機関を利用してください」などをやさしく説明する。その活動を通してこれ以上簡単にできない言葉を見つけたり、削ってもいい情報に気づいたりしたことへの振り返りをする。

③SDGsの学習

国際協調によるよりよい世界の構築をめざすものとしてSDGsを取り上げる。個々の目標の調べ学習をする前に全体像をとらえる授業を行う。

授業A：

SDGsは「すべての人が幸せになるための条件の整備」

幸せになるためには四つの条件＝「お金」「環境」「人権」「平和」があることを伝える。

- ・「お金」では、自分で作ることではできないから、誰かからもらうしかない。→「この人ならお金をあげてもいい」と思われる人になる＝誰かの役に立つ存在になることが一番の金もうけの方法だと気づかせる。
- ・「環境」では、地球規模の破壊には地球規模の対策が必要であることを伝え、そのためには科学的な知識以外に協調性・交渉力や問題を伝える表現力が必要になることに気づかせる。
- ・「人権」では、孤独担当大臣を紹介し、孤独が大きな問題になっていることを伝える。孤独を止めるための方法として話を聞いたり、作品を作ったり、集まる場を設けるなどの取り組みを紹介する。
- ・「平和」では、本稿A-(1)-a-②平和の構築のダイジェスト版を行い、平和はあるものでも願うものでもなく、その時々の場合や相手と作り上げるものであることに気づかせる。

以上4つの話の共通点は「つながる」（目標17：パートナーシップで目標を達成しよう）であることに気づき、行動が「分かれよう・離れよう」とする方向に向かうのか、「つながろう・わかりあおう」とする方向に向かうのかで地球全体の命運が決まることに気づかせる。そしてその命運を決めるのは「あなた」で、その方法は「自分のできることでつながる」ことを伝える。

授業B：

Sustainable Development Goals 徹底解説

- ・sustainable＝「維持する・持続する」を意味する英語にはsustainとmaintainがあり、その違いを「特別なことをして維持する(maintain)」か「特別なことをしなくても維持できる(sustain)」であることを説明する。前者だと「できる人(金や時間がある)」と「できない人」の格差が広がるが、後者はそうならないことに気づかせる。
- ・development＝「開発」には0から1を生み出す意味(例：新商品の開発)とすでにあるものを活用する意味(例：油田の開発)があり、この「開発」は後者であることを説明する。前者だと「できる人(才能や運がある)」と「できない人」の格差が広がるが、後者はそうならないことに気づかせる。
- ・goal＝陸上の「ゴール」からは、ゴールには順位がつく、つまり早く達成できる人と達成に時間がかかる人に分かれることが分かる。またサッカーの「ゴール」からは必ず「アシスト」がある、つまり達成には手助けする人がいることが分かる、と説明する。

以上のことをまとめると、「まずそれぞれがgoalsの達成を目指す」→「いち早く達成できたところはまだ達成できないところを支援(アシスト)する」→「支援の方法は、そのところにある資源を使う形で行う(＝development)」→「そうすれば達成後は放っておいてもうまくいく(＝sustainable)」。SDGsが目指す姿はそういう世界だと説明する。

B. 対外国籍生徒

外国籍の生徒が意欲を持ち、成果の上がる実感が持てる（＝点数が取れる）学習支援のシステムを作る。

支援に取り組む際の留意点

- 100点を求めず、40点が取れることを目標とする。合計200点あれば進路選択の幅は広がる。
- 新しく覚える内容（用語、公式など）は1時限の授業のうち3～5個に抑える。頭をパンクさせない。
- 英語、数学、理科を優先。内容が世界共通の事柄なので理解しやすい。国語・社会は時間があればいい。
- スモールステップ、同系統の問題を2問以上用意する、イラストの活用、モジュール型授業など、低位学力の生徒に教える技術や特別支援生徒への授業づくりの技術などを活用する。

(1) 学習言語を学ぶ授業や教材づくり

教科用語ではないが、テストや入試に出る言葉を学ぶ教材を作る。

①入試問題の問題文に出てきた（＝教科の用語ではない）言葉を整理し、それらを学ぶ学習プリントを作成

例：

- カタい言葉：「用いる」「見合わせる」「有数の」など、簡単な言葉に言い換えられる言葉
- 細かく分ける言葉：「峠」「ふもと」「山」「磯」「沖（海）」「遅延」「不通（交通）など、詳細を表す言葉
- 見た目の言葉：「接する・交わる・面する」（関係）、「込める・満ちる」（容量）など、イラストで示せる言葉
- 「～的」スペシャル：「圧倒的」「画期的」「本格的」「致命的」など「的」とワンセットになっている言葉
- 「～やか」スペシャル：「さわやか」「すこやか」「すみやか」「にぎやか」「あざやか」「おだやか」など
- 「～しい」スペシャル：「めざましい」「もどかしい」「あさましい」「つつましい」「まどろっこしい」など
- 〇〇X（接尾句）スペシャル：「〇〇風」「〇〇系」「〇〇度」「〇〇化」「〇〇上」「〇〇界」「〇〇式」など
- X〇〇（接頭句）スペシャル：「非〇〇」「各〇〇」「旧〇〇」「諸〇〇」「総〇〇」「名〇〇」「純〇〇」など
- 慣用句集：「心」「気」「手」「魚」「植物」「数」「色」「気候」などに分けての慣用句を2つの例文から予測する
- 漢字①これが入ってたら同じ音：「工」（江、巧、紅、功、攻）、「白」（拍、泊、舶、迫）、「交」（校、効、郊、絞）など
- 漢字②同じ音で字が違う（同音異義）：かいとう（解答・回答・解凍・怪盗）、しじ（指示・支持・師事）など

②説明より実際に動きや様子を見せた方が早い言葉を教えるためのTikTokのような動画の作成

※参考：ひきだすにほんごコンテンツライブラリーHP「気持ちが変わるオノマトペ」
(<https://www.hikidasu.jp/go.jp/jp/corner/onomatopoeia/>)

「ためらう」「いとなむ」「やとう」「せめぎあう」「一貫して」「みなす」などの言葉表現するアニメーションやスキットを作成。例えば部活動を使った活動（文学部生徒に台本作成→演劇部生徒が出演）や総合学習での課題とする。「ひきだすにほんご」を作成している国際交流基金とコラボレーションして、生徒作品をHP内でアップロードしてもらうのも可能性としてはあるかもしれない。

(2) 各教科で「40点が取れる内容」の吟味

教科部会で各単元の理解させたい最低ラインを設定。「用語」「スキル」「文章表現できる内容」などにわけて整理し、それらを授業で必ず取り上げることとテストに必ず出すことの共通理解をする。

例：社会「江戸時代」

A（用語）

徳川家康、武家諸法度、踏絵、備中ぐわ、東海道、浮世絵、寺子屋、享保の改革、大塩平八郎の乱、ペリー、大政奉還

B（資料）

- 大名の配置図：外様大名が江戸から遠いところに配属されていることに気づく
- 交通路の地図：三都（江戸・京都・大坂）と交通路（街道・廻船）の配置が図として頭に入っている
- 一揆と打ちこわしの数の統計：数の増減が幕府の改革および気候変動とを結びつけられる

C（文章表現）

- 長く続いた理由を経済力の差・ライバルの不在・システムの確立の点から説明できる
- 安定した社会が庶民の活動を活発化と武士の弱体化を招いたことを説明できる
- なぜペリーが日本に来たのかを、当時の欧米の状況を使って説明できる

多文化共生の文化には「永遠の答え」はない。だから様々な人が、様々な立場で試行錯誤をすることこそが「多文化共生の文化を創る」ことではないかと考える。学校ならば、多くの教員が思いついた取り組みを行い、失敗なら失敗したといい、別の教員がそのアイデアの一部を使って、またはその失敗を糧にして別の取り組みをしてみる、そんな切磋琢磨できる関係を作ることが最終的に生徒、そして社会が多文化共生の文化を創ることにつながると思われる。ここに書いたアイデアから、どなたかがインスピレーションを受けて独自の授業を作ってもらえれば、これほどうれしいことはない。一方自分はまだアンガーマネジメントや自尊感情の涵養に関する授業のアイデアがないため、それらの点は他の先生から学びたいと考えている。そうしてこれからも多くの先生方と交流をしていきたい。



外部機関との連携

①国際交流協会（市、県、先進地域）、JICA などを通じた人材派遣。

特に印象が悪くなっている国や地域の人に出会って、偏見を取り除かせたい。今なら中国、イスラム教（テロとの混同）、ロシア（ウクライナとの紛争）、北朝鮮（核、拉致）などの人に会って「私たちとそんなに変わらないな」と感じさせたい。

④ロールモデルとなる先輩生徒。学習によって未来が開けるという実感を持たせる。

例：外国籍の生徒で大学にすすんだ先輩や、世界を舞台に活動している卒業生など。移民であることへの悩みやそれを克服したきっかけ、苦手な勉強への取り組みなどを具体的に。

②国内、市内にあるブラジルショップ、アジア食材店などで売っている食材で調理実習。おいしいと感じられるものを。

例：ルーローハン（中国、台湾）、チツプスマヤイ（タンザニア）、ブリヌイ（ウクライナ）、ポン・デ・ケイジョ（ブラジル）

⑤ JICA、NPO、NGO などの機関。取り組みの紹介と「自分にもできることがある」と感じさせる話を聞かせる。

例：青年海外協力隊から帰国した人、外国人との共生に取り組む人など。例えば「海外に行くのがイヤだけど国際支援には関われる」とか「むずかしいことは分からないが体力だけはあるから「ガテン系支援」を考えた」など、生徒にとって「それでええのか！」と思わせる話を聞かせる。

③外国籍の生徒の保護者。保護者にも、彼らの自国文化が大切にされているという安心感を与え、学校との協力関係を作り上げる。

例：教員が用意した「〇〇（国名）を感じる5枚の写真」の補足意見を聞く（例：フィリピンのカラフルなジブニーを紹介し、保護者からは「カラフルなジブニーは減り、環境を守る電動ジブニーが増えている」と聞くなど）

誰もが安心して過ごせる社会づくりを目指して

今里 智千加 熊本市立出水南中学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：750 名 外国につながる児童 / 生徒数：1名（全体の0.1%）

学校背景



本校には、外国にルーツがある生徒は1名のみだが、校区内の新興住宅地の建設が進んでおり、これからの全校生徒の増加に伴って外国籍の生徒も入学してくる可能性がある。卒業後の進路には、高校進学を考えている生徒がほとんどで、学習に対する意欲も高いように感じる。

現在の課題



熊本市内では、ベトナムやネパールからの外国人労働者が増加傾向にあり、長期間に留する外国人の数も年々増加してきている。しかし、学校の教育現場では「多文化共生」に関する研修はほとんど行われておらず、外国にルーツがある子どもへの支援が十分にできる状態ではないことが課題である。また、研修を行ったり、アンケートをとるなど「多文化共生」について考える機会を作っていくことが必要である。

現在の取り組み



本校では、「多文化共生の文化」づくりに向けた取り組みはほとんど行っていない。道徳教育を通して、多文化共生に向けた考え方や交流の仕方は生徒と共に考えたことがある。しかし、実際に学校生活を送るうえで外国にルーツがある生徒の立場に立って、具体的にどのような支援やサポートをすることが効果的なのかを考え、職員研修等を通して学校全体の共通理解を図る必要がある。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

外国にルーツがある子どもをクラスで受け持った時に、その生徒が充実した学校生活を送るうえで、最適なサポートや支援を考えるために必要となる。



学校にとって

担任だけでなく、学校全体の環境を整えることで、国籍に関わらず、誰もが自分らしく過ごせる教育環境を実現させるために必要となる。



世界・社会にとって

外国人の移住が多い時代に対応し、誰もが安心し、不自由なく安心して過ごせる社会を実現させるために必要となる。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

今回の研修を受けるまでは、「多文化共生の文化」についての知識が全くなく、どこか他人事のように感じていた部分があったように思う。しかし研修の中で、バングラデシュにルーツがあるカーンさんとペルーにルーツがある伊藤さんのお話を聞かせていただき、「国籍に関わらず、一人の人間としての個性を受け入れてほしい」という言葉に様々な想いが詰まっていたように感じた。「多文化共生」を考えると、どうしても国籍に目を向けがちになるが、まずはその人がどのような人かという個性に目を向け、理解してあげることが大事だということを学んだ。また、海外移住資料館での見学を通して、日本にも移住の歴史がたくさんあり、戦争が行われていた激動の時代の中でも他国との移民交流があったことを初めて知ることができ、日本人である自分自身のことも改めて理解していく必要があると感じた。「多文化共生社会の実現」に向け、これからの世の中を担う子どもたちに、「多文化共生の文化」の必要性について理解してもらい、外国にルーツがある人たちとの交流の仕方や考え方について意見交換をしていきながら、学校現場の環境から少しずつ変えていきたい。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

国籍に関わらず、一人の「人」として、個性や価値観の理解、文化の尊重、互いの考え方を認め合うことができる環境を整えていきたい。そのためには、他国の文化や考え方や理解すると同時に、日本と他国の文化や考え方の違いを正しく理解し、共生していくために何が必要となるか常に考えていかなければならない。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

勤務している学校での職員研修会の実施

教育現場での「多文化共生のある文化」の環境を整えるためにも、まずは、「多文化共生」の必要性について学校職員に理解してもらう。学校現場の支援としてどういったことができるのか職員全体で共通の認識を持つことで、実際外国にルーツがある子どもが入学してきた時の対応がスムーズに行えると考えからである。

＊研修を行う上で、実際の学校現場で予想される課題を考え、それをもとに話し合うことで「多文化共生のある文化」について考えるきっかけになりやすくなる。

(例えば) ①日本語を読めない生徒に対する支援

②部活動での人間関係の構築

③外国籍の保護者の方へ日本教育への理解

自分自身について知ること

他国の文化や考え方だけに目を向けるのではなく、自分自身が生まれ育った国や文化、考え方、歴史などを改めて見直し、母国の良さ和他国の良さを尊重しながら、どのようにしたら共生させていけるかの考えに反映させていけると考えるからである。

生徒一人一人の個性理解

国籍に関わらず、一人の人間としての個性を理解してあげるためにも、常に子どもたちと積極的に交流するようにし、一人一人の個性の理解に努めることで、偏見を持たず子どもの背景を考えながら接する態度を身につけていくことができるようになるからである。

現地訪問

日本だけでなく、他国の文化や環境を実際に訪問して触れることで、外国にルーツがある生徒に対応する時に、互いの文化の共有に役立ってくると考えるからである。また、その国や文化を学び、他国から移住してきた子どもたちのバックグラウンドを知るきっかけになると考えるからである。

ICTの活用

タブレットを活用し、学校職員と学校に在籍している子どもたちの「多文化共生のある文化」に関する意識調査を行い、学校として「多文化共生のある文化」をどのようにしたら実現され、環境を整えていけるのかを考えるきっかけとなるからである。



外部機関との連携

海外移住資料館の職員の方に、学校の生徒へ向けて講演会をしていただく

日本人が海外移住をおこなったきっかけや、現在海外から日本に来ている外国の方は何を目的に移住してきているかについて話をしていただき、「多文化共生のある文化」の必要性について考えるきっかけづくりをおこなうようにする。

多文化共生ためのグローバル人材育成プログラム ～ NZ留学での出会いが笑顔であるために～

藤田 靖雅 茨城県立古河中等教育学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：700 名 外国につながる児童 / 生徒数：約 10 名（全体の 1.5%程度）

学校背景



本校は茨城県古河市にあり、外国人の人口が 2015 年ごろから急激に増えている。中高一貫校であり、卒業後は大半が大学進学を希望する進学校である。外国につながる生徒は各学年1、2名在籍をしている。日常生活に困り感を持つ生徒はいないが、周囲と生活習慣が異なる場面を見かける。

今年度より中学校3年生での留学がシラバスに追加されたが、異文化に関わる事前・事後指導が不十分である。

現在の課題



本校の教育目標「豊かな心と確かな学力を兼ね備えた次世代のリーダーの育成」

次世代のリーダー的人材の育成として、国際化が進む中で異文化の人々を受け入れ、共生することのできる態度・能力の視点は不可欠である。

2023 年度ニュージーランド（NZ）留学より

伝統的な踊り、タトゥー、ホストファミリーとの生活など、異文化に囲まれた地での生活に対して消極的、否定的な生徒が多く見られた。留学を通して、受け入れる道徳心の不足、異文化への知識不足、教員の指導不足が浮き彫りになった。

現在の取り組み



中学3年生：NZ 留学 SDGs 探究活動 自国文化理解

高校1年生：グローバルスタディズ



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

海外での勤務を目指す中で、多文化共生をはじめとした「国際理解教育」を推進する確かな指導力の向上が必要である。また、専門としている ESD 教育における SDGs 教育の観点から、多文化と共生するための考えを持つなど、当たり前にとられない自身の価値観を見直さなければならなかったため。



学校にとって

次世代のリーダーの育成において本校の留学の充実は不可欠である。異文化に囲まれた異国での生活に対して消極的、否定的な生徒が多い現状から、アイデンティティの違いや自分のルーツ、自他国文化の理解など、「多文化共生の文化」を推進していく必要がある。



世界・社会にとって

持続可能な社会を目指した SDGs や「誰一人取り残さない」より、世界の姿をきちんと見つめる機会を設けるべきである。貧困や差別、児童労働といった問題や国際化による人の移動など、多くの課題と変化に対応し、生き抜くための教育の柱として、「多文化共生の文化」が必要である。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

持続可能な社会を目指す SDGs の側面として、環境問題以上に貧困や差別、児童労働といった世界各国で異なる問題を抱えている。SDGs への意識を問われ国際化が進む現代で、将来社会に出る児童生徒が、それらを「自分事」として考え、意見を持てる教育機会が早急に求められている。その一方で、それぞれの現状を生徒が目当たりにしても「他人事」の域を出ないことも実感としてある。研修を通して児童生徒や学校が「多文化共生の文化」を創ろうとする活動の中で、それぞれの価値観を揺さぶることが、「自分事」へと変わるきっかけになるだろう。そのために「自分のルーツを知る」ことから始める必要がある。自分は何者なのか、なぜここにいるのかを考えることで、在日外国人への捉え方が変化するはずだと考えた。また自分自身の「特権」にも気づかせたい。文字が書けること、学校へ通えること、衣食住の保証など、努力とは無関係に私たちは「特権」を得ている。このマジョリティ側が活躍しやすい世の中で、この「特権」をどう使うかを問うことも大切だと思った。また「異文化を知る」ことで自分と他者をつなぐきっかけになる。文化が異なれば、宗教が異なり考え方や価値観も異なる。大切な友達に「お金を貸す」のか「貸さない」のか…気持ちは同じでも行動が異なる。見た目や国籍に関わらず、一人の人間として理解しようとする必要がある。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

自分が何者かを知り、他者が何者か知ろうとし、当たり前が当たり前ではない文化だと考える。その文化により、それぞれ持っている「特権」を使ってマイノリティをマジョリティにしたり、SDGsをはじめとした諸問題を自分事にしたりできる社会にしたい。そしてどんな出会いであっても、そこに笑顔がある世界を目指したい。

そのためには児童生徒が国際的な視点に立って「知ること」「経験すること」ができる授業作りが不可欠である。



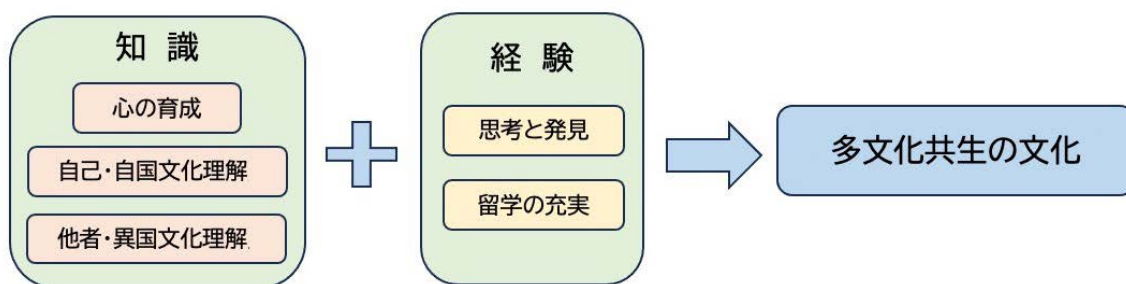
学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

多文化共生のためのグローバル人材育成プログラム

～ NZ 留学での出会いが笑顔であるために～

はじめに

今回の研修を通して、本校生徒の NZ 留学を単なる英語学習ではなく、多文化共生をはじめとした国際理解教育の場としての充実を図りたいと思い、本プログラムを考案した。本年度の生徒の留学の様子から、異文化を受け入れる「心の育成」、自らを知る「自己理解」、他者を知る「異文化理解」、授業における「思考と発見」、そして「留学の充実」により、「多文化共の文化」の創成になると考えた。



このプログラムにおいて、「多文化共生の文化」の創造のための考えとして、留学先での出会いの瞬間の「生徒の笑顔」に重点を置きたい。笑顔で出会えるような心の醸成と理解を育み、多くの笑顔の経験を得て、多文化共生の素晴らしさとその文化を創造する意義を、生徒が実感を伴って学ぶような留学の充実を図る。



ホストファミリーとの別れを惜しむ生徒

グローバル人材育成プログラム

「心の育成」

プログラム1

「学級の時間の充実～構成的グループエンカウンターを通して～」

授業のねらい：異文化を理解したり受け入れたりするための土台となるのは「心の育成」である。まずは認め合え、安心できる学級作りを行った上でこのプログラムをスタートさせたい。私は学級活動で最も大切なものは構成的グループエンカウンターだと考える。学級とは互いの仲の良し悪しではなく、たくさん笑い合い、楽しいと思える温かみのある場所であってほしい。安心できる学級への所属感が多文化共生の文化を作る「心の育成」に不可欠であると考えている。

プログラム+α

道徳の時間の充実：所属校のカリキュラムに促しながら学級の特性に応じた授業を実施したい。

生活指導の充実：学級・学校の規則や係活動など、「やることはやる」ことをきちんと指導したい。素直さや前向きな気持ち、思いやりは、学校生活の小さな習慣の積み重ねのように感じる。

「自己理解」

プログラム2 「私のルーツ～なぜここにいるか～」

授業のねらい：自分のルーツを知ることで、誰もが特別な存在であり、そこに人種は関係ないことを知る。
授業作りの視点：見た目や言葉が「日本と違う」ことが偏見の対象になったり、マイノリティになったりしてしまいがちである。しかし私たちがここで生活していることも、日本人でない人がここで生活していることも、現在に至るまでには必ず平等にルーツがある。そのことに気づかせ、誰もが特別で人種などは関係のない、それぞれが平等な存在であることに気づかせたい。

「異文化理解」

プログラム4 「ワールドキャラバン ～世界の文化を知ろう～」

授業のねらい：世界の文化について知る。
使用する教材：茨城県国際交流協会 多文化に関する出前授業
授業作りの視点：外部講師を招いての授業である。本校で実施しているもので、毎年3クラスに対して、3カ国の講師の方に来ていただける。それぞれの国の言葉や文化はもちろん、衣装や踊りなども披露していただけるので、それぞれに異なる文化や伝統があることに気づかせることができる。

プログラム3 「自国文化理解～私たちから見た日本・海外から見た日本～」

授業のねらい：日本文化について、どんな文化があるか、そして海外からどう思われているかを知る。
授業作りの視点：私たちが紹介したい日本と海外から見た日本に差があることに気づかせたい。日本という独特の文化が目立ちがちであるが、普段から着物は着ないし、忍者を見かけるわけではない。もっと日常生活に着目させ、日本人としてどんな生活感覚があるか、価値観があるか考えさせ、私たちの当たり前が海外から見ると当たり前でないことを知る機会としたい。

プログラム5 「NZ 文化理解～私たちから見た NZ～」

授業のねらい：NZ にどんな文化があるかを知る。
使用する教材：ISA 留学事前学習
授業作りの視点：NZ の文化について、代表的なものだけでなく日常的生活習慣や国民性、人種や人々のルーツについて知る機会にしたい。特にホームステイを控えた生徒にとって、NZ の文化を知ることによって不安が軽減すると同時に、異文化をきちんと知り、違っていることを受け入れた上で留学が始められるようにしたい。また、互いに良い時間とするためにこちらから歩み寄り姿勢も重要であることに気づかせたい。

プログラム+α 日系人のグラデーションについて

同じ人種内でも多種多様な価値観があり、一概に一括りにはできないことに気づかせる。

「思考と発見」

プログラム6 「異文化を見つけよう」

授業のねらい：私たちとは異なる他国の考え方・価値観があることを知り、それらをどう認めて共にどう生活をしていくべきなのかを考える。
使用する題材：「中国人とチョコレート」「なぜ右手で字が書けるのか」
授業作りの視点：「中国人とチョコレート」については、「友達の大切さ」の価値観の違いについて考える。中国人は大切なチョコレートを友達が勝手に食べてしまっても許す人が多いという。また、友達からお金を貸して欲しいと頼まれれば大きな額であっても応じる傾向にあり、日本の考え方とは差がある。しかし、どちらの考え方にも共通していることは「友達を大切に思っている」ことである。同じ気持ちであるにも関わらず行動が真逆になる中で、共生することの難しさや歩み寄り心の大切さについて気づかせたい。
「なぜ右手で字が書けるのか」については、世界の識字率について扱った題材である。私たち日本人のほとんどは利き手で字が書けるが、逆の手では書けない人が多い。それは「書く機会が少ない」からである。世界で識字率の低い国は、学ぶ機会や字を書く場が少なかったからである。一方で私たちの識字率が高いのは、学ぶ機会がある国に生まれたからである。文化が違えば生活習慣も変わり、身につけている技能も異なる。それらの技能で優劣をつけるのではなく、互いに助け合って共生していく大切さに気づかせたい。

プログラム7 「史上初の侍～ラズ・ヌートバー～」

授業のねらい：人種や母国の違いがあっても相手を理解し受け入れるために、自ら歩み寄る態度を育てる。
使用する教材：自作教材
授業作りの視点：WBC で日本代表として活躍したラズ・ヌートバー選手を題材としたものである。なぜ彼はあんなにもファンから愛されたのか。どのようにして周囲の選手やスタッフは彼を受け入れたのか。人種や言語を超えた心のコミュニケーションについて考えさせ、互いに歩み寄ろうとする心が、人を笑顔にするに気づかせたい。

授業資料

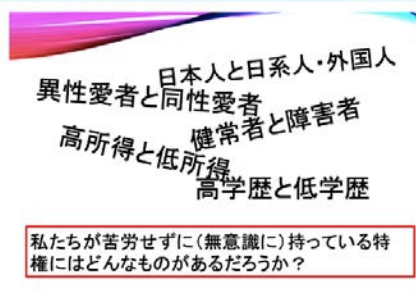
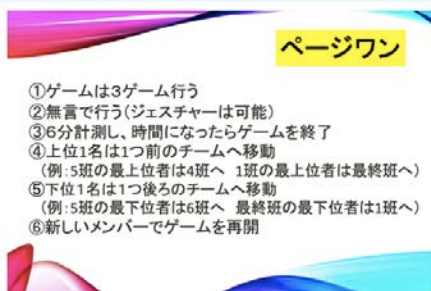
授業の振り返りワークシート

プログラム8 「マジョリティとマイノリティ～私たちの特権～」

授業のねらい：私たちが無自覚に持っている特権（マジョリティ）を知るとともに、社会的少数派（マイノリティ）と共生し、より良く生きるための社会を考える。

使用する教材：自作教材、「バーンガゲーム」

授業作りの視点：まずは自分が無自覚に持っている社会的特権について気づかせたい。その上で、特権を持っていない人々の気持ちや現状について考えさせた。特に「バーンガゲーム」の活動の中で、マイノリティとなった時の疎外感や恐怖感について、実感を伴った理解を促したい。そして社会的にマイノリティの立場にいる人に寄り添おうとする気持ちや、互いにより良く生きるような共生社会のあり方について考えを深めさせたい。



8つの班に分けて行った。ゲームは無言で行われる。全体に説明したバーンガゲームのルール+班ごとに異なるルールを与えている。別の班から移動してきた生徒は、元の班とは少しルールが異なり、無言でゲームが進むため、周囲に尋ねることができず、班内でマイノリティ側になる。

「留学の充実」

プログラム 10 「出会いを笑顔にするために」

授業のねらい：NZ 留学での出会いの瞬間を笑顔で迎えるためには何が大切なのかを考える。

授業作りの視点：このプログラムのテーマである「NZ 留学での出会いが笑顔であるために」に迫る授業である。これまでの学習の振り返りを行い、出会いを笑顔で迎えるためにはどんな気持ちが必要か、また国際的な視野を持って相手に歩み寄ろうとする姿勢を育みたい。

異文化や他国を知る上で、日本と比較すると劣っている点や不便点、その国が抱える問題点などにどうしても目線がいきがちであるが、そのようなアプローチだけでは、「多文化共生」は実現しないのではないだろうか。きちんと理解をし、共にどう生きるかを考え抜いたからこそ、NZ 留学での出会いの場に笑顔が生まれる。そして国際交流の素晴らしさと、多文化共生の文化を創造しようとする意欲が生まれるのではないかと考えた。

プログラム+α

留学の最中に交流する NZ の現地校の生徒と、事前にオンラインでの交流会を実施しておきたい。笑顔で出会うために「ワクワク」は必要である。特にペアとなって授業を一日一緒に受ける生徒とはお互いに顔を見せ合い挨拶を交わすことで、当日対面する瞬間の「ワクワク」は大きくなるのではないだろうか。

プログラム 11 「NZ 留学を終えて」

授業のねらい：国際交流の観点から NZ 留学を振り返ることで、感じた感動や喜び、失敗などの経験を共有する。

授業作りの視点：NZ で出会った人にもグラデーションがあり、家庭ごとの習慣・文化がある。それらを踏まえた上で、それぞれがどのような体験をして、何を感じ、どう成長したかを共有したい。振り返ることで、自分自身にどのような変化があったのかをメタ認知させる機会にもしたい。何より異文化交流の素晴らしさや面白さ、そして国際社会における現状の課題への気づきにつなげたい。

プログラム 12 「新しい文化の創造～誰一人取り残さない～」

授業のねらい：3年間の経験を通して、自らが考える「多文化共生のための新たな文化」を創造し、紹介する。

授業作りの視点：これまでの知識や体験はもちろん、それらにSDGsの視点も織り交ぜ、世界での諸問題に目を向けさせ、異国や異文化の人々がどう共生をすれば世界が救われるのか、理想や夢物語でも構わないので、それぞれの思い描く新たな文化を語り合う時間としたい。

外部機関との連携

ISA

「多文化共生の文化」を創る
留学の在り方

JICA 筑波

国際協力出前講座

茨城県国際交流協会

多文化に関する出前授業
「ワールドキャラバン」

「Our Team」～宮崎からツナガル世界～

伊東 望 宮崎学園中学校・高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：1200 名 外国につながる児童 / 生徒数：2 名（全体の 0.001%）

学校背景



宮崎県は、総人口 1,050,208 人に対し在留外国人は 8,309 人、比率 0.80%。

コロナ禍により一時は在留外国人数が減少したが、現在、県内に住む外国人の半年間での増加率は14%で、全国3番位であり、技能実習生が占める割合は昨年末の時点で40%を超え、全国で最も高い。

本校は宮崎市の中心部にあり、コンビニエンスストアや飲食店など、身近なところでは多くの外国人が働いている。また近場には日本語学校もあり、外国人に接する機会は多くある。

現在の課題



- ①優しくしてあげること、困っていたら助けてあげること「共生」が完結していると考えている。「親切」の次のステップ、「共に生きていくためにどのようなことが必要か」ということを学び、考え、実践していくことが必要。（リーダーの育成）
- ②身近なところにいる外国人が、どこの国の人なのか、来日してどのくらいなのかなど、基本的なことすら知らないことも多い。（ジブンゴト化、つながり）
- ③学科やコースにより学びが分かれており、学校全体で「多文化共生」について取り組むことができていない。（ホールスクールアプローチ）

現在の取り組み



普通科グローバルコース 2 年 2 単位「多文化共生」授業内容（★はゲスト）

- | | | |
|---------------------|--------------------------|----------------------|
| ①多文化共生って？（写真1） | ⑬全国の多文化化と入管政策について★ | ⑳㉔㉕やさしい日本語（図書館表示の変更） |
| ②今世の中で起こっていること（写真2） | ⑭報道の立場から★ | ㉖㉗シンポジウムに向けて |
| ③④⑤⑦ JICA 教材「多文化共生」 | ⑮⑯振り返り（写真4、5、6） | ㉘プレゼンリハーサル |
| ⑥宮崎県の現状を知るための調査 | ⑰日本語講習会★ | ㉙多文化共生シンポジウム |
| ⑦在留資格について | ⑱㉒やさしい日本語実践（カナダ）（ミャンマー）★ | ㉚㉛まとめ |
| ⑧⑨宮崎県の多文化化の状況★ | ㉓日本語教師の仕事／宮崎県ベトナム人協会★ | |
| ⑩レヌカの学び（写真3） | ㉔宮崎市国際交流協会★ | |
| ⑪やさしい日本語とは★ | ㉕ JICA 九州の取り組み★ | |
| ⑫小林市役所の取り組み★ | | |

本年度よりスタートした多文化共生の授業では、財団法人宮崎県国際交流協会のサポートをいただき、在留外国人の状況について入国管理局の職員や地元新聞記者、在日外国人協会の方を招聘して直接学び、在留外国人の置かれている立場や課題を理解し、寄り添ったサポートをしていくための土台を学んだ。また、やさしい日本語の習得に向けての取り組みも行い、異なる言語や文化を持つ人々とのコミュニケーションをより円滑に行える環境を整えた。これらの学びを活かして、学校内掲示物を見直し、「みんなにやさしい掲示」を実現するために、学校図書館内の掲示内容の変更を行った。さらに、全校における取り組みとしては、外国人だけでなく LGBTQ+ の理解を深めるため、生徒会生徒による校則見直しや、校内での啓発活動、LGBTQ+ 活動家で僧侶の西村宏堂さんを招いた講演などを実施した。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

「いま！」
変わりゆく宮崎の現状に対応していける人間になりたい。ぐーりとつながる世界を創りたい。



学校にとって

「地球市民だもの！」
これから生きる子どもたちへ、学校教育としての責務。身近なところで起こっている出来事を「ジブンゴト」化し、解決していきける力をつけられるカリキュラム構築のため。



世界・社会にとって

「みんなで Happy に！」
国を超え、宗教や文化を超え、ジェンダーを超え みんなが幸せになるため。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

人々の置かれている現状を知り、共に生きていくために私たちがどうあるべきかを学び、持続可能な社会にむけたエージェンシーの獲得を目指す。

また、やさしい日本語についての学びを継続し、姉妹校である宮崎国際大学の留学生や、近隣の同年代の日本語を学び始めた人たちと簡単な会話レッスンなどの実践的な取り組みを通じて、コミュニケーションや共生のためのスキルを向上させていきたい。(写真10)



〈写真1〉多文化共生って？(多文化共生社会において大事なものの)



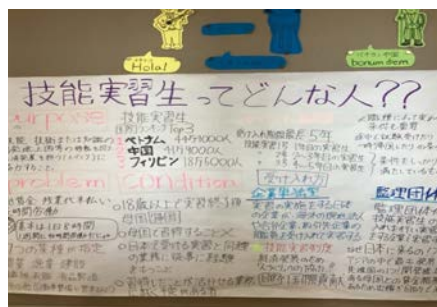
〈写真2〉地理の教員による「今世の中で起こっていること〜なぜ戦争はなくなるらないんですか?」



〈写真3〉レヌカの学び



〈写真4〉1学期成果物①



〈写真5〉1学期成果物②



〈写真6〉1学期成果物③



〈写真7〉宮崎県人会世界大会



〈写真8〉宮崎県の移住者の歴史に関する資料①



〈写真9〉宮崎県の移住者の歴史に関する資料②



〈写真10〉やさしい日本語実践

外部機関との連携

宮崎県人会世界大会で出会った方とのつながり

ハワイ宮崎県人会(日系人社会)／ブラジル県人会(自分のルーツを探しに宮崎にやってきた孫)
修学旅行、研修等のプログラムに入れられるよう検討
海外移住資料館／JICA 横浜／JICA 九州
昨年度の学びを継続、広げていくために(やさしい日本語を中心として)
日本語学校 地域自治体(図書館) 夜間中学

姉妹校のつながりを活かす

宮崎国際大学(外国にルーツのある子どもたちに向けた教材)

芸術を活用した「多文化共生の文化」の場づくり

渡邊 千尋 東京都立総合芸術高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：480名 外国につながる児童 / 生徒数：15 名（全体の 3%）

学校背景



本校は新宿区にあり、東京都の各地域から生徒は通っている。また、外国にルーツを持つ生徒も複数名いるが、学習の補助が必要な生徒は今のところいない。小さい頃から芸術関係の世界に浸っている生徒が多いためか、多くの生徒の興味・関心は芸術分野に偏っている。

現在の課題



「多文化共生の文化」を「継続的に・持続可能に」推進していくことが課題である。まず、教員間の「多文化共生の文化」に対する意識の温度差があげられる。多文化共生関連の活動が本校のカリキュラムの一部として組み込まれていないため、継続的に実施されていない。例えば、多文化共生や国際理解教育に興味・関心があり、自ら外部団体との企画を立ち上げる教員がいる時は、「多文化共生の文化」に関する授業が組み込まれる。しかしながら、その教員が他校へ異動すると、それらプログラムが続かない場合がほとんどである。

現在の取り組み



「トビタテ！留学 JAPAN」などの留学プログラムの参加呼びかけを行っている。また、個人でクラシックバレエ留学や美術系の学校に留学する生徒が毎年5名ほどいる。学校行事等も芸術関係のものがほとんどであり、「多文化共生の文化」を創るための時間はほとんどない。

しかしながら、本年度は2年次の「総合的な探求の時間」（2単位）の時間に多文化共生教育を取り入れた活動を行った。例えば、一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）から外部講師を招き、生徒の将来の目標を達成するための活動や、芸術分野と関連して自身の視野を広げる活動を取り入れた



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか

 自分にとって	 学校にとって	 世界・社会にとって
・自分をさらに知るため、自己肯定感を高めるため。 ・日常生活の中で「不要な」ストレス・衝突を減らすため。	・学校を出たらさらに多様な社会が待ち受けているから。 ・同じ集団に属する人に対してお互いを尊重できるようになるため	・過去を知ることで、現状を把握できる。そして未来の社会の在り方について明確なビジョンを持つため。 ・マジョリティにいる「無自覚」な人を目覚めさせるため。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

「多文化共生の文化」というと他者に目が向きがちだが、まずは自分について「どのような人間なのか」を考えてみるということは「多文化共生の文化」を作り上げていくうえで必要な要素であると感じた。なぜならお互いの人生のストーリーを共有することで、ある集団の中での一人一人の個性や、自分の個性に気づくことができると学んだからである。

○学校について

学校には多様な生徒がいる。生徒にとって学校は生活の大部分を占める。偶然同じクラスになったクラスメイトそれぞれが多様なルーツを持っている。生徒同士でお互いの考え方や行動を理解するきっかけとなるのが「多文化共生の文化」であると考えた。

○社会について

現代の社会の多様な人々を理解し受け入れるには、過去の歴史を知ることは大変有効であると学んだ。また、マジョリティとマイノリティは場面によって入れ替わることや、マイノリティも多様化していることなどを学んだ。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

「あなた」という一人一人と向き合うことのできる文化である。そのためには共通点や相違点を見出し、時には対話をしながら（ポジティブな）妥協点を見つけるという過程である。具体的には、自分の周りとは、環境や文化の違う人々と対話を通して、より心地よく生きていくにはということを突き詰めていくことであると考え。ここでいう「人々」とは外国人や障がい者という一般的に「マイノリティ」として取り上げられる人々だけでなく、自身と関わりのある人すべてを指す。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

本校は芸術教育に力を入れている。芸術は「多文化共生の文化」を創るための手段として非常に有効なのではないかと、本研修を通して感じている。なぜなら芸術の表現方法は多岐にわたる。また、芸術鑑賞を通して、作者の思いや考え方を知ることができる。芸術活動を通して、集団の中の自分について、他者について考えることができるなど、様々な切り口があるのではないかと考えている。

現状

現在、学校行事等は芸術関係のものがほとんどであるため、「多文化共生の文化」について考える機会はほとんどない。しかしながら、現在すでに行っている取り組みを工夫すると、「多文化共生の文化」について生徒が考えられるものへと発展できると考える。

また、本校は定期的に外部講師、外部団体を招へいし、行事を行っている。現在は主に大学の教授、演奏家、劇団などを招いて講演会などを月に一度くらいのペースで行っている。また、その一部を一般公開している。これらの活動を、生徒の視野を広げ「多文化共生の文化」を創るための手段として活用していきたい。

改善すること

上記の行事の内容をより多様なものに。より多くの生徒に「ひっかかるもの」（興味を持つきっかけとなるもの）を増やすために、芸術分野に限らず多様な内容にする。また、「なぜ芸術が必要とされているのか？」、「なぜ芸術を学ぶのか？」など哲学的な対話を深める機会を取り入れたい。そのためには、芸術の各学科だけでなく、教科横断的に年間を通して計画を立てる必要がある。

同時に、現在は「総合的な探求の時間」で各学科の生徒が一緒に対話する機会を設けているが、学科間の交流程度にとどまっている。日常会話のみで済んでしまう現状を改善するために、生徒一人一人が自己理解を深めながら、他学科と交流を通して、自己と他者に対して理解を深めることができるように授業等を設計していきたい。

今後の計画

①

芸術という切り口から、生徒の自己理解を深め、自己肯定感を高める活動を1年次のHRで行う。「なぜ芸術を学びたいのか？」、「自分にはどんな特権があるか？」などといった問いを設定し、他者との対話を通して、自分について考える機会を設ける。他者の考えについて聞くことを通して、自身・他者への理解を深めていく。

②

①と同時に、行事等で「隣人を知る」機会を設ける。同属（同じ学科）ではない生徒同士と深く話す機会を設ける。

③

生徒が自身の専門分野から「半歩」外へ出る機会を設ける。総合的な学習の時間等で「芸術×○○」と称し、自身の特性を「多文化共生の文化」を創るためにどのようなことができるか考え、発表する機会を設ける。

④

教員間の共通認識を作る。「芸術を通して「多文化共生の文化」を創る」というゴールの下、多様な刺激を生徒に与えることを意識し、教育活動を行う。そのためには、教員自身が芸術を通して「多文化共生の文化」を創るためには？という問いに向き合い、共有する時間を設ける。

⑤

①～④を体系的に実施するため3年間の計画を立て、実施する。担当者は一人ではなく、分掌や学年の一つの役割分担として複数人の担当者を設置することで持続可能な取り組みを実現する。

⑥

情報収集のため、東京都国際コンシェルジュを活用する。
(<https://www.tiec-edu.metro.tokyo.jp/>)

最後に

本研修を通して、「まずできることからやってみよう」という共通認識が参加者間で共有された。というのも、今後取り組みたいアイデアをより現実的にするためには小さなことの積み重ねが必要不可欠である。私は今回の学びを即時的に還元する取り組みの一つとして、自身の授業に知人のシンガポールの教員であるゲストスピーカー Sitiさんを招き、「多文化共生の文化」をテーマにシンガポールの学校や社会についての授業を実施した。シンガポールの民族・宗教・文化の多様性や、学校のカリキュラムが日本と異なる点（例：民族によって「国語」の授業が異なる点）について理解を深めていった。（写真1）（図1）

今回は、各クラス1時間だけの実施となったが、生徒にとっては「シンガポールといえばマレーオン」から、「様々な文化があり、多様性に富んだ国である」という認識の変化が授業後の感想などから観察できた。今後もできることから始め、それらを徐々に他の教員と拡大していきたい。



〈写真1〉シンガポールについての授業



〈図1〉Sitiさんの授業資料の例（シンガポールの多文化「宗教行事」について）



外部機関との連携

1年次生の「総合的な探求の時間」にJICAの国際協力出前講座とJICA地球ひろばでの校外学習を行う。現在、次年度の1年次生の「総合的な探求の時間」のカリキュラムを組み立てている。その中で計6時間ほどJICAの国際協力出前講座とJICA地球ひろばでの校外学習を行う。この取り組みを効果的に実現させるために、「総合的な探求の時間」を担当する教員に、事前に「多文化共生の文化」についての導入研修を行う。具体的には「なぜ今、自分／学校／世界／社会にとって多文化共生の文化が必要なのか」ということについて本校の教員にも一度立ち止まって考えてもらう時間をとる。その後、JICAとの連携のねらいなどを共有する。JICAとの窓口担当の教員だけでなく、授業に関わる教員が準備段階から関わることで、より取り組み内容の目標を達成できると期待する。

誰もが幸せで生きやすい学校生活づくりに向けて

杉山 茉莉 名古屋市立若宮商業高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：470 名 外国につながる児童 / 生徒数：30名（全体の6%）

学校背景



フィリピン人の母、日本人の父を持つ生徒が複数在籍しているほか、トルコ、アルジェリア、中国、ペルー等の国籍の生徒が在籍している。いずれの生徒も日本で生まれている、もしくは小学生の時より日本で生活しており、日本語での日常会話には困っていないと思われる。

現在の課題



地域の留学生たちを招いた交流の機会を設けているが、年に1回程度行っているのみである。英語の教員が取り組んでいるだけで、学校全体の行事にはなっていない。英語の授業では AET との TT の授業において、海外の祭り文化や食生活、学校生活や日常生活の違いなどを伝えるようにしている。

外国籍の生徒は複数在籍しているが、生徒たちは日常生活を送るうえでの日本語能力には問題がなく、特別な配慮をしていないのが現状である。教員も生徒も多文化共生の意識は高くないように感じる。

現在の取り組み



留学生との文化交流。AET との授業。

現在は未来ビジネス科のみの商業高校だが、来年度から高等特別支援学校が併設される。それに向け、開設に尽力された先生の講演を聞いたり、普通高校と特別支援学校が併設されインクルーシブ教育を行っている学校を訪問したりした。私自身は阪神昂陽高等学校に訪問し、普通科の生徒と特別支援学校の生徒と一緒に受けている授業の見学や、一緒に行っている学校行事について説明を受けた。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

- ・外国籍の生徒たちが日本人とはどんな点で違う価値観で生きているのか知る必要がある。
- ・自分とは違う価値観を否定してはいけない。
- ・自分の普通と相手の普通が違うことを認識する必要がある。



学校にとって

- ・外国籍の生徒の割合が年々増えている。
- ・日本人同士ですら、価値観は違う。価値観の違う人を否定するのではなく、受け入れていく必要がある。
- ・特別な支援を必要とする生徒が増加している。



世界・社会にとって

- ・外国人労働者が増えている。
- ・外国人旅行者の数が増えている。
- ・特別な支援を必要とする人が増えている。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

外国人と交流し、他国の食習慣や伝統行事、文化などを学ぶことだけが多文化共生ではなく、日常生活の中でのちょっとした関わりの中でも価値観の違いが生まれる時がある。日々起こる価値観や習慣の違いこそ、理解し合わなければいけないものだと感じた。自分の価値観を相手に押し付けてはいけない。

学校生活の中では様々な場面において多数決で決まることがあるけれど、それが必ずしも正しい決め方ではないのではないかと感じた。マイノリティーの意見も大切にしていきたいと思った。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- ・マイノリティの意見にも理解を示せるような文化。
- ・自分とは異なる考え方を知ることを楽しめる文化。
- ・マジョリティが常に正しいという考え方を捨てることのできる文化
- ・国籍、文化、言語、性別、宗教、年齢、障害の有無などに関係なく、1人1人が違うことを認められ、違いを楽しむことができる文化



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

学校生活全体において

異文化を伝える機会を、授業のみならず、日々生徒との関わりがある際に設ける。学校の図書館に多文化共生に関する書籍をそろえ、生徒が手に取りやすいようにコーナーを設けて紹介したり、海外の文化に関する掲示物を作成して、生徒が見ることができるようしていく。そうすることで異なる文化を否定せず、受容できる生徒たちを育てていきたい。

外国につながる生徒のみならず、どの生徒にとっても学校生活における困りごとがあることが多いと思われる。学力が著しく低い生徒や特別な支援が必要な生徒も多数在籍しているのが現状である。これらの課題に丁寧に向き合っていく必要がある。

英語の授業における多文化理解

英語を担当していると、教科書の中に異文化を知ることのできる場面が登場することが多々ある。例えば、1年生で扱ったものには、ベトナムの朝食では屋台でフォーを食べる、ベルギーの朝食ではワッフルを食べるといった記述があった。教科書に書かれている国の紹介だけではなく、本校に在籍している生徒の母国ではどんなものを朝食に食べているのかといったことも事前に知り、授業の場で紹介できるように準備する。3年生の教科書でも名前の由来に触れたときに、国による違いがみられた。AETの先生や外国人のゲストスピーカー等も活用し、他国の文化を知ることができる機会を増やしていきたい。

インクルーシブ教育の推進

来年度から未来ビジネス科と高等特別支援学校が併設する学校となるので、インクルーシブ教育が行われる予定である。体育と美術では両校の生徒と一緒に授業を受けるとともに、学校行事も一緒に行う予定である。特別支援学校の生徒に対して「優しくしてあげる」、「差別をしない」、「偏見を持たない」という考え方ではなく、お互いがお互いを思いやり、社会に出たときに順応できるようなマインドを持つようにする。

総合的な探究の時間での取り組み

来年度より3年生の総合的な探究の時間で「哲学対話」を行う予定である。哲学対話は、1960年代にアメリカで始まった「子どものための哲学」に由来する。これは難しい哲学者の思想について教えるのではなく、思考力を育てるものであり、そこで「対話」が主な方法として開発されたものである。哲学対話は通常、10人から20人くらいの人が輪になって行う。「輪になる」ということには意味がある。学校では先生が前に立って、生徒は列になって前を向いて座っている。これは原則的には先生だけが発言権を持ち、生徒はみな黙って聞いていなさいという意味である。他方、円は前も後ろもない。だから輪になればお互いに対等になり、誰もが発言していい場となる。そして話し合うテーマは自分たちで決めるというのも、哲学対話で大事にしていることである。自分で考えたことを他の人に伝えようとすれば、言葉の選び方、話の組み立て方も身につく。対話を通して異なる意見を聞くことで、自分の考えの前提に気づいたり、自分の立場をより広い文脈に位置づけたりできるようになる。また自由に発言し相互に問いかけることで、互いを尊重し、違いを受け止められるようになることを目指す。こうして対話を通して一緒に考えることで、お互いを理解し、信頼し合える人間関係ができる。それどころか、理解できない相手ですら、考えるきっかけを与えてくれる存在として受け入れられる人になるようにしていきたい。

ICTの活用

新しい学習指導要領では「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が掲げられている。新型コロナウイルスの感染拡大の影響によって一気に進んだGIGAスクール構想により、本校でも1人1台タブレットが貸与されている。タブレットを利用して、個別最適な学びとともに、グループ学習による協働的な学びを実現したいと思う。ロイロノートを活用して1人1人の生徒の意見を集約し、共有する機会を増やしていきたい。



外部機関との連携

- ・すでにインクルーシブ教育を行っている学校の取り組みを知り、通常授業や学校行事をどのようにやっていけば良いかを検討する。来年度以降に本校でもやれそうなことから始めてみたい。
- ・JICA 中部から、海外に長く住んでいたもしくは働いていた日本人を紹介してもらい、話をしてもらう。
- ・名古屋市内にある大学や国際センターから外国人留学生を招いて、生徒たちと交流の機会を設ける。例年求人をする企業で、外国籍の社員がいる会社から話をしてくれそうな人を派遣してもらい、卒業後に一緒に働く時にはどんなことに注意をしたら良いのかを高校生のうちに知っておくことも検討したい。

専門高校における地域のグローバル人材育成を目指した異文化交流体験

赤木 綾香 鳥取県立境港総合技術高等学校／島根大学教職大学院

所属先情報

全校児童 / 生徒数：299 名 外国につながる児童 / 生徒数：8名（全体の2.7%）

学校背景



本校は海洋科、食品・ビジネス科、機械科、電気電子科、福祉科の5学科を持つ専門高校であり、卒業後は約7割の生徒が就職する。外国につながる生徒はかなり少数であり、日本語指導を要する生徒はいない。

地域には製造業、水産業などを中心に、多くの技能実習生が活躍している。生徒の就職先にも多くの外国人材がすでにおり、彼らは様々な文化を背景に持つ人と一緒に仕事をするようになる。

現在の課題



外国とのつながりを意識し、異文化に触れる実践を行っているが、「英語科の取り組み」であり、学校全体の取り組みにはなっていない。今後、地域にはますます外国人材が増え、生徒が将来、彼らと協働することは不可避である。多くの生徒にとって、社会に出る前の最後の教育機関である本校は、彼らに何を伝えたいのか、学校としてどのような取り組みが可能なのかを模索しているところである。また、様々な取り組みを通して生徒の異文化受容度がどのように変容したのか測る指標も課題である。

現在の取り組み



2022 年度

国際交流員招聘（ベトナム、インド、韓国）、オンライン交流（インド）

2023 年度

9 月：島根大学の留学生（中国、バングラデシュ、インド、ナイジェリア、ベナン）を招聘し、小グループに分かれて交流を持った。主に留学生に自国文化の紹介をしていただいた。

11 月：本校生徒が留学生（9 月と同じ）に学校・学科の紹介を行った。小グループに分かれ、翻訳アプリや日本大学生の支援を活用しながら校内見学を行い、交流を持った。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

地域に外国人が増えているがイベント以外では交流が見られない。彼らにとって日本が単なる「稼ぐ場所」ではなく、地域の一員として交流があればいい。



学校にとって

生徒の就職先では技能実習生が活躍しているため、協働する素地を養いたい。異なる価値観を理解し、歩み寄る姿勢を持てるようにしたい。



世界・社会にとって

自治体の86%が、外国人材が必要と答え、外国人材は増加の一途をたどる。マジョリティである我々は市民の一人としてどうしたらいいか。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

他の参加者と話して、外国のルーツを持つ人への理解も今後ますます必要となるが、日本人であってもマイノリティの立場に置かれた人はおり、身近なところから理解することも重要であるということに改めて感じた。マジョリティである我々はマイノリティを無意識に排除していないか、声を上げていないマイノリティをなかったことにしていないか、意識的に振り返ることが必要だと感じた。同時に、どういう立場であっても、当事者の声を聴く、ということは重要だが、生徒の年代では自己を語ることは難しいことが考えられ、声掛けの仕方など丁寧に向き合いたいと思った。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

共生はゴール概念ではなくプロセス概念だということを生徒、教員が理解したうえで、今できる共生への取り組みは何なのか考える土壌を持ちたい。校内で教員同士や生徒と対話の機会を持ちながら、その時点での最適解を求める柔軟な姿勢を組織の構成員が持っている、ということが文化の創造につながるのではないだろうか。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

交流のマニュアル化

一部の職員だけが取り組むのではなく、他の先生方を巻き込んで組織的な実践を行う。担当者が異動しても外国人との交流活動が継続するよう、実践の意義や準備の記録を残し、学校内の理解者を増やす。

交流の理論化

「楽しい交流」で終わらず理論化し、価値づけをする。授業に他文化の価値観を学ぶワークショップを取り入れるなど、共生について考える機会を提供する。

交流を持続可能にする

今年度は大学に在籍しているため大学からバスを出してもらえたが、今後それが使えなくなった時、交通費や謝金など、資金的な問題が発生する。どの程度予算を確保でき、どのくらいの規模なら実施可能なのか、検討が必要である。

図書館とタイアップ

図書館を情報発信の場として活用し、生徒、教員に英語科の取り組みを周知する。視覚情報だけでなく、実際に触れられるもの、使えるものを展示し、多くの生徒、教員の興味関心を惹きつける。また地元企業が外国人労働者と協働している様子を展示し、身近な地域社会で多文化共生が進んでいることを意識させる。

9 月交流（主に留学生が自国文化を紹介）



写真や動画を見ながら、留学生から、彼らの出身国の文化などについて学ぶ

11 月交流（主に本校生徒が学校・学科を留学生に紹介）



海洋科：操船シミュレーター



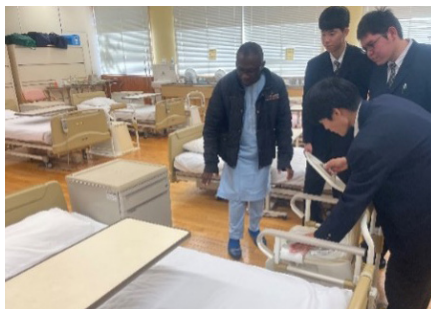
食品・ビジネス科：缶詰製造



機械科：自動車整備



電気電子科：コイル



福祉科：介護



図書館：各国についての書籍

9月、11月とも緊張は見られたが、生徒は交流を楽しんだ。異文化に触れ、自分とは違った価値観に驚きながらも多くの刺激を受け、多くのことを学んだ。一方で、少数ながら「めんどくさい」、「何もしたくない」という記述も見られ、彼らを将来ゼノフォビアにしないために、これらの生徒にどう働きかけたらいいか、検討が必要である。

外部機関との連携

JICA 中国

JICA 海外協力隊経験者の派遣や物品の貸借など、生徒に働きかける教材を提供してもらう。

鳥取県国際交流財団

国際交流員の派遣を依頼し、国や文化、日本との関係を紹介してもらう。

外国人労働者が在籍している企業

職員の派遣を依頼し、コンフリクトや共生の事例を生徒に話してもらう。

一人一人を大切に、自己肯定感を育みながら楽しく学ぶ、特別支援教育における多文化共生の文化

浜中 絃増 埼玉県立入間わかくさ高等特別支援学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：359 名 外国につながる児童 / 生徒数：1 名（全体の 0.3%）

学校背景



- ・県内で唯一、高等部単独で普通科、職業学科を併設した知的障害のある生徒のための特別支援学校である。
- ・普通科に 1 名、パルー出身の 3 年生の生徒が在籍している。また、生徒の家族が外国籍といった例もある。
- ・職業学科には、障害者手帳を用いた一般就労を目指している生徒が多く在籍しており、卒業後は外国人の方と共に働く可能性がある。

現在の課題



私が所属する職業学科の生徒たちは、在学中に実際の職場で働く「現場実習」に行き、食品工場やスーパーマーケットなど、様々な業種で外国人労働者と共に働く。しかし、外国人の方を「怖い」と感じる生徒が一定数存在し、戸惑いを理由に他業種を希望する生徒もいる。外国人の方とトラブルがあったわけではないため、外見や文化の違いに戸惑い、「怖さ」を感じていると考える。また、日常生活の中で外国人に対する差別的な発言が無意識のうちに出てしまう生徒も存在する。

現在の取り組み



1. ALT を外部から招く

埼玉県の事業を活用し、外国語の授業で ALT を招き、授業を通して取り組んでいる。

2. 韓国 1 日体験

「埼玉韓国教育院」から講師を招き、韓国文化の紹介、伝統衣装の着付けや伝統遊び体験を通して取り組んでいる。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

一人一人と向き合い、寄り添うことのできる人であり、教師になるため。



学校にとって

誰もが学ぶ喜びを味わい、安心して過ごせる学校を作るため。



世界・社会にとって

平和な世界を創るため

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

自分：

人は移民や国籍などに関わらず、それぞれの背景や気持ちがあり、一人一人違ったストーリーを持っている。様々な違いや一人一人の気持ちと向き合い、寄り添うことのできる人であり、教師になりたいと強く感じた。本研修の学びを通して、「多文化共生の文化」が必要であると考えた。

学校：

様々な背景やストーリーをもった子どもたちが共に学ぶ場所が「学校」であり、様々な実態や障害種の子どもたちが在籍する特別支援学校における多様性は明白である。今までできなかったことが「できた！」、分からなかったことが「分かった！」という、学ぶ楽しさや喜びを味わうに加え、友達や信頼できる先生がいるなど、子どもたちにとっての居場所、また楽しく居心地の良い場所であればならないと考え、そのために、「多文化共生の文化」が必要であると考えた。

世界・社会：

「知らない」ことは、誤解や差別につながる可能性がある。しかし、世界には数えきれないほどたくさんの文化、宗教、価値観が存在し、「知らない」ことがあるのは当然である。つまり、様々な「違い」をまずは知り、次に認めることで、無益な争いをなくし、少しでも平和に近づけるのではないかと考えた。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

必ずしも、多文化共生＝「外国人、外国の文化」ではないと、研修を通して感じる事ができた。国籍や言語、文化だけでなく、性別や障害の有無、宗教、肌の色、趣味嗜好、価値観など、人には様々な違いがあり、その違いを知り、認め合うことが「多文化共生の文化」だと考える。違うから「攻撃」や「対立」ではなく、その違いがあることをまずは認める。そして、お互いがお互いを「思いやる」気持ちを大切にするという「当たり前」を、当たり前のように（文化のように）していくことが「多文化共生の文化」だと考える。さらに、様々な違いを「おもしろいね！」と楽しむことができる人が増えれば増えるほど、「多文化共生の文化」は広がると考える。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

大切にするマインド

特別支援教育だからこそできる「個に応じた指導」を突き詰める

【理由】「多文化共生」は外国人や外国の文化だけではなく、様々な「違い」を認め、受け入れることである。特別支援学校や特別支援学級には、様々な背景や家庭環境の生徒が在籍し、同じ障害名であっても障害の程度や個々の実態は一人一人大きく異なる。そのため、個別的教育支援計画や個別の指導計画の作成・活用など、「個に応じた指導」が行われている。障害のある子であれ、外国にルーツのある子であれ、その子（個）に応じて指導する内容や優先順位、方法などを変えていく必要があることに変わりはない。当然、優しい日本語や外国語に関する専門的な知識を有する教師の育成も必要である。しかし、前提として、特別支援教育に関わる教師が、目の前の子ども一人一人の実態を的確に把握し、その子にあった指導をすること、また学校としてそういった土壌が育まれ、当たり前であることが、すなわち「多文化共生の文化」であり、仮に外国にルーツのある子が在籍した場合でも、柔軟に対応することができる「基盤」になると考える。

自己理解を促し、自己肯定感を高める指導・実践

【理由】前述の通り、様々な違いを知り、認め合うことが「多文化共生」である。しかし、相手を知る前に、前提として自分を知る活動が必要であると考え。特に、障害のある子どもたちにとって、障害理解（障害受容）を含めた自己理解は非常に重要である。また、彼らは健常の子どもたちに比べ成功体験が少なく、自分の得意やできることを認識することで、自己肯定感を育むことも大変重要である。「自分」というものをよく理解し、認める（自信を持つ）ことができることで、初めて他者と向き合ったとき、自分との違いを認めたり、楽しんだりすることができる。

<具体案>

①学校生活全体を通し、生徒が頑張ったこと、できたことを即時評価で言語化して伝える。

例：「〇〇君は失敗してもあきらめずに取り組み、粘り強い性格だね。」
「〇〇さんは係の仕事を毎日欠かさずやってくれて、責任感があるね。」

②「自分の取扱説明書」を作成

→完成した取扱説明書をもとに、生徒と教師の対話をする。

例：「〇〇君の長所は□□か。なるほど、先生もそう思うよ。例えば、△△のとき、～してくれてたよね。」

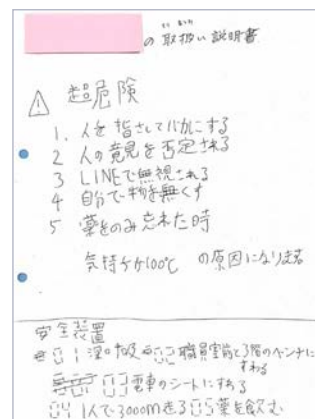
項目例：特徴（得意、長所）、苦手（短所）、癖、性格、直したいところ

家電好きの生徒Aは、自分を家電に例え、エラーが出る（感情のコントロールができない）ときと、そうなった場合の安全装置（対処法）を取り扱い説明書に記入した。（写真1）

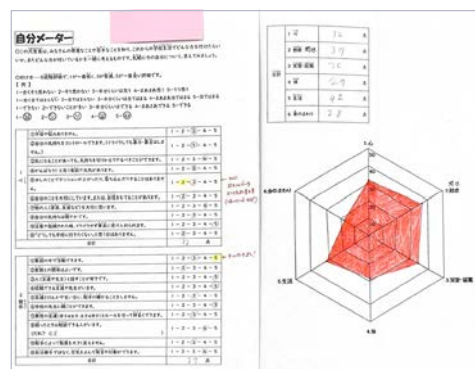
③「自分メーター」を作成→完成した自分メーターをもとに、生徒と教師の対話をする。

自分メーターとは？ → 一問一答形式の設問に対し、生徒は1～5点で点数をつけ、自己評価を行う。（写真2）

例：「〇〇さんはチームワーク3点をつけているけど、いつも周りに声かけをしてくれるし、先生は5点でもいいと思うよ。」



〈写真1〉生徒Aの取り扱い説明書（一部）



〈写真2〉生徒Bの取り扱い説明書（一部）

<対話のねらい・ポイント>

取扱説明書や自分メーターを単に作成して終わりではなく、他人から見る「客観的な自分」を知る機会にすることが重要である。また、その子が頑張っていることや長所を言語化してフィードバックし、褒めることで自己肯定感を育むこともねらいである。自分の長所を長所として捉えられていない子も多いため、それに気が付かせるような温かい声かけを行い、課題については「〇〇ができるようになると完璧だね」、「欲を言えば〇〇ができるといいね」、「〇〇についてはもったいない！」など、生徒にマイナスの感情をもたせず、モチベーションを上げるような伝え方が効果的である。

■ 多文化に触れ、興味を持つための実践

環境面の実践

① 教室に世界地図をはる

② 教室の本棚に SDG sや外国の文化、「違い」をテーマにした本を置く

【結果】筆者のクラスでは、世界地図を教室にはると、生徒が地図の周りに集まり歓声が上がった。特に国旗に興味を示す生徒が多く、新たな発見であった。世界地図や本をきっかけに、「僕はサッカーが好きだから、スペインやブラジルに行ってみたい」や「RRR という映画を観てからインドに興味をもった」など、生徒同士や生徒と教師の会話の中で、外国のことを話すことが増えたと感じる。多文化に興味を持つきっかけ作りとして、比較的簡単に取り組み、効果的な実践であると考えている。

外国語の授業実践

目的：「英語に親しむ」だけでなく、「外国の文化、言葉に興味を持つ」「多文化共生の文化を創る」を追加

① 簡単な日常会話練習に、英語以外の言葉（韓国語、スペイン語）を追加

- 韓国語例 ・안녕하세요? (アニョハセヨ) 意味：こんにちは
・감사합니다. (カムサハムニダ) 意味：ありがとうございます
・고맙워요. (コマウオヨ) 意味：ありがとう (ため口で)
- スペイン語 ・Hola. (オラ) 意味：やあ
・Gracias. (グラシアス) 意味：ありがとう
・Chao. (チャオ) 意味：バイバイ / またね

※とにかく簡単にシンプルな言葉を選び、生徒が授業以外の日常生活でも使えるようにする。

【結果】英語以外の言語についても、生徒は楽しそうに発音練習を行っていた。聞き馴染みのない音や発音は、生徒にとって発音するのが楽しいようで、特に韓国語についてはヘヨ体（～ヨで終わるかたち）、スペイン語では「Chao」が流行るクラスもあった。サッカー日本代表長友佑都選手の「Bravo」が流行したように、外国語のカッコいい / カワイイ表現は「つい言ってみたくなる」ため、多文化や多言語に興味を持つ切り口として効果的であると考えている。

② NHK「キソ英語を学んでみたら世界とつながった」を用い、英会話と外国の文化を楽しく学ぶ

動画 1 本につき 1 つの国という内容で、簡単な英会話フレーズを使い、パーソナリティの 2 人が世界各国の家族とビデオ通話でつながる。つながった家族の自宅や食べ物など、現地のリアルな暮らしや習慣、生活を紹介し、クイズなどもあるため、楽しく学ぶことができる。動画は 1 本 10 分と使いやすく、NHK for school のサイトにもアップロードされている。

③ 外国の音楽や映画に触れる機会を作る

- 【音楽例】 ・Beautiful Sunday (Daniel Boone)
・Take Me Home, Country Roads (John Denver)
・Imagine (John Lennon)
・Hello, Goodbye (The Beatles)
・Top of the World (Carpenters)
・Last Christmas (Wham!)
・I Just Called To Say I Love You (Stevie Wonder)

- 【映画例】 ・ディズニー映画
・Back To The Future
・ハリリーポッター賢者の石
・My Neighbor Totoro (となりのトトロ英語 Ver.)

上記の例は、高等特別支援学校である本校の「職業学科」の生徒に向けての教材として使用した。生徒の実態に応じ、曲や映画は選考する必要がある。選曲に関しては、テンポが早すぎず、できる限りテレビ番組や CM などでも聞き馴染みのある曲だと、生徒たちも歌いやすい。

【結果】「世界とつながった」や音楽、映画という教材を活用することで、生徒たちが楽しく意欲的に学ぶことができた。休み時間に英語で歌を口ずさむ生徒が出てくるなど、外国の文化や外国人に対する「心の壁」を、生徒の興味関心のある教材を活用することで、少しずつなくしていきたいと考える。

④ ALT と生徒が、やりとりを行う（話す）機会を作る

ALT を招いて授業を行った際、「出身国紹介」などの一方的なレクチャーではなく、生徒が ALT とやり取り（会話）をすることをメインに授業を行った。英語でコミュニケーションを取った経験がほとんどない生徒たちが多いため、Google 翻訳を活用し、コミュニケーションを取った。

【結果】授業後、「通じた！」「翻訳機を使えばけっこう話せる」という生徒からの感想を聞くことができた。実際にやりとり（会話）をすることで、「翻訳機を使って会話ができた」「なんとか通じた」という達成感や、外国人と関わることのハードルを下げるができたと感じる。

その他の実践

①実際に会う、実物に触れる、自分で体験する機会を増やす

本校では、職業学科 1 年生を対象に、「韓国 1 日体験」という行事を行っている。「埼玉韓国教育院」から講師を招き、韓国文化の紹介に加え、チマチョゴリの着付けや伝統遊び体験をしている。

【結果】生徒が楽しみながら異文化を学び、実際に体験することが何より大きな経験となっている。そのため、このイベントを他の国バージョンで企画し、様々な異文化や外国の生活を、話や写真、動画だけでなく、生徒が実際に着て、作って、食べて、遊んで、話して、生で「体験」できる機会を今後も増やしていきたいと考える。



着付け体験の様子

②異文化経験や外国人との思い出を教師が楽しく、積極的に話す

保護者という存在を除けば、教師は子どもたちにとって、最も身近で関係性の深い大人であることが多いと考える。子どもたちは身近な存在である教師を見て、「大人」に対するイメージを膨らませたり、目標にしたりして成長していく。よって、子どもたちの身近な存在である私たち教師が人生を豊かに生き、「大人」として夢や目標、生きることの喜びを示している。そこで、私たち教師が持つ様々な外国人との交流や思い出、エピソードを楽しく子どもたちに話すことで、「外国っておもしろいな」や「外国人の友達っていいな」など、ポジティブな感情やイメージを子どもたちに持ってもらえることができると考える。これらの経験を持つ教師は、惜しみなく子どもたちに還元・共有してほしいと考え、加えて、私自身はこれらの異文化経験が乏しいため、今後も積極的に学び続け、「先生はこんな体験をしたことあるよ」と外国や異文化を、実体験からくる「自分の言葉」で楽しく伝えられる教師になりたいと考える。

外部機関との連携

JICA

- ・ JICA 海外協力隊員による国際協力出前講座を依頼する。
- ・ 筆者自身が学びを深め、生徒に還元・共有できる経験を積むため、JICA を活用する。

ALT、埼玉韓国教育院

生徒が外国人の方と生で関わる貴重な機会のため、引き続き授業依頼など連携していく。

一人一人の自己実現のために

石動 徳子 神戸市教育委員会事務局 学校教育課

所属先情報

学校背景



神戸市の小・中学校では、外国籍児童生徒が1,635名、また日本国籍を含む日本語指導が必要な児童生徒が563名在籍している（2023年5月1日現在）。この数は年々増加している。また、近年の特徴として散在化・多様化傾向にあるといえる。今年度は中国やネパールからの渡日が特に多い。



現在の課題



日本語指導を行うと同時に、彼らの強みを活かす取り組みが必要ではないだろうか？

複数の言語・文化を持っていることは彼らだからこそその強み。それを大切に伸ばしていくことで、彼らが自身のアイデンティティへの誇り、また自己有用感を高めることにもつながる。同時に、私たちの視野を広げ、多様な見方ができる機会にもなる。その視点は、外国につながる児童生徒が少ない学校こそ、より重要だと考えている。どのように各校へ発信していけば良いかを考えたい。

現在の取り組み



・教員研修の実施

「日本語指導加配教員研修」（※加配教員の悉皆研修）と「日本語指導者養成研修」（※加配教員以外も対象とした任意参加の研修）を年6回ずつ実施している。その中で、日本語指導の具体的な方法とともに、校内支援体制づくりや周りの児童生徒へどのように働きかけるか等を考える内容を扱っている。

・「日本語指導が必要な児童生徒等の受入れマニュアル」の作成

・多文化共生推進校連絡会の実施

年3回の実施。外部講師による講演や学校間の情報交換会、代表校の授業公開など。

・市内小学生と留学生との交流会

※その他、所属している学校教育課内「こども日本語サポートひろば」での取り組み

・児童生徒受入相談…日本語指導に関する指導・助言、DLA、母語支援員の派遣など

・ランゲージコーディネーター派遣（中国語・ベトナム語）…保護者へのサポート

・デジタルコンテンツの開発（※注1）やオンライン教室

・日本語指導に関する相談や研修推進



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

外国につながる児童生徒の自己実現において、「日本語」という枠組みで彼らを見るのではなく、必要な支援を行いつつ、持っている良さや能力を発揮し、伸ばす視点が必要であると日々感じている。

まずは自身が、日本人と外国人、マジョリティとマイノリティといった二項対立ではなく、包括的に「多文化」を捉えられるようにになりたい。



学校にとって

外国につながる児童生徒が増加、また散在化・多様化している。今後ますます増加することが予想される中、どの学校にも土壌づくりが必要になってくるのではないかと考える。

教員の彼らへの捉え方が、彼らの学校生活やキャリア形成等に影響していると感じることが多い。



世界・社会にとって

・外国につながる児童生徒を特別な存在としてではなく、社会をつくる一員として育てる時代に来ている。

・単に「みんなちがって、みんないい」で良いのか、序列化がある中での「多文化共生」をどう実現するのかを考える必要があるのではないかと感じている。そのためにも、まずは社会の中にある不公平さに気づくことが重要だと考える。

・社会の構造が個人の感情にも影響していると感じている。

※なお、中央教育審議会答申「『令和の日本型教育』を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」（令和3年）にも、「増加する外国人児童生徒等への教育の在り方」が盛り込まれている。

- 【基本的な考え方】・外国人の子どもたちが共生社会の一員として今後の日本を形成する存在であることを前提
- ・キャリア教育や相談支援などを包括的に提供、母語・母文化の学びに対する支援が必要
 - ・日本人の子どもを含め、異文化理解・多文化共生の考え方に基づく教育の更なる取り組み

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

- ・カーン宇愛乃さんや伊藤忠明さんのストーリーを聴き、やはり当人の語りは響くものがあった。周りの児童からの「何人（ナニジン）なの？」という何気ない言葉による自身のアイデンティティの揺らぎがあったこと、また自身の力を発揮する機会や周りの先生との関わり等の中で、少しずつ自分というものを認められるようになったことなど、具体的に話を伺うことができた。その中で、個々の背景をよく理解することや、持っている良さや力を見出し、発揮できる機会を持つことが大事であると改めて認識した。また、自身のルーツは周りが決めることではなく、その人が誇りを持って見つけ出せるような周りの認め方や肯定的に捉える姿勢が大事なのではと感じた。
- ・同プログラム参加者の中に、「現在は外国につながる児童生徒はいない（又は少ない）が、今後を見通すと必要性を感じる。じっくり考えを深めたい。」と話し、熱心に考えアイデアを出している方が多数いた。自分も非常に勇気づけられた。そして、熱心に考える先生が孤立しないようなネットワークづくりが大事だと感じた。
- ・森茂岳雄先生の講演の中に、マジョリティの特権性について考える機会があった。単なる二極化ではないこと、特権を持っている人間にはその特権性が見えにくいことに気づかされた。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- 「日本人と外国人」「マジョリティとマイノリティ」といった二項対立で考える？
「外国につながる児童生徒」「日本語指導が必要な児童生徒」といったカテゴリーで個人を捉える？

⇒個人の背景を理解し、その児童生徒ならではの良さや強みを活かす環境をつくる



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

■ 大事にしたい視点やじっくり考えたいこと

- ・最も大事にしたいのは、必要な支援を行うと同時に、個人の良さや強みを伸ばすこと
- ・外国につながる児童生徒の学力保障や進路保障
- ・文化接触における個人の揺らぎや違和感への考慮
- ・社会の中にある不公平さへの気づき、マジョリティ側にある特権への気づき（※ここでの「マジョリティ」とは、単に数が多いというのではなく、その社会においてより権力をもっている層を指す）
- ・自分にもある、マジョリティの部分とマイノリティの部分への気づき
- ・移民の歴史を学ぶこと（どのような人がどのような理由で日本【に・から】移動したのか）
- ・「〇〇人」とは？また、「外国につながる児童生徒」のように一括りにしてよいのか？という視点
- ・言語や文化の「違い」だけでなく、「同じ」にも目を向けること
- ・言語以外でも児童生徒同士がつながる機会をもつこと
- ・また、「教える・支援する」側と「教えてもらう・支援してもらう」側が逆転するような機会を意図してつくること
- ・彼らの存在は、教員にとっても他の児童生徒にとっても、プラスとなるであろうという視点（視野が広がる、教員の指導力アップにつながる、グローバル社会で生きるとはどういうことかを体験的に学べる等）

■（上記の考え方をもとにした）市内の教員研修の実施

- ・ 日本語指導に係る研修
- ・ 「特別の教育課程」説明会
- ・ 多文化共生推進校連絡会
- ・ 校内研修 等

1. 有効なアプローチとして考えるキーワード

- ・ 当事者の発信、そして当事者と一緒に考える。
- ・ 教員や児童生徒の異言語・異文化体験（写真1）
- ・ 外部の人材活用、外部との協働（外部人材の自己有用感にもつながる）

2. 具体的な内容や方法

- ・ 研修の中で、上記のアプローチ方法を取り入れる。
- ・ 日本語指導の具体的な方法と同時に、キャリア支援や校内体制づくりに関する内容も取り入れる。（写真2、3）
- ・ JICA関西との連携のもと、文化接触をテーマとした研修を行う。（その際、森茂先生からご紹介があった異文化理解のワークシットも参考にする。）
- ・ 社会的公正をテーマとした研修の実施も視野に入れておく。
- ・ 理論と具体的な実践例（明日からできそうなもの、中・長期的にじっくり取り組みたいもの）をセットで提案する。また、できれば事務局等からのサポートも合わせて提示する。
- ・ 「モデルケースの紹介→分析・キーワードを見つける→自校につなげる」という流れも取り入れる。
- ・ 自身の海外協力隊経験（マイノリティ経験）や日本語指導加配教員としての取り組みから感じていることも発信する。

3. その他、研修を行う上で自身が考慮したいこと・取り組みたいこと

- ・ なぜ今考える必要があるのか、なぜ研修に取り入れる必要があるのかを自分の中に問う。
- ・ 研修参加者の多様性を考慮する。（指導経験や校内における立場、校内の状況等）
- ・ コーチングやファシリテートの手法を学ぶ。
- ・ 研修全般を担う部署との連携も視野に入れる。

■ その他

市外への発信

以前、他の自治体が実施する教員研修で、外国につながる児童生徒支援に関する取り組みや大事にしたい視点について、話をさせていただく機会があった。その際、自身の取組は決して十分ではないが、それでも研修参加者にとって今後のヒントになり得ることを感じた。今後も、市内だけでなく還元できることがあるのではないかと感じた。

「日本語指導×〇〇」指導案集

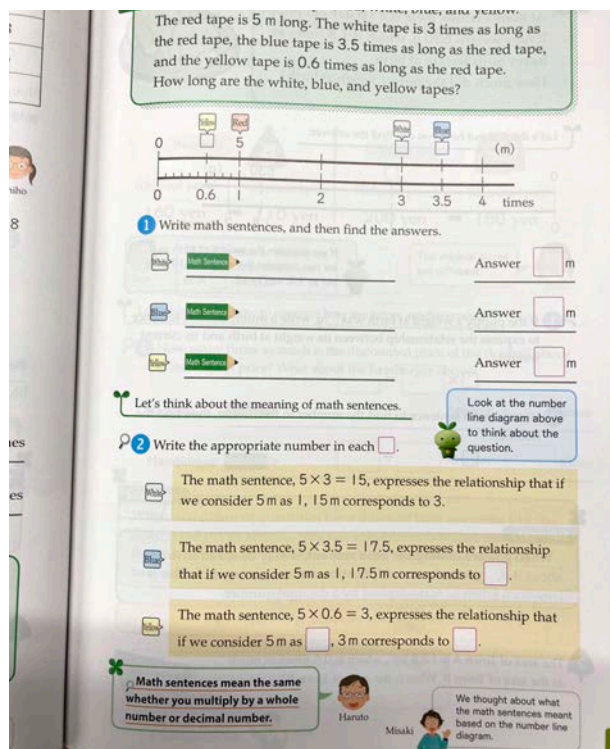
例：日本語指導×〇〇（多文化共生、トレーニング、ICT等）
「日本語指導」がそれのみならず、他の指導にも活かせることを示せないだろうか、と考えている。そうすることで、自身の指導の幅を持たせると同時に、他の教員に対しても、日本語指導に取り組む際のハードルを下げる一つにならないかと考える。

市内小学生と留学生との交流会

今年度初めて、神戸市内小学生と大学留学生との交流会を開催した。児童が世界の文化に親しむ機会となるよう、また、外国につながる児童が自国の文化に誇りを持つ機会となるよう、神戸大学との共同で開催した。留学生の出身国の文化紹介や世界クイズ、遊びやダンスなど、体験を通して児童が楽しく学ぶことができた。留学生にとっても、自国の文化を伝え、大学関係者以外ともつながりを持つ機会となった。今後も継続するとともに、中学生を対象とした交流会の開催も考えていきたい。（写真4）

教員間のコミュニティづくり

外国につながる児童生徒と同じく、担当する教員（日本語指導加配教員、日本語指導担当者）も校内ではマイノリティになりがちである。できればTeamsなどを活用して、教材や最近の動向、日々の悩み等について、気軽に情報共有ができるようなネットワークをつくりたい。



〈写真 1〉異言語体験例「算数の問題を解いてみよう」
(東京書籍「新しい算数5年上」英訳版より)



〈写真 2〉教員研修「高校生の語りから考える外国人児童生徒等支援」



〈写真 3〉教員研修「高校生の語りから考える外国人児童生徒等支援」



〈写真 4〉市内小学生と留学生の交流会

外部機関との連携

JICA 関西との連携

教員研修における研修員や海外協力隊
経験者等の起用

地域の外国人支援団体
との情報交換

近隣大学との連携

留学生の起用、大学教員による学校調査

ひょうご日本語ネット実務者会議での 情報交換

(隔月 1 回)

同じプログラムの参加者（市内・市外）
との情報交換や交流

※注1「デジタルコンテンツの開発」について

神戸市教育委員会と兵庫教育大学との共同研究により開発された、年少者向けの初期日本語学習動画である。学校生活で必要になるサバイバル日本語と、初歩的な名詞語彙が学べる。(神戸市以外でも視聴が可能ですので、日本語学習にご活用ください。)

兵庫教育大 さぼたん



「移民時代に多文化共生の文化を創る～そのヒントと考え方～」(森茂 岳雄 氏)

2023年度 JICA
「多文化共生の文化」共創プログラム

2023.11.12

移民時代に「多文化共生の文化」を創る
ーそのヒントと考え方ー

Morimo Takeo
森茂 岳雄

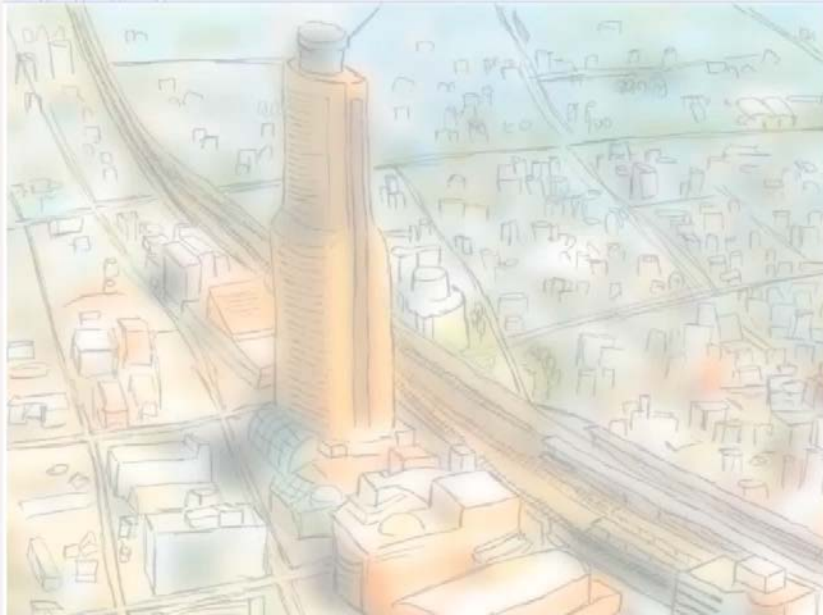


100年前へ、タイムスリップ!
～アニメで学ぼう移民の歴史～



ムービーを見る





3

グローバル化と「移民の時代」

今日の社会変動の特色：グローバル化と多文化化の連動

- トランスナショナルな人の移動の増大
- 一国内の多民族化・多文化化の進行



グローバルイシューとしての「移民」



移民時代の特色

- ① 「移民のグローバル化」(globalization of migration)
- ② 「移民の加速化」(acceleration of migration)
- ③ 「移民の多様化」(defferentiation of migration)
- ④ 「移民の女性化」(feminization of migration)

■ Castles, Stephen & Miller, Mark J. *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, 1996, Macmillan. (S. カースルズ & M. ミラー著、関根政美・関根薫訳 (2011) 『国際移民の時代【第4版】』名古屋大学出版会)、11-13頁。

5

① 移民のグローバル化

✧世界で国境を越えて移動する人々

1960年: 7,900万人

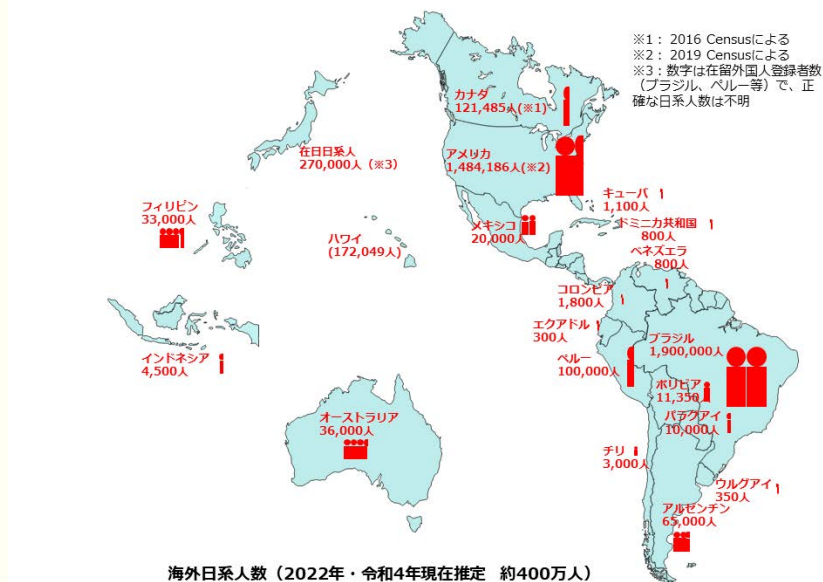
2020年: 2億8,100万人(世界総人口の3.6%)

✧地球上で自国以外に住んでいると推計される人口

→世界の全人口28人に1人

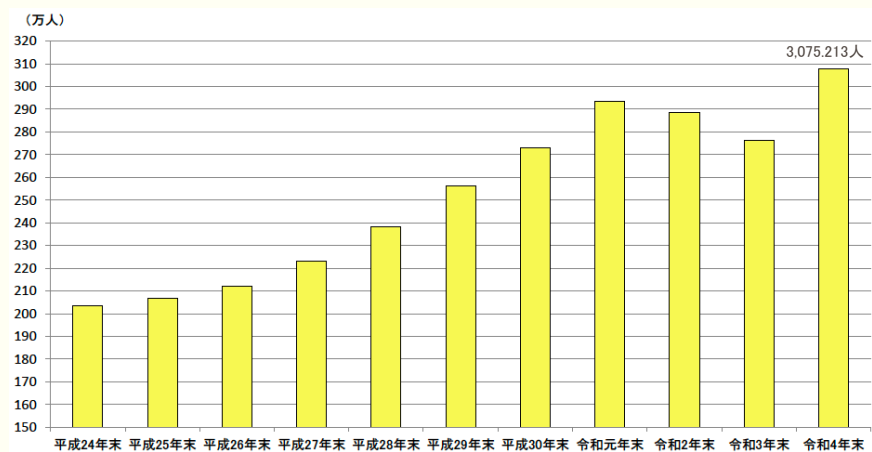
Data source: The United Nations Population Fund
<http://www.unfpa.org/migration>

6



7

② 移民の加速化 (在留外国人数の推移)



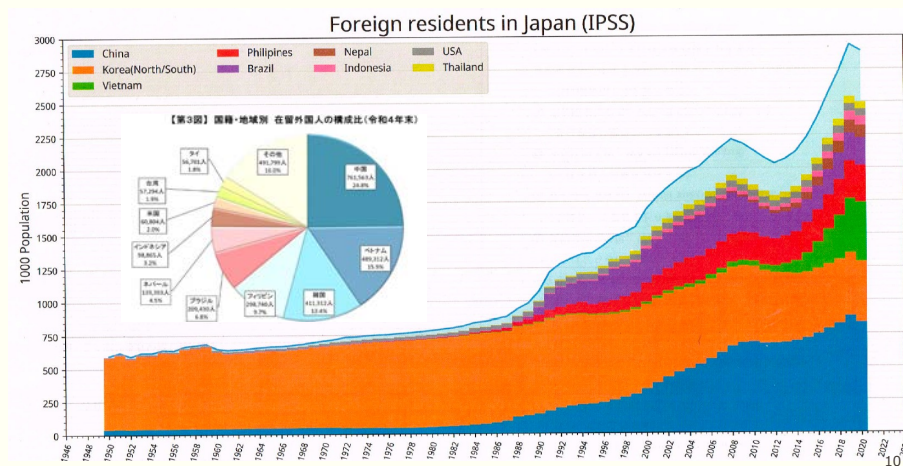
8

② 移民の加速化

(参考) 公立学校に在籍している外国籍の児童生徒数 (出典: 文部科学省「学校基本調査」)



③ 移民の多様化



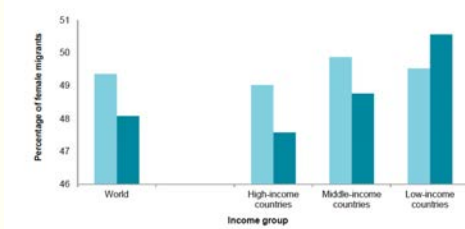
④ 移民の女性化

▽ 日本の男女別外国人登録者数 (2022年末)

女性: 1,547,027 人 (50.7%)

男性: 1,528,185 人 (49.3%)

Figure 15.
Proportion of women and girls among all international migrants, by World Bank income group at destination, 2000 and 2020



Source: United Nations Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2020). International Migrant Stock 2020.



移民学習の意義

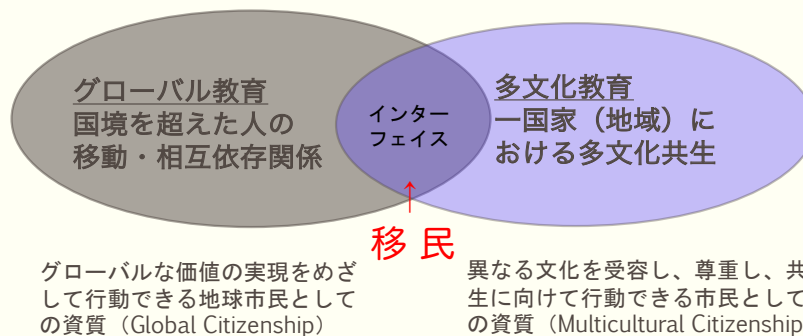
1. グローバル教育と多文化教育をつなぐ
2. 多文化社会における人権や市民権のあり方を考える
→社会正義の実現
3. 文化の本質主義的認識を克服する
→移民文化の異種混淆性・多様性
4. 移民当事者のアイデンティティを確立する
→日本人の新世界への参加と貢献



12

移民学習の意義 1

グローバル教育と多文化教育をつなぐ（教育学的意義）



13

移民学習の意義 2

多文化社会における人権や市民権のあり方を考える（社会的意義）

- 国民国家によって他者化された移民の基本的人権の問題
- 基本的人権と国家主権との間の緊張感や調整
- 多文化社会における人権や市民権のあり方



民主主義や社会正義の基本原則を学ぶ
シティズンシップ教育の機会



14

文化の本質主義的認識を克服する（文化的意義）

■移民文化の特色：

ディアスポラ性と異種混雑性（ハイブリディティ）
新しい文化の創造



民族やその文化を固定的に捉えるような
本質的な見方を克服する



15

移民当事者のアイデンティティを確立する（心理的意義）

■移民の子どもたち

→ホームランドとホスト国との間でアイデンティティの揺らぎ

- 移民の新世界への参加と貢献の歴史、
移民が継承してきた文化についての学び
→自己アイデンティティの確立



16

JICA横浜海外移住資料館の教育の取り組み



教科書に取り上げられられた海外移住資料館



(平成29年版)

海外移住資料館における移民学習の教材開発

■小・中学生を対象とした教育キット「PASSPORT」の作成



海外移住資料館における移民学習の教材開発

■移民カルタ



海外移住資料館における移民学習の教材開発

■紙芝居

- ・年齢を問わない
- ・わかりやすい
- ・伝えやすい
- ・参加できる
- ・人手を必要としない



(於国立民族学博物館、2001年)

海外移住資料館における移民学習の教材開発

■すごろく



22

海外移住資料館における移民学習の教材開発

■アウトリーチ教材

「移民トランク」



「学習活動の手引き」の開発（現在改訂中）

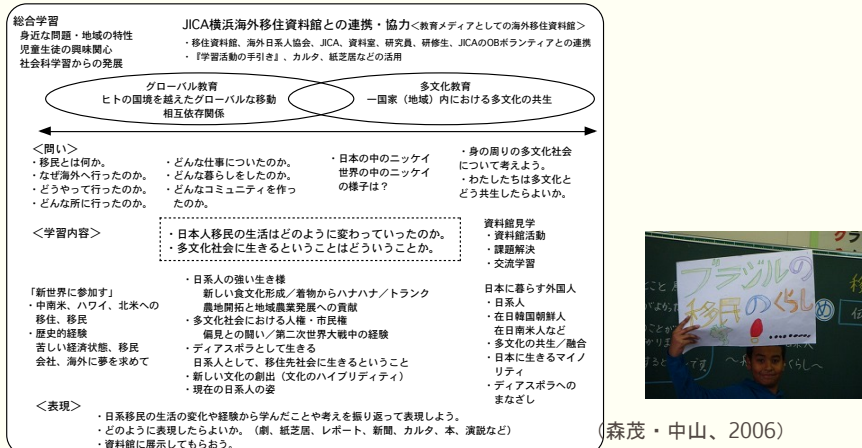


「学習活動の手引き」の開発（学習活動案の作成）



海外移住資料館を活用した移民学習の授業構想

＜図2＞海外移住資料館を活用した国際理解教育・グローバル教育と多文化教育のインターフェイスの観点からー



ワークショップ1：

「多文化共生」のアポリア
ー日中韓「異己」理解・共生
授業プロジェクトの事例からー

次の場面を考えてみよう！



「異己」とは？

- ・（原義）価値観が異なり、政治的に対立あるいは敵対する立場にいる利益集団（『後漢書』）
- ・「異己」は、価値多元社会において異なる価値観や立場を持つ相手を意味し、個人間から国家間のコンフリクトを解決する概念として着目した。

28

「異己」理解・共生授業の目標

- 日常の生活習慣や価値観について、日中韓の小・中学生が対話を行い、同じ価値でも逆転した価値基準を持つ集団がいることに気づき、その人たちの考え方を理解すると同時に、普段当たり前と思っていた自分の考え方を省みるきっかけをつくる。

29

一般的な「異己」理解・共生授業のプロセス

0. シナリオを用いた事前調査の実施

1. 「異己」の存在の認識：集団内に判断基準が相反するグループ（多数派と少数派）があることを認識し、多数派・少数派（「異己」）で対話をする場を設定する。
2. 「異己」の交流：国境を超えた集団間の交流によって、価値判断基準が逆転する場合があることを認識し（グラフ等）、相互に判断基準とその理由等について対話をする場を設定する。
3. 共生へのアプローチの創出：価値判断基準が逆転する人々・集団との交流の在り方、共生の在り方について、個人・集団で考える。

30

【場面】（シナリオ例 1：チョコレート問題）

毅（たけし）さんと剛（つよし）さんは、同じクラスの中で仲の良い中学校の友だちです。修学旅行に行き、二人で同じ部屋を使うことになりました。寝る前の自由時間に、二人はおしゃべりをしながら、それぞれのおやつを食べることにしました。つよしさんは自分が持ってきたチョコレートを箱から取り出して食べようとしたところ、トイレに行きたくなり部屋から出ていきました。しばらくして、つよしさんが部屋に戻ってくると、チョコレートがすべてなくなっていました。つよしさんは「僕のチョコレートは？」とたずねると、たけしさんは「僕が好きなチョコレートだったのでみんな食べた」と言いました。

31

【質問】

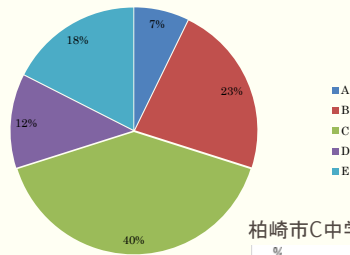
毅（たけし）さんの行動についてあなたはどのように思いますか？

- A. 全然気にしない。仲良しなのでお互いのものを区別する必要はない。
- B. 少し違和感はあるけれど、問題にしない。二人の関係にも影響がない。
- C. あまりいい気持ではない。今度またこんなことがあると困る。
- D. 不愉快だ。たけしさんの行動は理解しにくい。今後いい友達にしないほうがいい。
- E. その他。

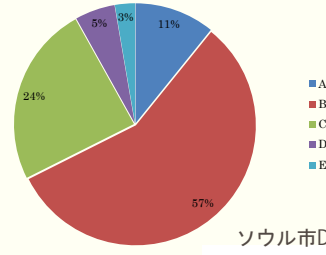
32

自分と違う考えを持った人とう共生できるか

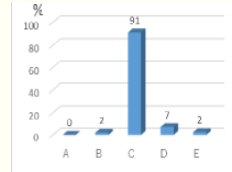
日本の小学校のシナリオへの応答
(新潟県上越市A中学校)



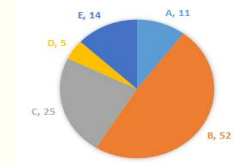
中国中学校シナリオへの応答
(北京市B中学校)



柏崎市C中学校



ソウル市D中学校



33

ワークショップ2：

マジョリティの「特権性」の
脱構築

マジョリティが労せずして
持っている特権の例を挙げ
てみよう！



34

マジョリティの意識改革の必要性 ー特権性への気づきと脱構築

特権 (Privilege)

○ある社会集団に属していることで労なく
得ることにできる優位性

○日本人として生まれたことで何か優位な
ことはありますか？ (日本人性)

35

集団としてのマジョリティの持つ特権性

立場理論 (Standpoint Theory)

- ・ 権力を持たない者（例えば外国人、女性）は、権力を持つもつ側（日本人、男性）の考え方を熟知せずには生きられない。
- ・ 権力を持つ者は、自分の下にいる人間について知ろうとしない。また自分が強者としての地位につけている構造・仕組みについて知ろうとしない。

36

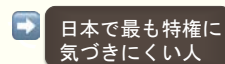
マジョリティ Vs. マイノリティ

マジョリティ

- ・ 日本人
- ・ 男性
- ・ 異性愛者
- ・ 高学歴者
- ・ 高所得者
- ・ 健常者

マイノリティ

- ・ 外国人
- ・ 女性
- ・ 同性愛者
- ・ 低学歴者
- ・ 低所得者
- ・ 障がい者



日本で最も特権に気づきにくい人

特権に気づきにくい人
日本人は自分の特権に気づきにくい

37

- Q: あなたはマジョリティ性とマイノリティ性では、どちらが多い？
Q: マジョリティが労せずして（無自覚に）持っている特権の例を挙げてみよう！

アイデンティティ	マジョリティ性	マイノリティ性
人種・民族	☐ 日本人	☐ 人種・民族的マイノリティ（外国人、在日コリアン等）
学歴	☐ 高学歴	☐ 低学歴
身体・精神	☐ 健常者	☐ 障害者
出生時に割り当てられた性別	☐ 男性	☐ 女性
性的指向	☐ 異性愛者	☐ 同性愛者・バイセクシャル・パンセクシャル等
性・ジェンダー自認	☐ シスジェンダー（身体と性自認が一致している人）	☐ トランスジェンダー・Xジェンダー等
所得	☐ 高所得	☐ 低所得
居住地域	☐ 大都市圏在住	☐ 地方在住

（出典：出口真紀子 n.d. https://jinken-net.com/close-up/20200701_1908.html）

38

「特権」の気づきー教室でできるアクティビティ

ルール：

みなさんはそれぞれある国の国民です。みなさんにはお金持ちになり、社会階層を上げる可能性を秘めています。

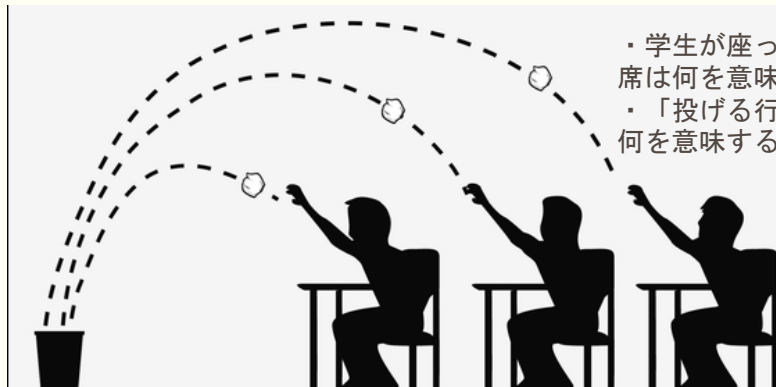
その方法は配った紙をボール状に丸め、このゴミ箱入れることです。さあ、座ったところから投げましょう。



Source: <https://gigazine.net/news/20141212-learn-privilege/>

39

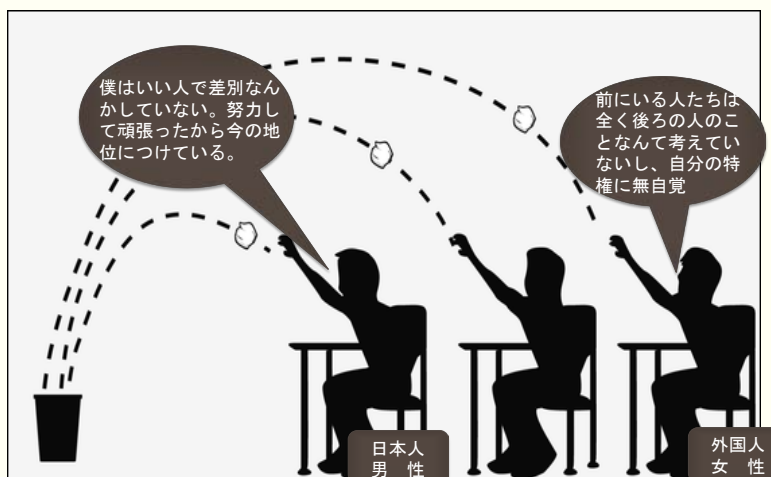
教室でできるアクティビティ



- ・ 学生が座っている席は何を意味するか
- ・ 「投げる行為」は何を意味するか。

後ろの席の学生はみな、「それは不公平だ！」と口々に叫びます。それに比べ一番前に座っている学生は自分の特権には気づきません。 40

立場理論をあてはめると



41

教訓：特権は持っている人には見えにくい



先生：「私達は教育を受けられる立場にいる。自分の特権に気づきましょう。そして教育という名の特権を活かし、自分より後ろの席にいる人の支援に当たりましょう。」 42

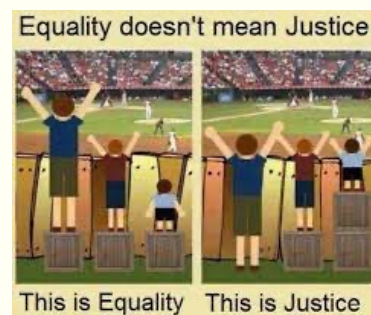
社会正義のための教育 (social justice education)

- 社会正義のための教育は、制度的、文化的、個人的レベルにおける抑圧や特権性の構造を批判的に分析し、社会的不正義の問題についての気づきや知識をもたらし、行動に移していくためのスキルを発展させることを目指す。(Bell, 2016)

43

おわりにー多文化共生時代の教育に必要なこと

- **多様性の尊重**
→ 「異己理解」の重要性
- **社会正義（公正）の実現**
→ マジヨリティの「特権性」についての気づき
→ 「アライ（Ally）」となる



(アライ：マジヨリティ集団の一員でありながら、マイノリティ集団への差別や不公正に対して異議を唱え、行動を起こす人々)

44

【参考文献】

森茂岳雄・中山京子編（2008）『日系移民学習の理論と実践ーグローバル教育と多文化教育をつなぐー』明石書店。

森茂岳雄・中山京子（2006）「海外移住資料館を活用した国際理解教育の授業づくりー教師研修を通してみた移民学習の可能性ー」JICA横浜海外移住資料館『研究紀要・館報』第1号。

森茂岳雄・中山京子（2011）「移民学習論ー多文化共生の実践に向けてー」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房。

森本豊富・森茂岳雄（2018）「『移民』を研究すること、学ぶこと」日本移民学会編『日本人と海外移住ー移民の歴史・現状・展望ー』明石書店



45

- ・ 釜田聡・堀之内優樹・周勝男（2020）「『異己』理解共生を目指した国際理解教育のプログラム開発」『上越教育大学教職大学院紀要』第7巻、81-94頁
- ・ Diane J. Goodman (2011), *Promoting Diversity and Social Justice: Educating People from Privileged Groups, 2nd ed.*, Taylor & Francis. （出口真紀子監訳、田辺希久子訳『真のダイバシティをめざしてー特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育ー』上智大学出版、2017年）
- ・ 出口 真紀子(n.d.) 「マジョリティの特権を可視化するー差別を自分ごととしてとらえる ためにー」東京人権啓発企業連絡会
(https://jinkennet.com/close-up/20200701_1908.html)
- ・ 森茂岳雄（2021）「多文化共生のための教育ー多様性の尊重と社会正義の実現にむけてー」中坂恵美子・池田賢市編『人の移動とエスニシティー越境する他者と共生する社会に向けてー』明石書店、229-244頁



46

(2) 多文化共生のための参考文献・教材・資料リスト

※児童生徒向け

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格(税込)	出版日	関連 サイト
ひとつことレビュー							
1	エッセイ	ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜ レイシズムに 向き合えないのか？	ロビン・ディアンジェロ	明石書店	¥2,750	2021年6月1日	
			ホワイトフラジリティとは「白人の心の脆(もろ)さ」。差別を否認することはマジョリティの特権性につながる・・・どうしたらお互いを理解できるのかを問いかけます。				
2	教育実践	多文化クラスの 授業デザイン ——外国につながる 子どものために	松尾知明	明石書店	¥2,420	2021年3月19日	
			外国につながる子どもたちへの学びの支援は何が必要か。教科をベースに学習言語と学習方略の支援へのアプローチを紹介しています。				
3	教育実践	多文化共生のための シティズンシップ教育 実践ハンドブック	多文化共生のための市 民性教育研究会編著	明石書店	¥2,200	2020年4月2日	
			日本社会の多文化共生に向けたシティズンシップ教育の実践を提案しています。「違いを認める」ことは大切だが、個人の「思いやり」だけでは解決しない。アクティブラーニングの具体的なテーマから考えます。				
4	研究書	「人種」「民族」をどう 教えるか—創られた概念 の解体を目指して	中山京子他編著	明石書店	¥2,860	2021年1月8日	
			社会的に創られた概念であるのに、実体化されて差別や偏見を生んでいる「人種」「民族」をどう教えるか。学術的見地からみた正しい認識と、これまでに日本や海外で行われた授業実践の蓄積を踏まえて、教師が教えるための小・中・高の授業プランを提案する。				
5	国際理解 教育	国際理解教育を問い直す —現代的課題への15の アプローチ	日本国際理解教育学会	明石書店	¥2,750	2021年4月2日	
			国際理解教育の原点を問い直す・・・国際理解教育の歴史をたどると共に、これからの国際理解教育はどうあるべきか、授業のあり方などを考えます。				
6 ※	作品集	横浜(koko) ——「外国につながる」 ではひとくりにできない 中高生の作品集	Picture This Japan (監修), 横浜インター ナショナルユースフォト プロジェクト写真集編集 委員会(編集)	明石書店	¥1,980	2021年5月7日	
			外国につながる子どもたち(インターナショナルユース)の目線で切り取った「横浜」の写真集。見た目や言語にとらわれず、自分らしい表現がたくさんあります。とてもステキな写真集です。				
7	実践ガイド	Q&A でわかる外国に つながる子どもの就学 支援「できること」から 始める実践ガイド	小島祥美(編著)	明石書店	¥2,420	2021年3月1日	
			何から取り組めば良いのか？ Q&A でわかりやすく伝えます。				
8	実践ガイド	外国人児童生徒 受入れの手引 改訂版	文部科学省総合教育政 策局 男女共同参画共 生社会学習・安全課		無料 (HP から DL)	2019年3月	
			外国人児童生徒の公立学校への円滑な受入れに資することを目的として、文部科学省が作成した「外国人児童生徒受入れの手引き」です。				

9	ノンフィクション	芝園団地に住んでいます：住民の半分が外国人になったとき何が起きるか	大島 隆	明石書店	¥1,760	2019年10月1日	
			埼玉県川口市芝園団地は住民の半分が外国人。一つの団地に二つの世界。どんな感情が芽生え、それをどうしていけば良いのか、実際に芝園団地に住む著者の記録です。				
10	ノンフィクション	にほんでいきる	毎日新聞取材班 編	明石書店	¥1,760	2020年12月20日	
			外国籍の子ども達が日本でいきるためには何が必要なのか、その実態取材しました。子ども達の「学ぶ権利」は守られているのでしょうか。差別や格差について考えます。				
11	ノンフィクション	アンダーコロナの移民たち——日本社会の脆弱性があらわれた場所	鈴木 江理子	明石書店	¥2,750	2021年6月1日	
			現在のコロナ禍は外国につながる子ども達とその家庭にとって大きな危機となっています。どうやって支援をすべきなのかを考える一冊です。				
12	評論	日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション——人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別	デラルド・ウィン・スー	明石書店	¥3,850	2020年12月18日	
			いろいろな場面で現れる無意識でありながら重大な差別と言われるマイクロアグレッション。マジョリティとマイノリティが共に尊重し合うためにはどうすれば良いのかを考えます。				
13	エッセイ	他者の靴を履く アナーキック・エンパシーのすすめ	ブレイディ みかこ	文芸春秋	¥1,595	2021年6月25日	
			アナーキーとエンパシーはつながっている。自分の靴を脱げなければ、他者の靴は履けない。共感だけではたどりつけない、生き抜くために必要な力とは何か、作者は様々な場面から問いかけます。				
14	教材・※読み物	未来の授業 SDGs ダイバーシティ BOOK	佐藤直久監修	宣伝会議	¥1,980	2021年12月28日	
			「ダイバーシティ」というテーマを通して自身のあり方を深める教材です。みんなが生き、活かされる社会を創るためにはどうすればいいのか、小学生から大人まで、豊富なマンガやイラストを通して学べます。				
15	評論	海外ルーツの子ども支援 言葉・文化・制度を超えて共生へ	田中宝紀	青弓社	¥2,000	2021年5月25日	
			日本の学校で学ぶ海外ルーツの子どものうち、1万人以上が何の支援もない状態にあり、地域ボランティアたちによる日本語教室の活動にも限界が迫っています。日本語を母語にしない子どもたちへの支援活動を続けてきた経験に基づく現状と提言です。				
16	実践ガイド	学級担任のための 外国人児童指導 ハンドブック	菊池 聡	小学館	¥1,980	2021年3月16日	
			教室での「困った！」をズバリ解決！国際教室のスペシャリスト菊池先生がマンガで登場、指導のコツとポイントをわかりやすく解説します。				
17	※マンガ	まんが アフリカ少年が 日本で育った結果	星野ルネ	集英社	¥1,100	2018年8月20日	
			カメルーン生まれ、日本育ちのアフリカ少年のニッポン観察日記。「あたりまえ」って何だろう？前向きなパワーに元気が出ます！ ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。（申請不要）				
18	※マンガ	まんが アフリカ少年が 日本で育った結果 ファミリー編	星野ルネ	集英社	¥1,100	2019年3月30日	
			ファミリー編はフルカラー＆総ルビでさらにパワーアップしています！ ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。（申請不要）				

19 ※	マンガ	まんが アフリカ少年が 見つけた 世界のことわ ざ大集合 星野ルネのワンダフル・ ワールド・ワーズ！	星野ルネ	集英社	¥1,210	2020年5月26日	単なる世界のことわざ辞典ではありません。星野ルネさんの体験を通じたことわざから、世界が広がります。 ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。(申請不要)	
20	ノンフィクション	外国ルーツの若者と 歩いた 10 年	海老原周子	公益財団法人東 京都歴史文化財 団 アーツカウ ンシル東京	無料 (HP から DL)	2021年3月15日	本研修でもお話いただいた海老原周子さんの著書。外国ルーツの若者を取り巻く現状やワークショップの現場で見てきた課題、次の 10 年に向けて取り組むべきことの提案などを、活動の記録と共に記しています。リンクから PDF が DL できます。	
21	教育実践	多文化社会で多様性を 考えるワークブック	有田佳代子、志賀玲子、 渋谷実希〔編著〕／新 井久容、新城直樹、山 本冴里〔著〕	研究社	¥2,420	2018年12月17日	様々なバックグラウンドを持つ人々が一緒に生きる社会で、仲間と考えを伝え合いながら理解を深め、あらためて多様性を考え得るワークが掲載されています。子どもから大人までアレンジして使えます。	
22 ※	教育実践	〈超・多国籍学校〉は今 日にもぎやか！ 多文化共生って なんだろう	菊池 聡	岩波ジュニア 新書	¥902	2018年11月20日	国際教室での取り組みを現場からお伝えします！困難や問題を解決するヒントがたくさんあります。	
23 ※	マンガ	となりの席は外国人	あらた真琴	ぶんか社	¥1,047	2012年4月2日	もと小学校教員の作者が外国につながる子どもがたくさんいる学校に赴任した！気軽に読めるマンガです。	
24	教育実践	チャレンジ！多文化体験 ワークブック：国際理解 と多文化共生のために	村田晶子／中山京子／ 藤原孝章／森茂 岳雄 編	ナカニシヤ出版	¥2,420	2019年6月30日	授業や学生主体の交流活動、地域の国際交流活動でも使える Chapter は「問い」と「活動」で構成されています。ワークシートもついているので振り返りや報告会にも活用できます。	
25 ※	エッセイ	ぼくはイエローで ホワイトで、 ちょっとブルー	ブレイディ みかこ	新潮社	¥1,485	2019年6月30日	ここはイギリス、中学生の「ぼく」はイエローでホワイト、その中で考える多様性とは、アイデンティティって何だろう？？読みやすいエッセイから考えます。 成長した「ぼく」の親離れを描く「2」もあります！	
26 ※	教材・ 読み物	WE HAVE A DREAM 201 カ国 202 人の夢× SDGs	市川太一編	いろは出版	¥2,860	2021年6月12日	世界 201 カ国の若者たちが語るそれぞれの夢。その夢がつながるところに何が見えるでしょうか。それぞれの夢がどの SDGs に関連しているかも考えます。英語版もあります。	

27 ※	写真集	Daily Bread: What Kids Eat Around the World	Gregg Segal	powerHouse Books	(\$40)	2019年6月4日	
			世界の子供たちは、何を食べているのでしょうか？セネガルやブラジル、インドネシアなど世界の子供達と彼らが1週間で食べたものを美しい写真で紹介しています。				
28	報告書・ ワーク ショップ集	教師国内研修報告書 & ワークショップ集 多文化共生 ～困難さを豊かさに変 えるプロセス～	—	JICA 横浜	無料 (HP から DL)		
			誰一人取り残さない持続可能な社会へ向けて、日本から海外に渡った日本人移住者の歴史や、海外から日本に戻ってきた人々の暮らしに触れることを通して、多文化共生について理解を深め、研修で得た知識や経験をもとに、「持続可能な社会」「誰一人取り残さない」をテーマとした参加型学習教材（ワークショップ）を作成しました。				
29 ※	教材・ 読み物	世界の教室から	—	JICA 東京	無料 (HP から DL)		
			世界 14 カ国の教室の様子を写真とメッセージで紹介。外国につながる生徒の背景がわかります。				
30 ※	実践ガイド	今日から私も バディさん	—	JICA 中部	無料 (HP から DL)		
			外国の人たちは「地域で共に生きる仲間です」バディさんは、地域で外国の方が安心して暮らすことができるように手助けをする仲間・相棒です。バディさんになるための入門書！				
31	報告書・ ワーク ショップ集	多様な社会を考える 学びのプログラム集	—	JICA 中国	無料 (HP から DL)		
			はじめて開発教育・参加型の学習を実践しようとしている方や、多文化共生、多様な社会の構築について考えたいという方が、すぐに活用できるように作成しました。				
32 ※	雑誌	JICA 広報誌 JICA Magazine	—	JICA 広報部	無料 (HP から DL)	偶数月発行	
			偶数月に発行される JICA の広報誌です。中高生向けの記事もたくさん掲載！美しい世界の写真はスマホや PC のオリジナル壁紙として DL 可能です。電子書籍でも購読できます（無料）				
33 ※	ポッド キャスト	「世界は可能性で いっぱい」 presented by JICA Magazine	—	JICA 広報部		隔月配信	
			国際協力のゲートウェイ JICA Magazine 編集部のポッドキャスト番組です。世界各地、多種多様な職種で活動する JICA 海外協力隊員や、専門家などを毎回ゲストに迎え、生の声をお届けします。現地で見た、聞いた、食べた、感じたことを編集部員がインタビューし、世界に目を向けるきっかけとなることを目指したトーク番組。				
34 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 アフリカ篇（アフリカ全体）	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			主に中学生を対象とした開発教育用の教材です。知っているようで知らないアフリカのこと、アフリカ全体とアフリカの 10 カ国について紹介しています。生徒向けの冊子、教員用の指導書および導入用の動画の 3 本立てで公開しています。ご希望の方には冊子を送付いたします。 問い合わせ先：広報部地球ひろば推進課 mptgp@jica.go.jp				

35 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」アンゴラ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈アンゴラ編〉海辺に広がる大都会！石油とダイヤモンドの国の内線のきずあとと復興			
36 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」ジブチ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈ジブチ編〉中東とアフリカ、アジアとヨーロッパをつなぐ「海上輸送の要」ジブチ！！			
37 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」ベナン	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈ベナン編〉行ってみたい！「ICT 産業」「観光産業」二つの顔を持つベナン！			
38 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」南アフリカ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈南アフリカ篇〉なぜラグビーが人々の心を厚くするのか。南アフリカが目指した「ワンチーム・ワンカントリー」とは？？			
39 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」南スーダン	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈南スーダン〉武器ではなくスポーツで競いあうことを体験。若者が活躍する国へ！南スーダン共和国！			
40 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」モザンビーク	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈モザンビーク編〉日本との不思議な縁を結んだ海野シルクロード。織田信長の家臣、黒人の侍「弥助」はモザンビークの出身だった！？？			
41 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」リベリア	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈リベリア編〉内戦やエボラウイルス、多くの困難に立ち向かう、たくましくリベリア。国民の平均年齢は19歳！！			
42 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」ルワンダ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈ルワンダ編〉内戦を乗り越えて・・・ICTによる国づくりがぐんぐん進む「アフリカの奇跡」ルワンダ！			
43 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」ウガンダ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈ウガンダ編〉「困ったときはお互い様」寛容な心を持った人々の国、ウガンダ！			
44 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」サントメ・プリンシペ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
				〈サントメ・プリンシペ編〉知る人ぞ知る幻の島。青い海に浮かぶ生き物の楽園！！			

45	報告書・ワーク ワークショップ集	学校や地域で活用できる！ 多文化共生ワークショップ集	JICA 横浜	—	無料 (HP から DL)	「多文化共生と移民」のテーマで実施した 2019 年度 JICA 横浜教師海外研修の参加者が、研修の一環として作成した参加型アクティビティ教材を掲載しています。国内事前・事後研修や、ブラジル連邦共和国での現地研修で学んだこと、気付いたこと、疑問に思ったことなどを基に作られたワークショップ集です。学校や地域で、多文化共生の環境づくりのために活用ください。	
46	報告書・ワーク ワークショップ集	総合的な学習（探究）の時間のアイデア集	JICA 東京	—	無料 (HP から DL)	総合的な学習（探究）の時間で、国際理解教育／開発教育／ESD をどのように進められるか、学習指導案・ポイントをまとめたアイデア集です。多文化共生の項目では、「難民」、「幸せの定義」、「隣の席の友達」などのテーマから多文化共生社会の実現をジブンゴトとして捉えるためのワークショップなどを紹介しています。	
47	報告書・ワーク ワークショップ集	JICA 中国 開発教育支援事業ー 20 年をふりかえり、これからを考える	JICA 中国	—	無料 (HP から DL)	JICA の開発教育支援事業 20 年をふりかえり、これまでの成果と課題を見つめ、今後の開発教育支援事業のあり方を考える機会として作成しました。中国センターにおける開発教育支援事業の実績や本事業を活用された先生方を対象に実施したアンケート結果、継続的に国際教育に取り組まれている先生方の寄稿文等が紹介されています。	
48	教材	多文化共生ってなんだろう？（本編）	JICA 九州	—	無料 (HP から DL)	同じ地域に暮らす外国人住民の存在をより身近に感じていただくことを目的に作成した教材です。本教材では、身近に起きているかもしれない問題をとりあげた 5 つのケーススタディと地域での取り組みや九州に多く住んでいる外国人の「国」について紹介しています。	
49	教材	多文化共生ってなんだろう？ ～データブック～（資料集編）	JICA 九州	—	無料 (HP から DL)	「多文化共生ってなんだろう？（本編）」の別冊です。九州の外国人材に関する統計データや、九州各県での多文化共生に対する取り組み事例をまとめています。本編の参考資料としてご活用ください。	
50	教材 (紙芝居)	カリナのブラジルとニッポン	落合佳江子	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	来日 5 年目、小学 6 年生の日系ブラジル人 3 世を主人公にした物語です。前半は、ブラジル移民の歴史、後半は主人公が現在抱えているの学校生活・家族の問題を実話をもとに描いています。	
51	教材 (紙芝居)	弁当からミックスプレー トへ	中山京子 / 森茂岳雄	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	100 年以上前のハワイ生活、さとうきびプランテーション、様々な国からの移民との交流、ハワイの多文化社会、移民の食文化変容を日系移民史を通して描いています。	

52	教材 (紙芝居)	ハワイにわたった日系 移民	中山京子 / 森茂岳雄	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	
ハワイへの移民体験を持つ祖母と小学生の主人公を描いています。ハワイ日系移民の戦前戦後のファミリーヒストリーを知ることができます。						
53	教材 (紙芝居)	海を渡った日本人	中山京子	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	
写真で日系移民の歴史全般を概説をしたものです。紙芝居の写真はすべて JICA 横浜にある海外移住資料館に展示してある物・写真です。						
54	教材	移民カルタ	—	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	
日本人の海外移住の歴史、移住者の生活や心情、日本に住む日系人の生活や思いなど、子どもたちにも知ってほしい移民に関する様々な事柄をかるたにしました。絵札の裏には読み札の解説がありますので、遊びを通して楽しみながら学ぶことができます。						
55	教材	日本ーブラジル移民カルタ	—	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	
日本の学校に多く在籍する日系ブラジル人児童生徒、教室内で彼らとともに学ぶ日本人児童生徒、ブラジルにおいて日本語を学習する生徒を対象として教材開発を行いました。日本語学習者はことばの獲得だけでなく、歴史や文化保持／変容を学びながらエスニック・アイデンティティを高めることができ、共に学ぶ日本人生徒は日系ブラジル人の友人の背景を理解することができます。						
56	教材	移民スゴロク	—	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	
4 択のクイズに答えながら、遊びを通して日本人のブラジル移住および移住一般に関して学ぶスゴロクを作成しました。日本から船に乗って出発し、長い航海の後ブラジルに到着、そしてブラジルでの生活になじんでいく、その体験をクイズで学べます。						
57	教材	いみんトランク	—	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	
移民に関する授業や事前学習をサポートする貸出教材です。国際的な人の移動から多文化共生を学ぶことのできる楽しい教材で、日本と世界をつながたいの思いから作られました。移住者の歴史や経験、貢献などにかかわるハンズ・オン教材や先生方向けの解説書などを多数取り揃えています。						
58	教材 (DVD)	Monica and Friends 日本とブラ ジル友情の絆	Mauricio de Sousa Productions Japan	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出	
昔の日本人はどうして海外に移り住んだのか？移り住んだ先でどんな生活を送っていたのだろう？まずは、ブラジル人の女の子モニカといっしょに移住の歴史を見てみよう！(11 分)						

59	教材 (DVD)	世界につながる教室 授業で使える映像教材 PDF 教材	JICA	—	無料 (HP から DL)	中学・高校生が対象の教材です。JICA 事業の映像や、NHK や世界の報道映像及び独自のインタビュー映像を、授業でそのまま使えるよう再編集したアクティブラーニング用の映像教材です。「水と世界」「国際協力」「難民」「人間の安全保障」のテーマを、それぞれ数分にまとめました。		
60	教材	つながる世界と日本	JICA	—	無料 (HP から DL)	対象は小学校高学年～高校生です。途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。		
61	教材	共につくる 私たちの未来	JICA	—	無料 (HP から DL)	SDGs の基本を、日本の国際協力や各国の子どもたちの紹介も交えて学べる教材です。各ゴールについて、関連データや最初の一步となる問いも掲載しており、学校などで SDGs を扱う際にそのまま活用できます。		
62	教材	SDGs を学ぼう、 SDGs で学ぼう！	JICA	—	無料 (HP から DL)	JICA 地球ひろば作成の SDGs 関連教材を 1 冊にまとめた教材ガイドブック (DVD 付) です。授業で役立つ映像教材やアレンジして使えるデジタル教材をぜひ活用ください。		
63	書籍	新大久保に生きる人びとの生活史——多文化共生に向けた大学生による社会調査実習の軌跡	箕曲在弘	明石書店	¥2,750	2022 年 3 月 31 日	2000 年代韓流ブームに沸いた新大久保の街は、今や多国籍タウンへと変貌を遂げています。本書では、新大久保の概要をはじめ、そこで生活を営む外国ルーツの人々の生活史に着目します。12 名の当事者への大学生による聞き取り、さらには社会調査実習の授業実践ノウハウまでを網羅した素晴らしい一冊！（参照：明石書店）	
64	書籍	新版 日本の中の外国人学校	月刊イオ編集部	明石書店	¥1,760	2022 年 2 月 10 日	日本の公立学校では包摂が困難な外国につながる児童生徒の教育を支え、引き受ける外国人学校。コロナ禍で生じた「教育の継続」などに関する新たな差別。子どもたちがアイデンティティを失わず日本社会で共生していくために奮闘する学校現場に迫ります。（参照：明石書店）	
65	書籍	外国人の子ども白書【第 2 版】——権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から	荒牧重人	明石書店	¥2,750	2022 年 2 月 25 日	約 30 万人の外国籍の子どもたち。彼らは今、どのように生きているのだろうか……。現代日本における「外国につながる子ども」の現状と課題がわかる画期的な入門書。第 2 版では、新型コロナウイルスの拡大が外国人の子どもの生活に及ぼした影響、入管政策の変化など最新の情報に触れています。（参照：明石書店）	
66	書籍	わたしからはじまる！ SDGs	川延昌弘 / 辰野まどか	風鳴舎	¥1,760	2022 年 6 月 27 日	自分の好きや想いを SDGs とつなげて考えることが、自分や自分の周りの世界とつながるきっかけになるとしたら？世界中の人とつながり、新しい未来をつくっていくためのツールとして SDGs を捉え、実際にアクションを起こせるようになる本です！本書の sections2 では、ワークにもと取り組めます。探求学習・課題図書としても最適な一冊！（参照：風鳴舎）	

67 書籍	異文化間教育事典	異文化間教育事典 明石書店	¥4,180	2022年 6月 20日	
異文化間教育学の「知」を結集した事典。異文化間教育の理論と方法、対象、領域の3部構成で、研究・実践において基礎となる幅広い204の重要項目を置いています。多文化化する社会における近年の課題や学問的な成果を取り上げ、今後の社会づくりの課題とヒントを示す一冊。(参照：明石書店)					
68 書籍	日本語×世界の課題を学ぶ 日本語でPEACE [Poverty 中上級]	奥野由紀子 / 小林明子 凡人社	¥2,640	2022年 8月 20日	
日本語学習の中で、世界の問題のつながりに目を向け、自分ごととして捉えやすいように、「貧困」をテーマにより良い世界の実現について考えます。日本語と同時に世界の平和について学び、日本語能力だけではなく、深い思考力、互いを理解し協調していく力を身につけます。(参照：凡人社)					
69 書籍	事典持続可能な社会と教育	日本環境教育学会 日本国際理解教育学会 教育出版	¥3,080	2019年 9月	
現行の学習指導要領の前文には、「持続可能な社会の創り手」を育むことが明記された。予測不可能なこの世界において、持続可能な社会の構築のために、今、何をすべきなのかを[持続可能な社会の構築][社会的・文化的課題][地域をめぐる課題と取り組み][教育方法の革新]などの観点から考えます。「未来の教育」の姿を模索する人に読んでほしい一冊。(参照：教育出版)					
70 書籍	学校と博物館でつくる国際理解教育 新しい学びをデザインする	中牧弘允 / 森茂岳雄 / 多田孝志 明石書店	¥3,080	2019年 8月 1日	
2002年の「総合的な学習の時間」の創設によって模索されるようになった、博物館と学校の連携。では、学校・博物館・学会の3者が連携・協働することでどのような学びが創造できるのだろうか。「新しい学びをデザインする」をテーマに、国立民族学博物館をフィールドにした総合的な学習の時間や社会科の授業実践の実例を紹介し、そこから見えてくる課題について検討します。(参照：明石書店)					
71 書籍	社会科における多文化教育 多様性・社会正義・公正を学ぶ	森茂岳雄 / 川崎誠司 / 桐谷正信 / 青木香代子 明石書店	¥2,970	2019年 6月 20日	
多文化教育について、学校教育のカリキュラムにある社会科(地理・歴史・公民)に焦点を当て、その背景となる理論の検討と具体的な実践の分析、提案を行います。小中高での実践事例や北米の事例研究を収録した多文化社会における社会科のあり方を考える一冊です。(参照：明石書店)					
72 書籍	カラフルな学校づくり ESD 実践と校長マインド	住田昌治 学文社	¥1,980	2019年 1月 15日	
気合を入れてESDを実践するよりも、気付いたら実践していた・・・!じわじわと浸透していく学校、教員、子ども、保護者、地域の変容。横浜の普通の公立小学校が元気を取り戻していくその日常と学校づくりを住田校長が語ります。すべての教職員に読んでもらいたい公立小学校の挑戦を描きます。(参照：学文社)					

付 録

海外移住資料館



入館無料

日本人の
海外移住、日系人の
歴史はもちろん、
多文化共生や人権に
についても学べます！

学校の授業や
様々な学びの場に
活用できる教材も
充実！

海外への移住者たちは、慣れない土地でどのような困難を乗り越えてきたのか。また、移住先国の人びととどのようにお互いを尊重し、共存を目指してきたのか。展示を通して、多文化共生について考えましょう。

SDGs学習 にも最適！

日本人移住者は現地の
持続可能な開発に貢献
してきました！



健康 & 教育



日本人移住者による病院や施設は、
良質な医療や福祉を現地の人々に提
供しています。また、日本式教育の良
さを取り入れた学校には、日系人で
ない子どもたちも多く通っています。



多文化共生



日本人移住者は、差別や困難を乗り
越えて、異なる文化や価値観を受容、
尊重し合いながら、多様な出自や背景
をもつ人々との共生を実現してきま
した。

農業 & 経済



日本人移住者は原生林を開拓して、
その土地を守りながら、地元の人と協
力してさまざまなイノベーションに取
組みながら作物をつくり地域経済に
貢献しています。



おすすめ
Point!
①

歴史・地理・公民, etc. 各教科の探求学習に！

「人口の変化と海外への移民」(中学歴史)、
「南アメリカ州」(中学地理)、「共に生きる共生」
(中学公民)などの学習にも最適です。
探求学習のアイデアはこちら！



『学習活動の手引き』

おすすめ
Point!
②

しっかり充実 館内ガイド！



ジュニア版の音声ガイドはもちろん、
見学の際に役立つ「パスポート」(ワーク
ブック)もご用意しています。

おすすめ
Point!
③

五感を通して 体験できる！



触れて、聞いて楽しむ展示、ゲームやクイ
ズもあるので、楽しみながら学ぶことが
できます。3D写真スポットもおすすめ！

事前予約は、海外移住資料館HP
「団体訪問」から！



校外学習や修学旅行に当館をご活用ください。リクエストや相談がございましたらお気軽にお問い合わせください！

海外移住資料館

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1

アクセス：「馬車道」駅から徒歩8分、「みなとみらい」駅から徒歩15分、「桜木町」駅から徒歩15分

お問合せ先：045-663-3257(代表) jicayic_jomm_info@jica.go.jp

資料館HP



11 か国の教育制度・学校文化ガイド集

JICA 横浜では、東南アジア・南アジア・中南米各国のうち、神奈川県内の小中学校に多く在籍する 11 か国を対象として、各国の教育制度・学校文化に関する調査を実施し、ガイド集としてとりまとめました。

内容

教育制度

- 学校体系と取得可能な資格・学位
- 就学手続き・学校区域指定の有無
- 学校教育費
- 進学要件
- 障害のある子どもの就学

教育内容

- カリキュラムの特徴
- 教科
- 進級制度

●算数カリキュラム

学校文化

- 1 年間の学校行事
- 1 日の流れ
- 学校のルール・習慣
- 学校生活に必要なもの
- 保護者の関わり



指導上の留意

<東南アジア 5 か国>



フィリピン



タイ



カンボジア



ラオス



ベトナム

<南アジア 4 か国>



バングラデシュ



ネパール



パキスタン



スリランカ

<中南米 2 か国>



ブラジル



ペルー

SCAN ME !



お問い合わせ先

JICA横浜 市民参加協力課

電話：045-663-3253（代表） メール：yictpp@jica.go.jp

教育関係者のための国際理解教育 / 開発教育プログラム

世界のことを考えるきっかけに!

1 JICA国際協力エッセイコンテスト

対象：中学生・高校生
募集期間：6月～9月上旬 結果発表：12月下旬

活用法 □ 夏休みの課題 □ 作文指導、小論文対策 □ 授業、特別活動、探究学習 □ 出前講座の事後学習

学校で習ったことやニュースで聞いたこと、
自分の体験から感じたことをエッセイで伝えよう!

JICAでは、開発途上国の現状や国際協力の必要性について理解を深め、自分たち一人一人に何ができるのかを考えることを目的に、中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを毎年実施しています。上位入賞者には、途上国で国際協力の現場を視察したり、現地での生活を体験できる海外研修が贈られます。夏休みの宿題や作文指導としてもご活用ください。

後援：外務省、文部科学省、各都道府県教育委員会、
日本私立中学高等学校連合会など

詳しくはコチラ [JICA エッセイコンテスト](#) [検索](#)

一人一人が小さな行動を起こして
いくことで誰もが住みやすい街が
世界中に増えていくと思う。
中学2年（受賞時） 山田桜来

身近な生活の中に沢山ある
「ちょっと地球に優しい行動」を
心がけるようにしていきたい。
高校2年（受賞時） 久保日向太

上位入賞者は、
海外研修の参加や
フェアトレード商品が贈呈!
応募者全員に参加賞、多数の作品を
応募いただいた学校には学校賞を
お贈りします。



海外研修の様子（マレーシア）

いつもの教室で、世界を体験してきた講師と学ぶ!

2 国際協力出前講座

開発途上国の現場で国際協力に携わったJICAの関係者を講師として学校や地域などに派遣し、国際理解教育／開発教育にお役立ていただいています。現場で活躍した人材だからこそ
の貴重な体験談をお届けし、受講者の質問にお答えします。ご希望のテーマに合わせた講座
内容を組み立てます。



活用法

- ☐ 総合的な学習の時間
- ☐ 道徳
- ☐ キャリア教育（国際協力の仕事とは）
- ☐ テーマ学習（文化祭や修学旅行の事前学習など）
- ☐ 教員研修・PTA講習会 など

内容

ご希望のテーマや内容に応じて、
講師を紹介します!

- 開発途上国の文化や生活を知る
- 開発途上国の暮らしから自分たちの生活を見つめなおす
- 国際協力を通じて自分の生き方を考える
- SDGsについて学ぶ

対象

小学生～一般

実施日・場所

実施日・時間ともご希望により調整可能です。
オンラインでの実施は要相談

費用

講師への謝金と交通費のご負担をお願いします。謝金の目安は講師1人
1時間あたりおよそ5,000円です。
詳しくはご相談ください。

国際協力出前講座

申込方法

1ヶ月
前までに
申込み

全国のJICA国内拠点、または各県の国際
協力推進員（JICAデスク）にお問合せ
ください。

申込書の
送付

申込書は JICA国内拠点ホームページから

JICA 国内拠点

[検索](#)

世界を学ぶ授業づくりに!

3 教員向け研修・セミナー

● 教員向け国内研修

JICA国内拠点では、国際理解教育／開発教育に興味関心のある先生方を対象に地域に特化した研修を実施しています。

詳しくはコチラ [JICA 教員研修](#) [検索](#)

● 教師海外研修

国際理解教育／開発教育に関心を持つ先生方を対象に、開発途上国を訪問して研修を実施しています。
研修後はその経験をもとに教材作成や授業実践を行います。

（一般教員向けコースと行政関係者および学校管理職向けコースがあります。）

詳しくはコチラ [JICA 教師海外研修](#) [検索](#)

● 開発教育セミナー

JICA国内拠点および地球ひろばでは国際理解教育／開発教育に関する各種セミナーを実施しています。

詳しくはコチラ [JICA 開発教育セミナー](#) [検索](#)

● 国際理解教育／開発教育指導者研修

国際理解教育／開発教育への興味・関心の高い先生方を対象に指導案作成・授業実践の更なるレベルアップに取り組めます。研修後は国際理解教育／開発教育の推進のリーダーとして取り組んでいただくことを目指します。

詳しくはコチラ [JICA 指導者研修](#) [検索](#)



4 国際理解教育／開発教育のための教材

JICAでは、国際理解教育／開発教育や総合的な学習の時間に役立つ教材を作成し、無料で提供しています。国際協力や地球規模の課題をテーマにした教材を、授業に合わせてご活用ください。

詳しくはコチラ [JICA 教材](#) [検索](#)

教材は、
JICA地球ひろばの
ホームページでも
ダウンロードする
ことができます。



映像教材



映像 小中高生向け／先生・教育関係者向け 世界につながる教室

ルワンダを舞台に「水と世界」「国際協力」が学べる映像教材です。2分～5分の短い映像なので、使い方・組み合わせは自由です。アクティブラーニング用の教材としてそのまま活用できます。授業で使うヒントも収録されています。

ルワンダ村落部に暮らす
ダニエリ君の一日



映像 パワーポイント 小中高生向け 地球ナビ

「地球ナビ」はSDGsの各ゴールについて、JICAの取組みも紹介しながら、データ、写真、クイズなどを駆使して分かりやすくまとめた動画コンテンツです。
JICA地球ひろば1階にある体験ゾーンでは、大型スクリーンで楽しみながら学べます。



冊子教材



冊子 小中学生向け 共につくる 私たちの未来

学習指導要領にもある「持続可能な社会の創り手」の育成を見据え、子供たちの生きる力を育むために、JICAの国際協力を切り口にSDGsの取組みをまとめた教材です。



冊子 小中高生向け つながる世界と日本

途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。「どうなってるの?世界と日本」のリニューアル版です。



冊子 教員向け 国際理解教育実践資料集

授業ですぐに活用できるよう、地球の現状や気候変動、需給バランスなどの諸問題に関する資料(データ、写真など)をまとめました。アフリカと自分たちのつながりや、教育の意義を考えさせるワーク案も掲載しています。



冊子 小中高生向け ぼくら地球調査隊

環境、保健、教育、食料、水問題など、私たちの身近に迫っている地球規模の課題について、マンガを読みながら学ぶことができます。

先生・生徒のお役立ちサイト



JICAでは、国際理解教育／開発教育の実践や授業で活用できる教材・素材等、様々な情報を提供する「先生・生徒のお役立ちサイト」を立ち上げました。学校で活用できる(生徒・教員向け)JICA開発教育支援プログラムも紹介しています。
是非、ご利用ください。

詳しくはコチラ [JICA 先生・生徒のお役立ち](#) [検索](#)



5 JICA地球ひろば訪問

入場無料

団体訪問は
要予約

JICA地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える課題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、途上国での活動体験談や開発教育教材を使った参加型学習(グループワーク)を組み合わせたプログラムを実施しています。修学旅行や社会科見学、総合学習等で、ぜひご利用ください!

プログラム例 120分

※プログラム時間と内容についてはご相談ください。

40分

・体験ゾーン見学
(探検シートをもとに館内を見学)

20分

・JICAの事業や日本の国際協力について説明

50分

・国際協力(青年海外協力隊等)の体験談または参加型学習(グループワーク)

10分

アンケート記入

ここに注目!

地球案内人

開発途上国で活動した経験を持つ地球案内人が、展示を分かりやすくご案内します。

※体験ゾーンの展示は4ヶ月に1回程度更新されます。

活用法

- ☐ 社会科見学
- ☐ テーマ学習
- ☐ 修学旅行
- ☐ 教員研修 など

内容

ご希望のテーマや内容に応じて、プログラム内容を組み立てます!

- 体験ゾーンの見学
- JICAと日本の国際協力について
- 国際協力(青年海外協力隊等)の体験談
- 地球体験学習
※テーマ:環境や命など
- 食事を通じた異文化理解

事前事後学習もご相談ください。

対象

小学校高学年 ~ 一般

人数

1名~80名程度

※団体での見学プログラムは要予約

実施日

通年 月曜日~日曜日
(第1・3日曜日、JICA地球ひろばの休館日を除く)

費用

無料

JICA地球ひろば訪問

申込方法

1ヶ月前
までに
電話で予約

希望日時、訪問者人数、希望内容等をお伝えください。予約状況は、JICA地球ひろばホームページの「訪問カレンダー」で確認できます。

地球案内人デスク直通フリーダイヤル

0120-76-7278 (TEL: 03-3269-9090)

申込書の
送付

申込書は JICA地球ひろばホームページから

JICA地球ひろば 訪問 検索

FAX または Eメールで送付してください。

FAX: 03-3269-3419 chikyuhiroba@jica.go.jp

JICA地球ひろば

市民参加協力事業(開発教育支援等)の全国拠点として、国際協力に関心のある皆さまを応援するさまざまな事業を実施しています。

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

☎ 代表番号 03-3269-2911

✉ 地球ひろば推進課 mptgp@jica.go.jp

● 開館時間

体験ゾーン: 平日・土日祝 10:00~18:00
定休日 第1・3日曜日、年末年始

交流ゾーン: 9:00~21:30 定休日 年末年始

J's Cafe: 平日 11:30~14:00
定休日 日曜日、祝日、年末年始
(土曜日の営業はHPをご確認下さい)

JICA図書館: 事前予約制
定休日 土日祝日、館内整理日(各月最終平日)、年末年始



※団体訪問等での駐車場の利用についてはお問合せください。

JICAのメールマガジンに登録しよう!

■ JICA地球ひろばメルマガ

JICA地球ひろばや関東近郊のイベント情報などを隔週火曜日に配信しています。



■ 開発教育メルマガ

国際理解教育/開発教育の推進に向けて、実践に役立つ情報を配信しています。



Twitter、Facebook、YouTubeでも最新情報を配信中!





Photo : JICA / Seiji Shinohara

言葉にすれば、
世界を動かす力
になる。

募集期間：毎年6月上旬～9月上旬 郵送・オンラインどちらでも応募OK！

入賞発表：12月下旬 JICA HPにて

文字数： 中学生の部 本文1,200文字以内
高校生の部 本文1,600文字以内

詳細はこちら



3つのポイント

- 1 SDG s ・探究学習のアウトプットに！
- 2 海外研修等の副賞、参加賞あり！
- 3 入賞経験を活かし総合型選抜・推薦入試に出願！

JICA国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト

学校での活用事例

1 総合的な学習(探究)の時間で活用！ ～地域や世界の課題、SDGsを学び、考える～



- ① 外部団体と連携し、ボランティア活動等に参加し「体験」する
- ② 体験を通して「感じたこと」「気づいたこと」「やってみたいこと」を整理し「気づきを得る」
- ③ 学んだことや周囲に伝えたいことをJICAエッセイコンテストで自分の言葉で「表現する」

2 社会科の地理的分野(中学校)、 地理総合(高等学校)の授業で活用！



- ① 世界の諸地域の特色や課題を学ぶ
- ② 知識を活用してテーマについて話し合う
- ③ 言葉にして表現し、JICAエッセイコンテストへ応募

3 学校の図書館、JICA出前講座を活用した学び



- ① JICA国際協力出前講座で現地の話を聞く
- ② 図書館に「夏季課題JICAエッセイコンテストコーナー」を設置し生徒が手に取って見やすい環境づくり
- ③ エッセイ書き方ガイド～実践ワークシート～を配布し各自で活用
- ④ 生徒が書いたものをそのまま応募も可能(校内選考不要！)

栄養士協力のもと、「国際週間」として給食で
海外料理を再現した学校も！



副賞の海外研修(2021年/マレーシア)



出前講座

過去のテーマ

地球に生きる私たち
～ 未来へつなげるために ～

世界とつながる私たち
～ 未来のための小さな一歩 ～

私たちと地球の新しい未来

JICA情報はこちら！



教材を探す
(ワークシートあり！)



出前講座



地球ひろば



国際キャリア総合情報サイト
JICA PARTNER

[発行]

独立行政法人 国際協力機構（JICA）横浜センター

TEL：045-663-3251 FAX：045-663-3265

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1

[編集]

JICA 地球ひろば・教員向け研修運営事務局

一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

E-mail：jica-edu@j-gift.org

TEL：03-4577-6767

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-15-19 MG 目黒駅前ビル 2 階

[発行] 2024 年 3 月

